

ORiN2

プログラミングガイド

Version 1.0.12.0

September 7, 2012

【備考】

【改版履歴】

日付	版数	内容
2006-02-23	1.0.0.0	初版作成.
2006-07-19	1.0.1.0	RCW の GAC への登録方法を追記. Java サンプル追記.
2007-04-23	1.0.2.0	インストーラによる GAC への CAO と CaoSQL RCW の自動登録.
2008-07-16	1.0.3.0	一部加筆.
2009-06-12	1.0.4.0	CaoConfig のインポート・エクスポート機能追加
2009-07-31	1.0.5.0	RCW の GAC への登録方法を追記
2010-02-10	1.0.6.0	LabVIEW によるクライアント作成, エラーコードを追加
2010-06-08	1.0.7.0	ORiN2SDK インストール状況の確認方法を追加
2011-04-27	1.0.8.0	C#によるサンプル作成追加
2011-12-22	1.0.9.0	エラーコード追加
2012-07-10	1.0.10.0	エラーコード追加
2012-08-24	1.0.11.0	エラーコード修正
2012-09-07	1.0.12.0	エラーコード修正

目次

1. はじめに	6
2. CAOクライアントの実装	8
2.1. 概要	8
2.2. 基礎知識	9
2.2.1. アーリーバインディングとレイトバインディング	9
2.2.2. オブジェクトの生成と管理	10
2.2.3. 非同期処理	12
2.2.4. COMで使用する変数型	13
2.2.5. データの記述方式	19
2.2.6. ログ出力	20
2.2.7. エラーコード	21
2.3. ORiN2 SDKのインストール状況	23
2.4. CAOクライアントの実装	24
2.4.1. コントローラのオープン	24
2.4.2. 変数の取得と設定	25
2.4.3. システム変数の取得と設定	25
2.4.4. イベント処理	26
2.5. VB.NETによるクライアント作成	29
2.5.1. RCWのGACへの登録	29
2.5.2. プロジェクト作成時の設定	29
2.5.3. オブジェクト削除時の注意点	30
2.5.4. イベント取得方法	31
2.6. その他言語によるクライアント作成	32
2.6.1. C++によるクライアント作成	32
2.6.2. C言語によるクライアント作成	36
2.6.3. C#によるクライアント作成	38
2.6.4. Delphiによるクライアント作成	41
2.6.5. Javaによるクライアント作成	44
2.6.6. LabVIEWによるクライアント作成	49
2.7. CAOの特殊な機能	51
2.7.1. CRD切り替え機能	51
2.7.2. オブジェクト自動登録機能	51
2.7.3. メソッド動的追加機能	52

3. CRDプログラミングガイド	53
3.1. 概要	53
3.2. 基礎知識	53
3.2.1. XMLとは	53
3.2.2. DOM	54
3.2.3. XMLパーサ	54
3.2.4. XMLスキーマ	54
3.3. CRDファイルとCRDプロバイダ	54
3.4. CRDファイルの作成	56
3.4.1. ヘッダとルート要素の作成	56
3.4.2. 静的データ定義	56
3.4.3. システムコンフィギュレーション定義	57
3.4.4. デバイスのケイパビリティ定義	57
3.5. CRDサンプル	59
3.5.1. 静的データの定義サンプル	59
3.5.2. システムコンフィギュレーション定義サンプル	60
3.5.3. デバイスのケイパビリティ定義サンプル	60
4. CAPプログラミングガイド	63
4.1. 概要	63
4.2. 基礎知識	63
4.2.1. SOAP	63
4.3. CAPプロバイダとCAPリスナ	63
4.4. 環境構築	65
4.4.1. サーバ側の設定	65
4.4.2. クライアント側	72
4.5. サンプルプログラム	72
5. 環境設定	74
5.1. DCOM設定手順	74
5.1.1. 準備	74
5.1.2. WindowsNT / 2000 での設定項目	75
5.1.3. Windows9xでの設定項目	81
5.1.4. Windows XPでの設定項目	82
5.1.5. Windows XP SP2 での設定項目	87
5.1.6. DCOMの設定確認	91

6. CaoConfig	94
6.1. 画面構成.....	94
6.1.1. メニュー	94
6.1.2. Cao Engineタブ	95
6.1.3. Cao Providerタブ	98

1. はじめに

ORiN (Open Robot/Resource interface for the Network)は、ロボットを始めとする各種FA機器やデータベースなど、さまざまなリソースの標準的なインタフェースを提供するミドルウェアです。このORiNを利用することにより、メーカーや機種に依存しないアプリケーションを開発できるようになります。ORiN2 は図 1-1に示すように、次の三つの基本技術から構成されています。

- (1) CAO(Controller Access Object)
- (2) CRD(Controller Resource Definition)
- (3) CAP(Controller Access Protocol)

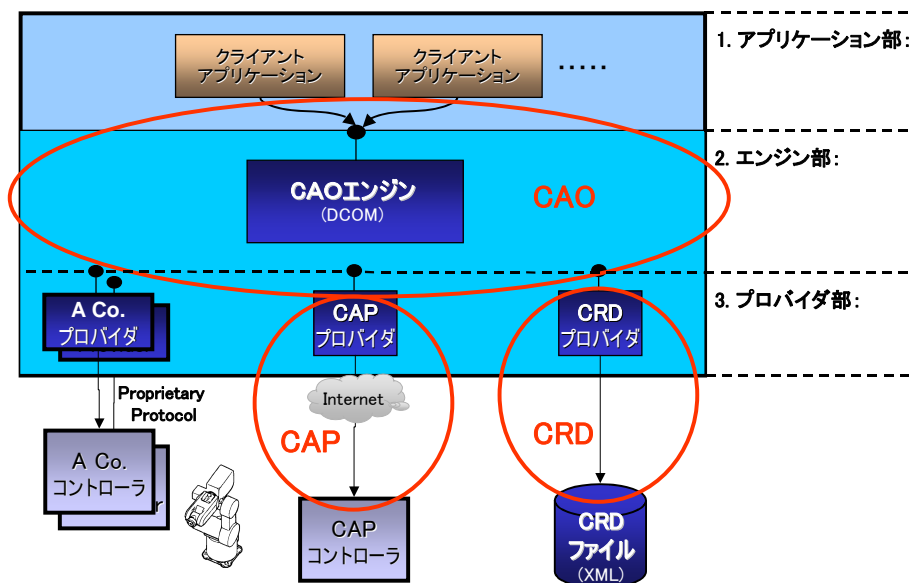


図 1-1 ORiN2 の三つの基本技術

CAO とは、クライアントアプリケーションに対して、ロボットコントローラにアクセスするためのインタフェースを提供する「標準プログラムインタフェース」です。CAO は分散オブジェクト技術をベースに開発され、当初からの対象である産業用ロボットだけでなく、PLC(Programmable Logic Controller)や NC 工作機などにも適用され、その応用範囲を広げています。

次に CRD とは、ロボットコントローラが持つリソース情報を、ロボットメーカーに依存することなく XML ファイルで共有するための「標準データスキーマ」です。CAO が API の共通化であるのに対して、CRD はデータ表現の共通化を実現するものとなっています。CRD は XML 技術をベースに開発され、メーカーごとに異なるさまざまなデータを 1 つの CRD スキーマで表現することができます。CAO と同様に CRD の基本データスキーマの適用範囲はロボットに限定されず、“生産情報”なども表現することができます。

CAP は、インターネット経由で CAO プロバイダにアクセスするための「インターネット向け通信プロトコル」です。CAP は SOAP(Simple Object Access Protocol)技術をベースに開発され、ORiN アプリケーション開発

者にインターネットを意識させないで遠隔のコントローラへアクセスする機能を提供します。

本書はこの三つの基本技術であるCAO/CRD/CAPを対象にしたプログラミングガイドです。第2章は「CAOクライアントの実装」手順を、第3章では「CRDファイルの作成」手順を、そして第4章では「CAPによるリモート接続」手順について解説します。それぞれの対象者を表 1-1に示します。各章は前半でその章に必要な基礎知識を、後半で具体例を交えた実装方法を解説します。

表 1-1 本書の対象者

章	内容	対象
2章(p.8)	CAO クライアントの実装	ORiN アプリケーション開発者
3章(p.53)	CRD ファイルの作成手引き	ロボットベンダ, ORiN アプリケーション開発者
4章(p.63)	CAP によるリモート接続	ORiN アプリケーション開発者

また、5章では、CAOプロバイダをリモートで利用するためのDCOMの設定方法を解説します。6章では、ORiN2 SDK付属のツール、CaoConfigの利用方法について解説します。

2. CAOクライアントの実装

2.1. 概要

冒頭に述べたように CAO は分散オブジェクト技術をベースに開発されています。ORiN2 SDK では、この分散オブジェクト技術に、マイクロソフト社の DCOM(Distributed Component Object Model)を実装しています。この DCOM 版 CAO は、C++, JAVA, Visual Basic などさまざまなプログラム言語から使うことができます。

本章では、その中でも入門に最適な Visual Basic6.0(以下 VB6 と記します)を用いて解説をおこないます。本章の構成は、前半で VB6 の基礎知識としてオブジェクト作成の方法を解説します。後半では、ORiN2 SDK の標準プロバイダである、Blackboard プロバイダを利用して、変数クラスオブジェクトを扱う方法やイベント処理を使った例を交えながら解説をおこないます。

今回サンプルとして利用する Blackboard プロバイダは、複数のクライアントアプリケーション間で変数テーブルを共有するための機能を提供しています。このプロバイダはオブジェクトとしては、変数オブジェクトしか持っていないですが、イベントやシステム変数などの機能を備えているので、CAO プロバイダの一通りの機能を体験することができます。

以下に CAO のオブジェクトモデルを示します。

RAO2.0 (CAO) のオブジェクトモデル

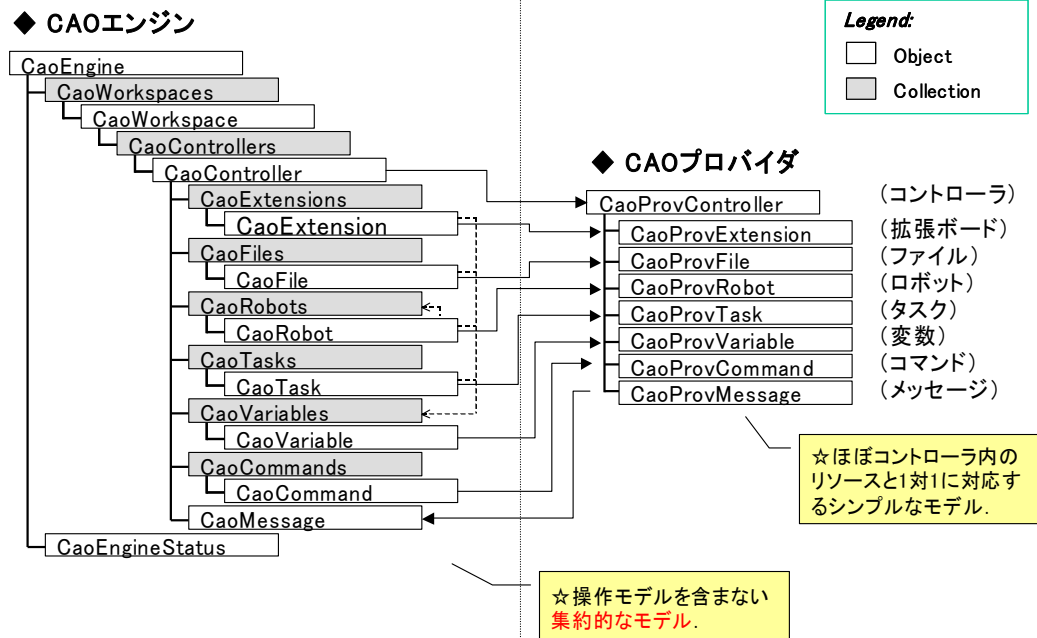


図 2-1 CAOのオブジェクトモデル

2.2. 基礎知識

2.2.1. アーリーバインディングとレイトバインディング

CAOクライアントにはオブジェクトの生成方法にアーリーバインディングとレイトバインディングの 2 種類の方法があります¹。ここではこの 2 つの違いとオブジェクトの作成方法について説明します。

2.2.1.1. アーリーバインディング

アーリーバインディングとは、タイプライブラリを参照することでコンパイル時にオブジェクトの型情報を取得する方法です。これにより、クライアントがオブジェクト情報を保持することでコンポーネントに型情報の問い合わせをする必要がなくなり処理速度が向上します。しかしコンパイル時にオブジェクト情報を組み込んでいるため、もしコンポーネントに変更があったときにはクライアントも再コンパイルする必要があり、柔軟性にかけるという弱点があります。

アーリーバインディングを行うためには以下の手順をおこないます。

- (1) VB6 のメニューバー内の[プロジェクト]→[参照設定]を選択します。
- (2) 図 2-2のようなダイアログが表示されますので、CAOエンジンのタイプライブラリ“CAO 1.0 タイプライブラリ”を追加します。



図 2-2 VB の参照設定画面

- (3) 以下のコードを VB6 で書くことでアーリーバインディングで CaoEngine オブジェクトを生成することができます。

```

' CaoEngine 型の変数を作成します
Dim caoEng As CaoEngine
' New キーワードでインスタンスを生成して、Set ステートメントで代入します。
Set caoEng = New CaoEngine

```

ここでCaoEngineはオブジェクトなのでSetステートメントを使用しないと代入ができません²。また、上記の例

¹ 本書ではアーリーバインディングを使用して解説をおこないます。

² VB.NET では、Set ステートメントが廃止されました。

で変数の作成時にCaoEngine型を呼び出せるようになっているのは(2)の参照設定を行ったためです。

2.2.1.2. レイトバインディング

前述のアーリーバインディングとは対照的にレイトバインディングはタイプライブラリを必要としません。よってコンパイル時にはオブジェクトの型を検査せず、実行時に動的に検査をおこないます。このため全ての処理を実行時に行うので処理速度はアーリーバインディングには劣ります。しかしコンポーネントから完全に独立しているためにコンポーネントに変更があっても再コンパイルする必要がなく、柔軟性に優れています。

レイトバインディングでは `CreateObject` を使ってオブジェクトを生成します。ここで `CreateObject` の定義を以下に示します。

```
CreateObject(class)
```

この関数は `class` で指定したオブジェクトへのポインタを返します。このとき `class` は“アプリケーション名. オブジェクト名”で構成されます。

レイトバインディングでオブジェクトを生成するためには以下のようなコードを書きます。

```
' Object 型の変数を作成
Dim caoEng As Object
' caoEng に CreateObject() で作成した CaoEngine オブジェクトを代入
Set caoEng = CreateObject("CAO.CaoEngine")
```

この例ではまず `Object` 型の変数を作成します。次に `CreateObject` で `CAO.exe` の `CaoEngine` オブジェクトを作成しています。

2.2.2. オブジェクトの生成と管理

COMのオブジェクトの生成には前述の`New`キーワードもしくは`CreateObject`関数を使用します。また作成したオブジェクトは`Set`ステートメントを用いて変数に代入をおこないます。そして、プログラム終了前に生成したオブジェクトを破棄する必要があります。オブジェクトを破棄する方法は変数に`Nothing`を代入します³。

例えば、`CaoEngine` オブジェクトを生成・破棄する場合は、以下のように記述します。

```
' CaoEngine 型の変数を宣言
Dim caoEng As CaoEngine
' オブジェクトの生成
Set caoEng = New CaoEngine
' オブジェクトの破棄
If Not caoEng Is Nothing Then
    Set caoEng = Nothing
End If
```

ここで実際の CAO クライアントでのオブジェクト管理について説明します。

ORiN2 SDKで生成・取得することのできるオブジェクトは、A.1 CAOエンジン関数一覧 に示すものがあります。今回のサンプルに利用するBlackboardプロバイダでは、以下のオブジェクトを利用します。

³ VB6 では、`Nothing` を代入することでオブジェクトを破棄することができますが、VB.NET では、明示的にオブジェクトを開放するための関数を呼び出す必要があります。詳細は 2.5.3 を参照してください。

- CaoEngine
- CaoWorkspace
- CaoController
- CaoVariable

これらのオブジェクトの生成は順番に行う必要があります。その順番以下に示します。

- (1) CaoEngine オブジェクトを New または CreateObject() で生成します。
- (2) CaoWorkspace オブジェクトを CaoEngine オブジェクトから取得します。(デフォルトワークスペース)
- (3) CaoController オブジェクトを CaoWorkspace オブジェクトから生成します。
- (4) CaoVariable オブジェクトを CaoController オブジェクトから生成します。

具体的な作成方法については2.4で解説しますが、その生成順番をまとめると図 2-3のようになります。

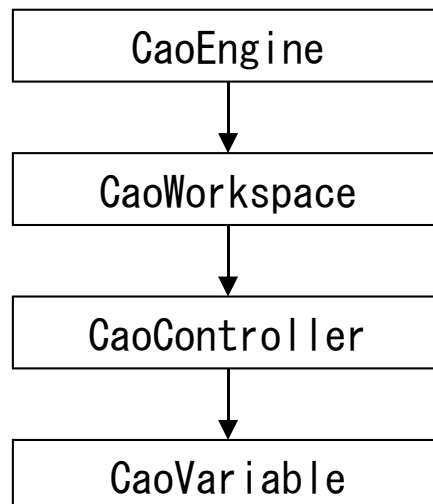


図 2-3 オブジェクトの生成・取得順序

ここで、前述したとおりCAOクライアント終了時には作成したオブジェクトを全て破棄しなければなりません。もしオブジェクトの破棄が正常に行われえない場合、CAOクライアント終了後もCAO.exe⁴が終了しないことがあります。CAOエンジンの破棄は、Nothingを代入するだけでよいのですが、CAOワークスペースを含むそれ以外のオブジェクト破棄は、生成・取得した逆の順番で、コレクションに保持されているオブジェクトを削除していきます。CAOの各オブジェクトはAdd...メソッドによって作成されます。このとき、作成されたオブジェクトは自動的にコレクションに自動的に登録されます。このため、クライアントがオブジェクトを破棄しても、コレクションに登録されていればオブジェクトは消滅しません。オブジェクトをコレクションから削除するにはRemoveメソ

⁴ CAO.exe とは、CAO エンジンの実行形式のファイルです。クライアントアプリケーション内で、CaoEngine オブジェクトを生成すると、自動的に起動します。

ッドを使用する必要があります。

以下に例を示します。この例では, CaoVariable, CaoController, CaoWorkspace, CaoEngine オブジェクトの順で破棄をおこなっています。

```

' caoCtrl の Variable コレクションから caoVar を削除します
If Not caoVar Is Nothing Then
    caoCtrl.Variables.remove caoVar.Index
    Set caoVar = Nothing
End If
' caoWS の Controller コレクションから caoCtrl を削除します
If Not caoCtrl Is Nothing Then
    caoWS.Controllers.remove caoCtrl.Index
    Set caoCtrl = Nothing
End If
' caoEng の Workspace コレクションから caoWS を削除します
If Not caoWS Is Nothing Then
    caoEng.Workspaces.Remove (caoWS.Index)
    Set caoWS = Nothing
End If
If Not caoEng Is Nothing Then
    Set caoEng = Nothing
End If

```

2.2.3. 非同期処理

CAO ではイベントを使った非同期処理をサポートしています。例えば, 今回サンプルとして利用する Blackboard プロバイダでは, 変数が追加された場合や変数の値が変更された場合にイベントが発生し, 非同期処理を実現することができます。

非同期処理では同期処理とは異なり, プロパティの戻り値では結果を返しません。イベント発生時にオブジェクトを保持している変数のイベントプロシージャが呼ばれます。よって非同期処理のとき, クライアントは結果を受け取る処理を, イベントプロシージャに実装する必要があります。

実際にCAOの非同期処理を利用するには以下の手順でおこないます⁵。

- (1) CaoController オブジェクトの宣言に“WithEvents”をつけます。以下にイベントプロシージャを持つ CaoController の宣言の例を示します。

```
Private WithEvents caoCtrl As CaoController
```

- (2) イベントプロシージャに処理を追加します。イベントプロシージャ名は, コントローラ名の後ろに “_OnMessage”を追加したものとなります。以下にイベントプロシージャの作成例を示します。

```

Private Sub caoCtrl_OnMessage(ByVal plCaoMess As CAOLib.ICaoMessage)
'ここに処理内容を記述してください。
End Sub

```

ここで, イベントプロシージャの引数となっている CAOLib.ICaoMessage に実装されているメンバ変数の詳細は, 各プロバイダユーザズガイドを参照してください。今回利用する BlackBoard プロバイダで

⁵ VB.NET では AddHandler メソッドにより, イベントプロシージャの設定をおこなう必要があります。詳細は 2.5.4 を参照してください。

は、イベントの種類、変化した変数の名前、値などが実装されています。

2.2.4. COMで使用する変数型

ここでは、COM で使われる変数型の中で、特徴的でかつプロバイダの実装においてもよく使われる BSTR、VARIANT、SAFEARRAY、HRESULT の 4 つの変数型を解説します。

2.2.4.1. BSTR

BSTRはワイド文字列と、その長さをDWORD型で持つデータ型です。BSTR型のポインタは、図 2-4に示すように、文字列の先頭を指し示しています。

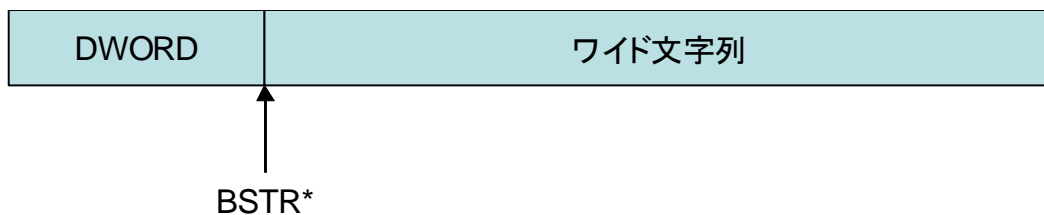


図 2-4 BSTRの構造

BSTR に値を代入するときは文字列の領域を確保する関数である SysAllocString()を使います。使用後は文字列の領域を SysFreeString()で解放する必要があります。また、文字列変換マクロ A2BSTR を利用することもできます。以下に BSTR に文字列“This is test.”を代入する例を示します。

```
// BSTR 型を宣言します。
BSTR bstrSample ;
// 文字列 “This is test.” を代入します。
// ワイド文字列なので “ ” で文字列を囲みます。
bstrSample = SysAllocString( L“This is test.” );
// 使い終わったら領域を解放します。
SysFreeString( bstrSample );
// 文字列変換マクロを利用して代入することもできます。
// (マクロ内でメモリが確保されています。 )
bstrSample = A2BSTR( "This is test." );
// 使い終わったら領域を解放します。
SysFreeString( bstrSample );
```

また BSTR には CComBSTR や _bstr_t といったラッパークラスがあります。これらのクラスでは“=”を使った文字列代入などで SysAllocString()をおこない、デストラクタで SysFreeString()をおこないます。これにより、文字列の領域の確保と解放を意識せずに BSTR を使用することができます。他にもオーバーロード済みの演算子等が用意されており、例えば演算子“+=”を用いることで簡単に文字列の追加ができます。

以下に BSTR に文字列“THIS IS TEST.”を代入する例を示します。

```
// BSTR 型を宣言します.
BSTR bstrVal;
// CComBSTR を 16 文字宣言します.
CComBSTR str(16);
// “=” により文字列を代入します.
str = L“This ”;
// Append メソッドにより文字列を追加します.
str.Append(L"is ");
// “+=” により文字列を追加します.
str += L“test.”;
// ToUpper メソッドにより文字列を大文字に変換します.
str.ToUpper();
// CComBSTR 型から BSTR 型にコピーします.
bstrVal = str.Copy();
// CComBSTR を開放します.
delete str;
```

2.2.4.2. VARIANT

VARIANT は多様なデータ型を扱うことができる構造体です。内部はデータ型を示す VARTYPE 型の vt と、格納される値の共用体から構成されています。

ここで基礎的なデータ型についての詳細を以下に示します。

表 2-1 VARIANT 型の共用体(一部)

タイプ	識別子	メンバ名	説明
BYTE	VT_UI1	bVal	文字(符号なし)
SHORT	VT_I2	iVal	short(符号つき)
LONG	VT_I4	lVal	long(符号つき)
FLOAT	VT_R4	fltVal	float(符号つき)
DOUBLE	VT_R8	dblVal	double(符号つき)
VARIANT_BOOL ⁶	VT_BOOL	boolVal	論理型(符号つき short として渡される)
SCODE	VT_ERROR	scode	ステータスコード(HRESULT)
DATE	VT_DATE	date	日付(double として渡される)
BSTR	VT_BSTR	bstrVal	文字列型
IUnknown*	VT_UNKNOWN	punkVal	インターフェースポインタ
IDispatch*	VT_DISPATCH	pdispVal	IDispatch インターフェースポインタ
SAFEARRAY*	VT_ARRAY	parray	配列型
	VT_EMPTY		値が入っていない

⁶ VT_BOOL 型に値を代入する場合、通常の BOOL 型の TRUE, FALSE を使用するのではなく、VARIANT_TRUE と VARIANT_FALSE を使用する必要があります。

この中で VT_EMPTY は値がないことを示す識別子です。

また、VARIANT は上記の値を参照渡しすることもできます。その場合、識別子と VT_BYREF の論理和をとることにより、参照渡しであることを識別します。

実際に VARIANT 型を使用するときには vt に使用する識別子を代入した後に、共用体メンバに値を代入します。この代入にはマクロを利用することもできます。以下に VARIANT に long 型の値 1000 を代入する例を示します。

```
// VARIANTDATE 型を宣言、初期化します。
VARIANT varSample;
VariantInit( &varSample );
// データ型を long に設定します。
varSample.vt = VT_I4;
// 1000 という値を代入します。
varSample.lVal = 1000;
```

次に、マクロを利用して VARIANT に long 型の値 1000 を代入する例を示します。

```
// VARIANTDATE 型を宣言、初期化します。
VARIANT varSample;
VariantInit( &varSample );
// データ型を long に設定します。
V_VT( &varSample ) = VT_I4;
// 1000 という値を代入します。
V_I4( &varSample ) = 1000;
```

上記の例のように新たに VARIANT を宣言したときには使用する前に必ず初期化を行う必要があります。初期化に VariantInit()を使用すると識別子は VT_EMPTY になり、VARIANT に値が入れられていないことを示します。

また BSTR 型や後述する SAFEARRAY 型では領域の割り当てを行うため VARIANT を解放する前に関数 VariantClear()で領域の解放をする必要があります。この関数ではリソースの解放が必要かどうかを識別子によって判断しています。以下に、VARIANT に BSTR 型の値“This is test.”を代入する例を示します。

```
// VARIANTDATE 型を宣言、初期化します。
VARIANT varSample;
VariantClear( &varSample );
// データ型を BSTR に設定します。
varSample.vt = VT_BSTR;
// This is test. という値を代入します。
varSample.bstrVal = SysAllocString(L"This is test.");
```

VARIANT 型同士を代入するときは、領域が割り当てられている可能性があるので、直接代入を行わず VariantCopy()を使うべきです。この関数はコピー先メモリに新たに領域を確保してデータをそこに転送します。

VARIANT には CComVariant や _variant_t といったラッパークラスがあります。これらのクラスはコンストラクタで VariantInit() を、デストラクタで VariantClear() をおこないます。これにより開発者は VARIANT の初期化と領域の解放を意識せずに VARIANT を使用することができます。これらのラッパークラスには、他にもオーバーロード済みの演算子等が用意されており、例えば演算子“=”を用いることで型やメモリ確保を意識せずに整数型や文字列等も直接代入することができます。以下に、CcomVariant を利用して long 型の値 2234 を代入する例を示します。

```
// CcomVariant 型の変数を, short int 型で宣言し, 値 1234 を代入します.  
CComVariant var(1234, VT_I2);  
// “=”を利用して, 値 2234 を代入します.  
var = 2234;  
// VARTYPE を VT_I2 から VT_I4 に変更します.  
var.ChangeType(VT_I4);
```

2.2.4.3. SAFEARRAY

SAFEARRAY とは、主にオートメーションで使用する配列型で、次元や要素数とデータを指すポインタのフィールドを持つ構造体です。COM では、SAFEARRAY を使うことで、プロセス間で配列のデータの受け渡しをおこなっています。SAFEARRAY は構造体ですが、使用するときは直接操作を行わず関数を使ってアクセスしなければなりません。

SAFEARRAY へのアクセスには以下の手順が必要となります。

- (1) SAFEARRAY の準備をする。
- (2) SAFEARRAY にアクセスする。
- (3) SAFEARRAY とのアクセスを閉じる。

上記の手順を詳しく説明します。

- (1) まず SAFEARRAYBOUND 型の構造体を宣言して生成する配列の構造を定義します。以下に SAFEARRAYBOUND の定義を示します。

```
typedef struct tagSAFEARRAYBOUND  
{  
    ULONG cElements;  
    LONG lLbound;  
} SAFEARRAYBOUND;
```

cElements は配列の要素数、lLbound はインデックスの下限値をあらわしています。例えばインデックス番号が 0 から始まる要素数 10 の配列を定義したい場合は、以下のように記述します。

```
SAFEARRAYBOUND bound = { 10, 0 };
```

ここで用意した SAFEARRAYBOUND は SafeArrayCreate() 関数をコールする時に使用されます。SafeArrayCreate() は SAFEARRAY の実体を作る関数です。以下に SafeArrayCreate() の定義を示します。


```
SAFEARRAY* SafeArrayCreate( VARTYPE vt, UINT cDims, SAFEARRAYBOUND rgsabound );
```

ここで vt は配列の型, cDims は配列の次元数, rgsabound は先程作成した配列の先頭アドレスです. これらを引数として SafeArrayCreate()は作成した SAFEARRAY へのポインタを返します. 以下に, SafeArrayCreate()で VT_I2 型の SAFEARRAY を作成する例を示します.

```
SAFEARRAY pSa = SafeArrayCreate( VT_I2, 1, &bound );
```

- (2) SAFEARRAY が持つデータ領域にアクセスするには SAFEARRAY の型に対応したアクセス用のポインタを用意します. すなわち VT_I4 で SAFEARRAY を作ったときは long 型のポインタを用意します. 次に SafeArrayAccessData() をコールして SAFEARRAY にアクセスします. SafeArrayAccessData()の定義を以下に示します.

```
HRESULT SafeArrayAccessData( SAFEARRAY * psa, void HUGEP ** ppvData );
```

このとき psa はアクセスする SAFEARRAY へのポインタ, ppvData は配列データへのアクセスポインタです. これにより配列データにアクセスができるようになります. 例えば, SAFEARRAY* pSa に long* lData でアクセスする場合は以下のように記述します.

```
SafeArrayAccessData( pSa, (void**)&lData );
```

- (3) SAFEARRAY への処理が終了したら, SafeArrayUnaccessData()をコールしSAFEARRAY へのアクセスを閉じる必要があります. SafeArrayUnaccessData()の定義を以下に示します.

```
HRESULT SafeArrayUnaccessData( SAFEARRAY* psa );
```

この関数は引数に SAFEARRAY へのポインタを指定し, この引数として指定された SAFEARRAY へのアクセスを閉じます. 以下に SAFEARRAY* pSa へのアクセスを閉じる例を示します.

```
SafeArrayUnaccessData( pSa );
```

最後に SAFEARRAY が不必要になったときは SafeArratDestroy()によって SAFEARRAY に割り当てられた領域を開放します。SafeArrayDestroy()の定義は以下に示します。

```
HRESULT SafeArrayDestroy( SAFEARRAY* psa );
```

ここで引数は解放する SAFEARRAY へのポインタとなります。

最後に、SAFEARRAY を使用した処理の全体がわかる例を示します。この例では、作成した SAFEARRAY に short 型の配列を代入しています。

```
// short 型の配列を用意
short sample[10] = { 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10 };
// SAFEARRAY のポインタを宣言
SAFEARRAY* pSa;
// SAFEARRAY の実体が存在しないので作成する。
SAFEARRAYBOUND bound = { 10, 0 };
pSa = SafeArrayCreate( VT_I2, 1, &bound );
// SAFEARRAY にアクセスする。
short* iArray;
SafeArrayAccessData( pSa, (void**)&iArray);
for( int i = 0; i < 10; i++) {
    iArray[ i ] = sample[ i ];
}
SafeArrayUnaccessData( pSa );
```

(1)

(2)

(3)

上記の例は short 型の配列を SAFEARRAY の配列にコピーする処理です。

まず SAFEARRAY の実体が存在しないので作成する必要があります。そのために、リスト中の(1)に示すように、作成した SAFEARRAY へのポインタ(pSa)を用意します。次に SAFEARRAYBOUND 型で配列の構成を定義します。ここでは要素数 10、インデックス下限値は 0 とする配列を定義しています。そして SafeArrayCreate()により SAFEARRAY を作成します。今回格納するデータは short 型の配列なので、SAFEARRAY の型は VT_I2 となります。

次に SAFEARRAY のデータにアクセスするためにポインタを用意します。リスト中の(2)に示すように、今回は SafeArrayCreate()で VT_I2 の SAFEARRAY を作っている short 型のポインタ(iArray)を用意します。そして、SafeArrayAccessData()関数を呼び出します。ここで 2 番目の引数を(void**)とし関数の型に合わせたキャストを行っています。

SAFEARRAY にアクセスしている間は SAFEARRAY のデータへのポインタ(iArray)は配列データの先頭のアドレスを保持しています。例では short 型の配列のデータを SAFEARRAY にコピーしています。そしてコピーが終わると、リスト中の(3)に示すように、SafeArrayUnaccessData()でアクセスを閉じます。

上記例のように配列を一括で設定するのではなく、要素ごとに一つずつ設定したい場合には `SafeArrayPutElement()` を用います。 `SafeArrayPutElement()` の定義を以下に示します。

```
HRESULT SafeArrayPutElement( SAFEARRAY * psa, long * rgIndices, void * pv );
```

ここで、 `psa` はアクセスする `SAFEARRAY` へのポインタ、 `rgIndices` はアクセスする `SAFEARRAY` のインデックス、 `pv` は設定する値です。

以下に、作成した `SAFEARRAY` に `short` 型の配列を代入する例を示します。

```
// short 型の配列を用意
short sample[10] = { 1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10 };
// SAFEARRAY のポインタを宣言
SAFEARRAY* pSa;
// SAFEARRAY の実体が存在しないので作成する。
SAFEARRAYBOUND bound = { 10, 0 };
pSa = SafeArrayCreate( VT_I2, 1, &bound );
// SAFEARRAY にアクセスする。
for( int i = 0; i < 10; i++ ) {
    SafeArrayPutElement( pSa, &i, &sample[i] );
}
```

2.2.4.4. HRESULT

`HRESULT` はエラーコードを格納するための構造を備えた 32 ビットの数字データです。 `HRESULT` が持つエラーの種類は `<winerr.h>` によって多数用意されています。比較的重要と思われるエラーコードの一覧については表 2-4 を参照してください。

`HRESULT` にエラーコードを与えるには代入をおこないます。しかし関数の成功、失敗を判定するときに `HRESULT` を直接比較することは好ましくありません。 `SUCCEEDED()`、 `FAILED()` というマクロが用意されているので、これを使用してください。 `SUCCEEDED()` は引数の `HRESULT` が正常終了であれば真、それ以外は偽の値を返し、 `FAILED()` は引数の `HRESULT` が異常終了であれば真、それ以外は偽の値を返します。

以下に `HRESULT` に `S_OK` を代入して、 `FAILED()` を使って判定する例を示します。

```
// HRESULT 型の hr に S_OK を代入
HRESULT hr = S_OK;
// hr が S_OK かどうかを FAILED() で判定
if( FAILED( hr ) )
{
    // エラー処理
}
return hr;
```

2.2.5. データの記述方式

ORiN2 では、 `VARIANT` 型を文字列で表現する方法を規定しています。これにより、 `VARIANT` 型に対応していない環境においても、擬似的に `Variant` 型を扱えるようになります。このデータ記述方式は、 `RAC` の送信文字列や、 `CaoUPnP` のアイテム値の表現などに利用しています。

この書式は、以下に示すようにデータ型とデータ列をカンマ区切りで表現します。..

<データ型>, <データ列>

ここで <データ型> には `VARTYPE` 型で表記される整数値を示します。表 2-2 に使用できるデータ型とその

値を示します。

表 2-2 使用できるデータ型

データ型	値	意味
VT_I2	2	2 バイト整数型
VT_I4	3	4 バイト整数型
VT_R4	4	単精度浮動小数点型
VT_R8	5	倍精度浮動小数点型
VT_CY	6	通貨型
VT_DATE	7	日付型
VT_BSTR	8	文字列型
VT_BOOL	11	ブール型
VT_VARIANT	12	VARIANT 型
VT_UI1	17	バイト型
VT_ARRAY	8192	配列型

データ型が配列のときは、VT_ARRAY とデータ型の論理和で表記します。

データ列にはデータを文字列で表記します。配列データの表記は“,”(カンマ)で区切って表記します。

例 1)	2,100	型:	VT_I2	値:	100
例 2)	8,Sample	型:	VT_BSTR	値:	Sample
例 3)	8194,100,200,300	型:	VT_I2 VTARRAY	値:	100, 200, 300
例 4)	8200,Sample,Test	型:	VT_BSTR VTARRAY	値:	“Sample”, “Test”
例 5)	8,Sample,Test	型:	VT_BSTR	値:	“Sample,Test”

2.2.6. ログ出力

CAOエンジンには、CAO.exeのスタートやストップ、オブジェクトの生成・破棄などのなんらかの動作が行われた状態で、その記録をおこなうログ機能。ログの出力先には、コンソール、メッセージボックス、イベントビューア、デバッグビューア、テキストファイルの 5 種類を選択でき、この設定はCaoConfigでおこなうことができます。CaoConfigの利用方法については、「6CaoConfig」を参照してください。

CAO エンジンのログ出力タイミングには、おもに以下のようなものがあります。

- ・ CAO エンジンの起動時、終了エラー時。
- ・ CaoController や CaoVariable などのオブジェクト生成時、破棄時。
- ・ コントローラのスレッド、起動/終了、稼動/停止時。

- ・ CAOプロバイダからのメッセージイベントによるログ出力時⁷.

2.2.7. エラーコード

ORiN2 のエラーは、発生箇所となるモジュールが複数箇所に分かれています。以下に CAO モジュールで発生するエラーを示します。

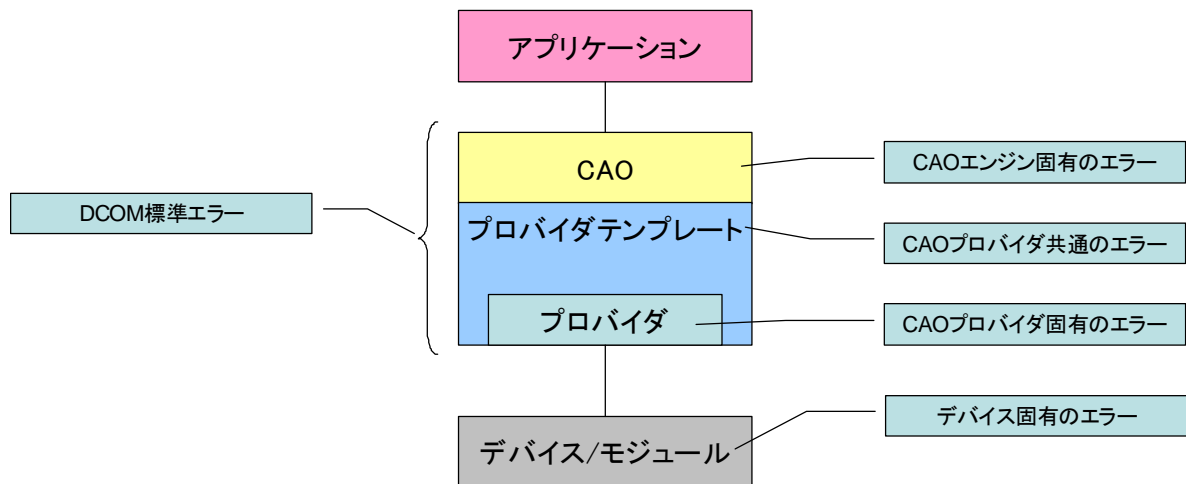


図 2-5 ORiN2 で発生するエラー

表 2-3 ORiN2 で発生するエラー種別

エラー種別	発生箇所	説明
DCOM 標準エラー	-	DCOM で発生する一般的なエラーです。 詳細は表 2-4を参照してください。
CAO エンジン固有エラー	CAO エンジン	CAO エンジンで独自に定義されたエラー です。 詳細は、表 2-5を参照してください。
CAO プロバイダ共通エラー	CAO プロバイダテンプレート	CAO プロバイダテンプレートで独自に定 義されたエラーです。 詳細は、表 2-6を参照してください。
CAO プロバイダ固有エラー	CAO プロバイダ	各 CAO プロバイダで独自に定義されたエ ラーです。 詳細は、各プロバイダのユーザーズガイド を参照してください。

⁷ CAOプロバイダのメッセージイベントによりログを出力する方法は、『[CAOプロバイダ作成ガイド](#)』の「3.4.1.メッセージイベントによるログ出力」を参照してください。

デバイス固有エラー	デバイス	デバイスドライバ固有のエラーです。 詳細は、各デバイスドライバのマニュアルを参照してください。
-----------	------	--

表 2-4 DCOM標準エラー(一部)

エラー名	エラー番号	説明
S_OK	0x00000000	正常終了(0x0)論理型の TRUE 値を返す。
S_FALSE	0x00000001	正常終了(0x1)論理型の FALSE 値を返す。
E_UNEXPECTED	0x8000FFFF	破局的な障害が発生した。
E_NOTIMPL	0x80004001	実装されていない。
E_OUTOFMEMORY	0x8007000E	必要なメモリの割り当てに失敗
E_INVALIDARG	0x80070057	無効な引数が 1 つ以上存在している。
E_POINTER	0x80004003	関数に無効なポインタが渡された。
E_HANDLE	0x80070006	関数に無効なハンドルが渡された。
E_ABORT	0x80004004	処理が中止された。
E_FAIL	0x80004005	予期しない障害が発生した。
E_ACCESSDENIED	0x80070005	一般的なアクセス拒否エラーが発生した。
E_WINDOWS_MASK	0x8007xxxx	Windows の標準エラーコード(16bit)を xxxx (下位 2 バイト)に格納します。 例) エラーコード: 2 (ファイルが見つからない) → 0x80070002

表 2-5 CAO エンジン固有エラー

エラー名	エラー番号	説明
E_CAO_SEM_CREATE	0x80000200	同期セマフォの生成に失敗しました。
E_CAO_PROV_INVALID	0x80000201	CAO プロバイダ名が不正です。
E_CAO_COMPUTER_NAME	0x80000202	コンピュータ名の取得に失敗しました。
E_CAO_VARIANT_TYPE_NOSUPPORT	0x80000203	VARIANT 型にサポートされていない型が指定されました。
E_CAO_OBJECT_NOTFOUND	0x80000204	対応するオブジェクトが見つかりませんでした。
E_CAO_COLLECTION_REGISTERED	0x80000205	既にコレクションに登録されています。

E_CAO_THREAD_CREATE	0x80000207	ワーカースレッドの生成に失敗しました。
E_CAO_REMOTE_ENGINE	0x80000208	リモート CAO へのアクセスに失敗しました。
E_CAO_REMOTE_PROVIDER	0x80000209	リモート CAO プロバイダへのアクセスに失敗しました。
E_CAO_NOT_WRITABLE	0x8000020a	書き込みできません。
E_CAO_CMD_EXECUTE	0x8000020b	コマンドが実行中です。
E_CAO_PROV_NO_LICENSE	0x8000020c	プロバイダに対応したライセンスがありません。
E_CAO_PRELOAD	0x8000020d	CRD プレロードに失敗しました。

表 2-6 CAO プロバイダ共通エラー

エラー名	エラー番号	説明
E_CRDIMPL	0x80000400	CRD ファイルが不正です。
E_CAOP_SYSTEMNAME_INVALID	0x80000401	システム名が不正です。
E_CAOP_SYSTEMTYPE_INVALID	0x80000402	システムタイプが不正です。
E_CANCEL	0x80000403	コマンドがキャンセルされました。
E_TIMEOUT	0x80000900	タイムアウト
E_NO_LICENSE	0x80000901	ライセンスがありません。
E_NOT_CONNECTED	0x80000902	接続が確立していません。
E_WINDOWS_MASK	0x8090xxxx	Windows の標準エラーコード(16bit)を xxxx (下位 2 バイト)に格納します。 例) エラーコード: 2 (ファイルが見つからない) ⇒ 0x80900002 (注) このエラーコードは 0x8007xxxx に修正されました。詳細は表 2-4 を参照してください。
E_WINSOCK_MASK	0x8091xxxx	Winsock のエラーコード(16bit)を xxxx (下位 2 バイト)に格納します。 例) エラーコード: 10061 (接続拒否) ⇒ 0x8091274D

2.3. ORiN2 SDKのインストール状況

ORiN2 SDKのインストール状況の確認方法については、「[ORiN2 SDK ユーザーズガイド](#) 3.7.ORiN2 SDKインストール状況の確認」を参照してください。

2.4. CAOクライアントの実装

2.4.1. コントローラのオープン

コントローラをオープンするには以下の手順を行います。

- (1) オブジェクトを保持するための変数を用意します。
- (2) CaoEngine オブジェクトを生成します。
- (3) CaoWorkspace オブジェクトを取得もしくは生成します。
- (4) CaoController オブジェクトを生成します。

以下に詳しい内容を説明します。ここではアーリーバインディングをおこない、オブジェクトの生成には New キーワードを用います。

- (1) 最初にオブジェクトを保持するために変数を宣言します。ここでコントローラオープンに必要なオブジェクトは CaoEngine オブジェクトと CaoWorkspace オブジェクトです。また、AddController メソッドによって CaoController オブジェクトが生成されます。よってこの三つに対応する変数を用意します。以下に、プライベート変数として各オブジェクト型の変数を宣言する例を示します。

```
Private caoEng As CaoEngine      ' Engin オブジェクト  
Private caoWs As CaoWorkspace    ' CaoWorkSpace オブジェクト  
Private caoCtrl As CaoController ' Controllie オブジェクト
```

- (2) 次にCaoEngineオブジェクトを生成します。これは前述の2.2.1.1と同様にNewキーワードで生成して、Setステートメントで変数に代入します。

```
Set caoEng = New CaoEngine
```

- (3) CaoEngine オブジェクトは生成時にデフォルトの CaoWorkspaces, CaoWorkspace オブジェクトを一つずつ作成しています。デフォルトの CaoWorkspace オブジェクトを取得するときは CaoWorkspaces.Item(0)を使用します。以下にデフォルトの CaoWorkspace オブジェクトを取得する例を示します。

```
Set caoWS = caoEng.CaoWorkspaces.Item(0)
```

- (4) CaoController オブジェクトは CaoWorkspace オブジェクトの AddController メソッドで生成することができます。ここで AddController メソッドの定義を示します。

```
AddController (BSTR bstrController, BSTR bstrProvider, BSTR bstrMachine, BSTR bstrPara)
```

このメソッドの引数は、左からロボットコントローラ名、プロバイダ名、マシン名、パラメータとなっています。そして戻り値として、CaoController オブジェクトを返します。ここで登録されているプロバイダ名は CaoEngine オブジェクトの ProviderNames メソッドを用いて配列で取得することができます。また、パラメータはプロバイダごとに内容が異なるので、詳細は各プロバイダユーザーズガイドを参照してください。

以下に Blackboard プロバイダを利用した AddController メソッドの使用例を示します。

```
' CaoCtrl と CaoWS はオブジェクトを保持するための変数です
Set CaoCtrl = CaoWS.AddController("bb1", "CaoProv.Blackboard", "", "")
' 第3引数, 第4引数は省略することも可能です
Set CaoCtrl = CaoWS.AddController("bb1", "CaoProv.Blackboard")
```

2.4.2. 変数の取得と設定

変数を取得・設定するためには、先に CaoVariable オブジェクトを生成する必要があります。

- (1) CaoVariable オブジェクトを生成するためには、CaoController オブジェクトの GetVariable メソッドを用います。以下にその定義を示します。

```
AddVariable(BSTR bstrName, BSTR bstrOption)
```

このとき、bstrName は変数名、bstrOption は変数取得時のオプションです。このメソッドは戻り値として CaoVariable オブジェクトを返します。以下にこのメソッドの使用例を示します。ここで、bstrOption は省略することが可能です。以下に、変数名“Val”の CaoVariable オブジェクトを取得する例を示します。

```
' CaoCtrl と CaoVar はオブジェクトを保持するための変数
Set CaoVar = CaoCtrl.AddVariable("Val")
```

CaoVariable オブジェクトを生成した後、変数の値を設定・取得するためには、CaoVariable オブジェクトの Value プロパティを参照します。以下に Long 型の値“1000”を設定した後、変数を取得する例を示します。

```
' CaoCtrl と CaoWS はオブジェクトを保持するための変数
Dim iData as Integer
iData = 1000
' 変数に iData の値を設定します。
CaoVar.Value = iData
' 変数の値を取得して iData に代入します。
iData = CaoVar.Value
```

2.4.3. システム変数の取得と設定

プロバイダによっては、プロバイダ特有のシステム変数が用意されていることがあります。今回利用する Blackboard プロバイダでは、以下のようなシステム変数があります。詳細については、各プロバイダのユーザーガイドを参照してください。

- @COUNT ユーザ変数の数
- @CURRENT_TIME 現在の時刻
- @VERSION バージョン

以下に、システム変数として現在の時刻を取得する例を示します。

```
' システム変数@CURRENT_TIME を取得する
Set caoVar = caoCtrl.AddVariable("@CURRENT_TIME")
' 変数オブジェクトから現在の時刻を取得する
Dim var as Date
```

```
var = caoVar.Value
```

2.4.4. イベント処理

先にも述べたように、Blackboard プロバイダでは、変数が追加された場合や変数の値が変更された場合にイベントが発生します。

イベントの発生を確認するために、簡単なサンプルプログラムを作成します。まずは、VB6 でテキストボックスを三つ持ったフォームを作成し、以下のようなコードを記述してください。

List 2-1	Form1.frm
-----------------	------------------

```
Dim caoEng As CaoEngine
Dim caoWs As CaoWorkspace
Dim WithEvents caoCtrl As CaoController

' CAO エンジンの生成と Blackboard プロバイダへの接続
Private Sub Form_Load()
    Set caoEng = New CaoEngine
    Set caoWs = caoEng.Workspaces(0)
    Set caoCtrl = caoWs.AddController("BB1", "CaoProv.Blackboard")
End Sub

' Blackboard コントローラのイベントプロシージャ
Private Sub caoCtrl_OnMessage(ByVal pICaoMess As CAOLib.ICaoMessage)
    Text1.Text = pICaoMess.Description
    Text2.Text = pICaoMess.Destination
    Text3.Text = pICaoMess.Value
End Sub
```

それでは、アプリケーションを起動し、イベントの発生を確認してみましょう。

まず、作成したアプリケーションを起動すると、図 2-6に示すように、テキストボックスには、デフォルトの文字列しか表示されていません。



図 2-6 サンプルアプリケーションの起動

次にイベントを発生させます。イベントの発生は、ORiN2 SDKに付属しているCaoTesterを利用します。CaoTesterの利用方法については、[CaoTesterユーザズガイド](#)を参照してください。

まず、CaoTesterを起動し、ワークスペース子ウィンドウに図 2-7に示すように、コントローラ名(Controller Name)に“BB1”と入力し、プロバイダ名(Provider Name)に“CaoProv.Blackboard”を選択して、Addボタンを押下してください。

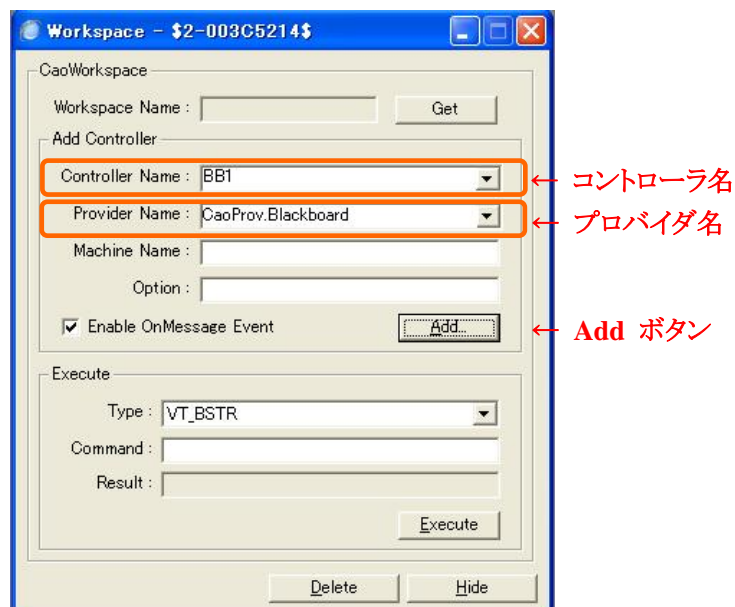


図 2-7 Blackboardプロバイダへの接続

Addボタンを押下すると、図 2-8に示すようなコントローラ子ウィンドウが作成されます。ここで、図に示すように、Variableタブを選択し、変数名(AddVariableのName)に“test”と入力し、Addボタンを押下してください。

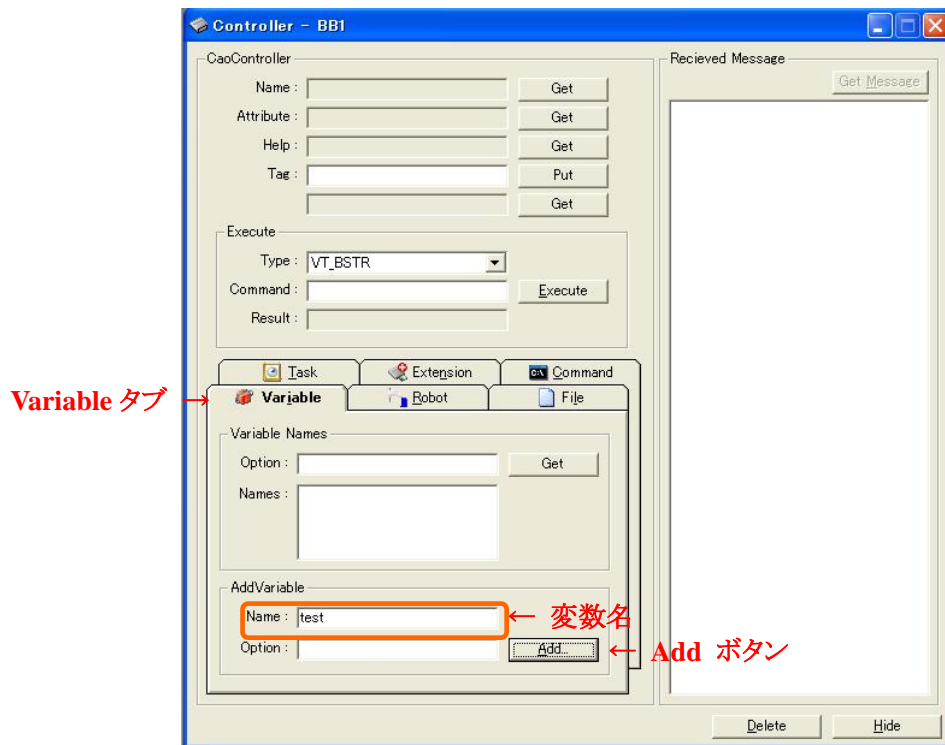


図 2-8 変数オブジェクトの追加

Addボタンを押下すると、図 2-9に示すような、変数子ウィンドウが表示されます。ここで、変数の型(Type)に“VT_I4”，変数値(Value)に“1234”と入力し、Putボタンを押下してください。

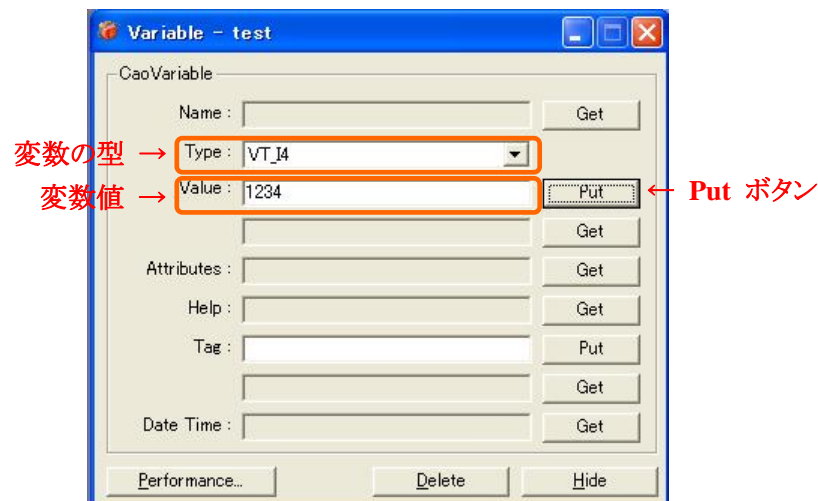


図 2-9 変数の書込み

ここで、最初に起動していた、サンプルプログラムのウィンドウを見てください。図 2-10に示すように、イベ

ントが発生し、イベントプロシージャの処理により、テキストボックスに、イベントの種類、変数の名前、変数の値が表示されていることが分かります。



図 2-10 イベントの発生

2.5. VB.NETによるクライアント作成

2.5.1. RCWのGACへの登録

VB.NET クライアントは、Runtime Callable Wrapper (RCW) と呼ばれるモジュールを介して、COM コンポーネントにアクセスをおこないます。この RCW モジュールは、クライアントアプリケーション作成時に、自動的にタイプライブラリからローカルに生成されます。そのため、アプリケーション毎に RCW モジュールが出来てしまうため、ORiN2 SDK では、Global Assembly Cache (GAC) に登録可能な RCW モジュールの提供をおこなっています。

ORiN 用のRCWをGACに登録する方法は以下の3つの方法があります。

(1) ORiN2SDK インストーラによる自動登録

ただし、以下の条件を満たしている必要があります

- ORiN2SDK インストーラがバージョン 2.1.2 以降である。
- Microsoft .NET Framework 2.0 以降がインストールされている。

(2) Windows エクスプローラで Windows¥assembly ディレクトリに CaoRCW.dll をドロップする

(3) グローバルアセンブリキャッシュツール (Gacutil.exe) を使う⁸

登録 : ORiN2¥DotNet¥RCW> gacutil -i CaoRCW.dll

登録抹消 : ORiN2¥DotNet¥RCW> gacutil -u CaoRCW

2.5.2. プロジェクト作成時の設定

IDE の「参照の追加」ダイアログで CAO の RCW モジュールを追加します。RCW モジュールは以下の場所に格納してあります。

ORiN2¥DotNet¥RCW¥CaoRCW.dll

⁸ gacutil.exe は、.NET Framework 2.0 SDK または Visual Studio 2005 が既にインストールしてある場合のみ使用することができます。

RCW モジュールを追加することで、CAO エンジンのクラス変数を下記のように宣言することができるようになります。

```
Dim caoEng As New ORiN2.interop.CAO.CaoEngine
```

名前空間に<ORiN2.interop.CAO>を指定することで、上記の宣言を簡素化することが出来ます。名前空間の指定する場合は、[プロジェクトのプロパティ]→[参照]→[インポートされた名前空間]のリストの中から<ORiN2.interop.CAO>にチェックを入れてください。

2.5.3. オブジェクト削除時の注意点

VB.NET では、自動的にガーベジコレクションされるので、変数に“Nothing”を代入してもオブジェクトの Release 処理がすぐ実行されるわけではありません。そのため、オブジェクトの削除をすぐに実行させるためには、system.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject 関数を使って明示的に解放処理を行う必要があります。以下にコントローラオブジェクトを解放する例を示します。

```
caoCtrls.Remove(caoCtrl.Index)  
System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoCtrl)  
caoCtrl = Nothing
```

system.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject 関数はガーベジコレクタの管理下にある COM の参照カウンターをひとつ減らす役割をします。参照の数がn回ならオブジェクトを解放するには ReleaseComObject 関数をn回呼び出す必要があります。

また、ガーベジコレクタは自動変数も管理下に置くので、

```
caoEng.Workspaces.Item(0).Controllers.Clear
```

の、[.Workspaces] も一時的な自動変数が割り当てられ管理下に置かれます。[.Item(0)] も [.Controllers] も同様です。その結果としてこれらの参照カウンターが一つ増加しますので、解放するには ReleaseComObject 関数をこの数分だけ余分に呼び出す必要があります。

つまり、自動変数に対する参照の数を考慮する必要があるわけですが、これをコーディングレベルでやるのは漏れもあり大変です。そこで、COM の自動変数割り当てがないように対応するローカル変数を明示的に宣言して、以下のように管理するようにします。

```
Dim caoEng As CaoEngine  
Dim caoWss As CaoWorkspaces  
Dim caoWs As CaoWorkspace  
Dim caoCtrls As CaoControllers  
  
caoEng = new CaoEngine  
caoWss = caoEng.Workspaces  
caoWs = caoWss.Item(0)  
caoCtrls = caoWs.Controllers  
  
Dim caoCtrl As CaoController  
caoCtrl = caoWs.AddController("RC1", "CaoProv.Blackboard", "", "")  
  
caoCtrls.Clear
```

```

System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoCtrl)
caoCtrl = Nothing

caoWss.Clear
System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoCtrls)
caoCtrls = Nothing
System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoWs)
caoWs = Nothing
System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoWss)
caoWss = Nothing
System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoEng)
caoEng = Nothing

```

2.5.4. イベント取得方法

イベントを取得する際には VB6 のように WithEvents を用いてイベントハンドラを記述することができます。しかし、例えば CaoController クラスのオブジェクトを明示的に削除したい場合にはイベントハンドラにより上手く削除できません。その場合は、AddHandler, RemoveHandler キーワードを使用して動的にイベントハンドラを設定する必要があります。イベントハンドラの設定手順は以下のようになります。

- (1) 生成したコントローラオブジェクトのイベントハンドラを作成する。

```

caoCtrl = caoWs.AddController("RC1", "CaoProv.Blackboard", "", "")
AddHandler caoCtrl.OnMessage, AddressOf caoCtrl_OnMessage

```

- (2) 作成したイベントハンドラの追加

```

Private Sub caoCtrl_OnMessage(ByVal pICaoMess As ORiN2.interop.CAO.CaoMessage)
txtReceiveTime.Text = pICaoMess.DateTime
End Sub

```

- (3) コントローラオブジェクトの削除前にイベントハンドラを破棄する。

```

RemoveHandler caoCtrl.OnMessage, AddressOf caoCtrl_OnMessage
caoCtrls.Remove(caoCtrl.Index)
System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoCtrl)
caoCtrl = Nothing

```

また、この OnMessage イベントはメインスレッドとは別のスレッドにより処理されますので、スレッドセーフなプログラミングに注意してください。例えば、メインフォームに貼り付けられた TextBox1 の Text プロパティの値を OnMessage イベントハンドラ内で直接代入しようとしても「有効ではないスレッド間の操作: コントローラが作成されたスレッド以外のスレッドからコントロール'TextBox1'がアクセスされました。」というエラーが発生します。この場合、

```

TextBox1.CheckForIllegalCrossThreadCalls = False

```

を実行することでアクセス可能にすることもできますが、そもそもスレッドセーフなプログラミングを意識してください。

2.6. その他言語によるクライアント作成

2.6.1. C++によるクライアント作成⁹

C++から CAO のオブジェクトを操作するには以下の手順をとります.

- (1) DCOM の初期化
- (2) CaoEngine オブジェクトの生成
- (3) メソッドの実行
- (4) オブジェクトの解放
- (5) DCOM の終了処理

また CAO オブジェクトを扱う方法は以下の 2 種類があります.

- ・ #include ディレクティブ
- ・ #import ディレクティブ

各方法の詳細については以下に示します.

2.6.1.1. #include ディレクティブの場合

C++から CAO のオブジェクトを操作するには, CAO のヘッダファイル(CAO.h)と UUID 定義ファイル(CAO_i.c)をインクルードする必要があります. これらのファイルは“<ORIN2ルート>%CAO%Include”にあります.

```
#include "CAO.h"
#include "CAO_i.c"
```

以下は実際に CAO オブジェクトを操作する手順になります.

- (1) DCOM の初期化

CAO オブジェクトを操作する前に CoInitialize()を実行します.

- (2) CaoEngine オブジェクトの生成

CoCreateInstance()を実行します. 以下に引数の例を示します.

```
ICaoEngine* pEng;
hr = CoCreateInstance(CLSID_CaoEngine,
                      NULL,
                      CLSCTX_LOCAL_SERVER,
                      IID_ICaoEngine,
                      (void **)&pEng);
```

- (3) メソッドの実行

(2)で生成した CaoEngine のメソッドを実行します.

以下に AddController を行う例を示します.

```
// CaoWorkspace コレクションの取得
ICaoWorkspaces *pWss;
```

⁹ DCOM の詳細な説明については以下のページを参照してください.

“http://www.microsoft.com/japan/msdn/library/default.asp?url=/japan/msdn/library/ja/jpdnguion/htm/msdn_drguion020298.asp”


```

hr = pEng->get_Workspaces(&pWss);
if (FAILED(hr)) return hr;

// CaoWorkspace の取得
ICaoWorkspace *pWs;
hr = pWss->Item(CComVariant(OL), &pWs);
if (FAILED(hr)) return hr;

// CaoController の生成
ICaoController *pCtrl;
hr = pWs->AddController(CComBSTR(L"TestCtrl"),
                        CComBSTR(L"CaoProv.DataStore"),
                        CComBSTR(L""),
                        CComBSTR(L""),
                        &pCtrl);

```

(4) オブジェクトの解放

プログラム内で生成、取得したオブジェクトは必ず解放処理をしなければなりません。解放は各オブジェクトの `Release()` を実行します。以下に(3)までに取得したオブジェクトの解放を行う例を示します。

```

pCtrl->Release();
pWs->Release();
pWss->Release();
pEng->Release();

```

(5) DCOM の終了処理

プログラムが終了する前に `CoUninitialize()` を実行します。

以下に変数の設定、取得を行うサンプルプログラムを示します。

List 2-2

CPPSample1.cpp

```

#include "atlbase.h"
#include "CAO.h"
#include "CAO_i.c"

HRESULT func1();

int main(int argc, char* argv[])
{
    CoInitialize(0);

    HRESULT hr = func1();

    CoUninitialize();
    return 0;
}

HRESULT func1()
{
    HRESULT hr = S_OK;
    ICaoEngine* pEng = NULL;
    ICaoWorkspaces *pWss = NULL;
    ICaoWorkspace *pWs = NULL;
    ICaoController *pCtrl = NULL;
    ICaoVariable *pVar = NULL;
    CComVariant vntVal;

    // CaoEngine の生成
    hr = CoCreateInstance(CLSID_CaoEngine,
                        NULL,

```

```

        CLSCTX_LOCAL_SERVER,
        IID_ICaoEngine,
        (void **)&pEng);

    if (FAILED(hr)) {
        goto EndProc;
    }

    // CaoWorkspace コレクションの取得
    hr = pEng->get_Workspaces(&pWss);
    if (FAILED(hr)) {
        goto EndProc;
    }

    // CaoWorkspace の取得
    hr = pWss->Item(CComVariant(0L), &pWs);
    if (FAILED(hr)) {
        goto EndProc;
    }

    // CaoController の生成
    hr = pWs->AddController(CComBSTR(L"TestCtrl"),
                           CComBSTR(L"CaoProv. DataStore"),
                           CComBSTR(L""),
                           CComBSTR(L""),
                           &pCtrl);

    if (FAILED(hr)) {
        goto EndProc;
    }

    // CaoController の生成
    hr = pCtrl->AddVariable(CComBSTR(L"TestVal"), CComBSTR(L""), &pVar);
    if (FAILED(hr)) {
        goto EndProc;
    }

    // 値の設定, 取得
    pVar->put_Value(CComVariant(L"sample"));
    pVar->get_Value(&vntVal);

    // オブジェクトの解放
EndProc:
    if (pVar) pVar->Release();
    if (pCtrl) pCtrl->Release();
    if (pWs) pWs->Release();
    if (pWss) pWss->Release();
    if (pEng) pEng->Release();
    return hr;
}

```

2.6.1.2. #importディレクティブの場合

C++から CAO のオブジェクトを操作するもう一つの方法として#import ディレクティブを使用して, CAO.exe をインポートします.

```
#import "CAO.exe"
```

CAOオブジェクトのネームスペースは“CAOLib”になります.¹⁰

¹⁰ ネームスペースの設定は#import ディレクティブのオプションで設定することができます. 詳細は MSDN を参照してください.

また#import ディレクティブを使用することで、オブジェクト名の後ろに“Ptr”をつけたスマートポインタを使用することができます。(例:ICaoEnginePtr)

以下は実際に CAO オブジェクトを操作する手順になります。

(1) DCOM の初期化

CAO オブジェクトを操作する前に CoInitialize()を実行します。

(2) CaoEngine オブジェクトの生成

CaoEngineオブジェクトのスマートポインタであるICaoEnginePtrを使用して生成します。以下に例を示します。スマートポインタを使用しない場合は、2.6.1.1と同様の手順で生成します。

```
CAOLib::ICaoEnginePtr pEng(__uuidof(CAOLib::CaoEngine));
```

(3) メソッドの実行

(2)で生成した CaoEngine のメソッドを実行します。

以下に AddController を行う例を示します。

```
CAOLib::ICaoWorkspacesPtr pWss = pEng->GetWorkspaces();
CAOLib::ICaoWorkspacePtr pWs = pWss->Item(0L);
CAOLib::ICaoControllerPtr pCtrl = pWs->AddController(L"SampleCtrl",
                                                    CaoProv.DataStore",
                                                    L"",
                                                    L"");
```

(4) オブジェクトの解放

スマートポインタで保持しているオブジェクトは、自動的に解放処理が行われます。明示的に解放処理を行い場合、又はスマートポインタを使用していない場合は2.6.1.1と同様の手順で解放します。

(5) DCOM の終了処理

プログラムが終了する前に CoUninitialize()を実行します。

以下に変数の設定、取得を行うサンプルプログラムを示します。

List 2-3 CPPSample2.cpp

```
#import "D:\work\Robot\Repos\ORiN2\CAO\Engine\Bin\CAO.EXE"

HRESULT func1();

int main(int argc, char* argv[])
{
    CoInitialize(0);

    HRESULT hr = func1();

    CoUninitialize();
    return 0;
}
```

```

HRESULT func1 ()
{
    try {
        CAOLib::ICaoEnginePtr pEng (__uuidof (CAOLib::CaoEngine));
        CAOLib::ICaoWorkspacesPtr pWss = pEng->GetWorkspaces ();
        CAOLib::ICaoWorkspacePtr pWs = pWss->Item (0L);
        CAOLib::ICaoControllerPtr pCtrl = pWs->AddController (L"SampleCtrl",
                                                                L"CaoProv. DataStore",
                                                                L"";
                                                                L"";
                                                                L"";);
        CAOLib::ICaoVariablePtr pVar = pCtrl->AddVariable (L"SampleVal", L"";);

        pVar->PutValue (_variant_t (L"sample"));
        _variant_t vntTemp = pVar->GetValue ();

    }
    catch (_com_error e) {
        return e.Error ();
    }
    return S_OK;
}

```

2.6.2. C言語によるクライアント作成¹⁰

C 言語では#include ディレクティブを使用して CAO オブジェクトを操作します。インクルードするファイルは、CAO のヘッダファイル(CAO.h)と UUID 定義ファイル(CAO_i.c)になります。これらのファイルはこれらのファイルは“<ORIN2ルート>%CAO%Include”にあります。

```

#include "CAO.h"
#include "CAO_i.c"

```

CAOのオブジェクトを操作する手順は、2.6.2と同様の手順をとります。

以下に各手順の詳細を示します。

(1) DCOM の初期化

CAO オブジェクトを操作する前に CoInitialize()を実行します。

(2) CaoEngine オブジェクトの生成

CoCreateInstance()を実行します。以下に引数の例を示します。

```

hr = CoCreateInstance (&CLSID_CaoSQLEngine,
                      NULL,
                      CLSCTX_ALL,
                      &IID_ICaoSQLEngine,
                      (void **) &pEng);

```

(3) メソッドの実行

(2)で生成した CaoEngine のメソッドを実行します。メソッドを実行は以下のように呼び出します。以下に CaoWorkspace コレクションを取得する場合の例を示します。

```

pEng->IpVtbl->get_Workspaces (pEng, &pWss);

```

ヘッダをインクルードする前に COBJMACROS というプリプロセッサシンボルを宣言すると、各メソッド

に対応するマクロが得られます。以下にマクロを使用して **CaoWorkspace** コレクションを取得する場合の例を示します。

```
ICaoEngine_get_Workspaces (pEng, &pWss);
```

(4) オブジェクトの解放

プログラム内で生成、取得したオブジェクトは必ず解放処理をしなければなりません。解放は各オブジェクトの **Release()**を実行します。以下にマクロ使用した場合のオブジェクトの解放の例を示します。

```
ICaoEngine_Release (pEng)
```

(5) DCOM の終了処理

プログラムが終了する前に **CoUninitialize()**を実行します。

以下に変数の設定、取得を行うサンプルプログラムを示します。

List 2-4

ImportSample.cpp

```
#import "D:\work\Robot\Repos\ORiN2\CAO\Engine\Bin\CAO.EXE"

HRESULT func1();

int main(int argc, char* argv[])
{
    CoInitialize(0);

    HRESULT hr = func1();

    CoUninitialize();
    return 0;
}

HRESULT func1()
{
    try {
        CAOLib::ICaoEnginePtr pEng(__uuidof(CAOLib::CaoEngine));
        CAOLib::ICaoWorkspacesPtr pWss = pEng->GetWorkspaces();
        CAOLib::ICaoWorkspacePtr pWs = pWss->Item(0L);
        CAOLib::ICaoControllerPtr pCtrl = pWs->AddController(L"SampleCtrl",
                                                            L"CaoProv. DataStore",
                                                            L"",
                                                            L "");
        CAOLib::ICaoVariablePtr pVar = pCtrl->AddVariable(L"SampleVal", L "");

        pVar->PutValue(_variant_t(L"sample"));
        _variant_t vntTemp = pVar->GetValue();

    }
    catch (_com_error e) {
        return e.Error();
    }
    return S_OK;
}
```

2.6.3. C#によるクライアント作成

C#クライアントは、VB.netクライアントと同様にRCWを介してCOMコンポーネントにアクセスを行います。設定内容は 2.5と同様な設定を行います。

2.6.3.1. RCWのGACへの登録

登録方法はVB.netの場合と同じです。詳細については、2.5.1を参照してください。

2.6.3.2. プロジェクト作成時の設定

参照の追加については、VB.netの場合と同じです。2.5.2を参照してください。

RCW モジュールの参照を追加することで CAO エンジンのクラス変数を下記のように宣言することができるようになります。

```
private ORiN2.interop.CAO.CaoEngine caoEng;;
```

名前空間に<ORiN2.interop.CAO>を指定することで、上記の宣言を簡素化することが出来ます。名前空間の指定する場合は、以下の宣言を行います

```
using ORiN2.interop.CAO;
```

2.6.3.3. オブジェクト削除時の注意点

C#は、VB.netと同様にガーベジコレクションがあるので、変数に“null”を代入してもオブジェクトのRelease処理がすぐ実行されません。オブジェクトの削除を即時実行する為には、VB.netと同様にSystem.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject関数を使って明示的に解放処理を行う必要があります。詳細な注意点については、2.5.3を参照してください。

2.6.3.4. イベント取得方法

C#で、イベントを取得するときは以下の手順で行います。

(1) イベントハンドラの作成

```
private void OnMessage(CaoMessage plCaoMsg)
{
    MessageBox.Show(plCaoMsg.Value.ToString());
}
```

(2) イベントハンドラの登録

```
caoCtrl = caoCtrls.Add("RC1", "CaoProv.Dummy", "", "");
caoCtrl.OnMessage += new _ICaoControllerEvents_OnMessageEventHandler (OnMessage);
```

2.6.3.5. スレッドセーフな呼び出し方法

OnMessage イベントは、VB.net の場合と同様にメインスレッドとは別のスレッドにより処理されるので、スレッドセーフなプログラミングに注意してください。

C#でスレッドセーフなプログラミングは以下のように行います。

- (1) イベントで処理する内容を関数化する.
- (2) 作成した関数を呼び出すためのデリゲートを作成する.

```
private delegate void SetTextCallback(string msg);
```
- (3) OnMessage イベント内から System.Invoke 関数でイベント処理関数を呼び出す.

```
private void OnMessage(CaoMessage pCaoMsg)
{
    // イベント処理関数を設定したデリゲートを作成する
    SetTextCallback SetMsg = new SetTextCallback(SetText);

    // System.Invoke 関数でデリゲートに登録した関数を実行する.
    Invoke(SetMsg, pCaoMsg.Value.ToString());
}
```

以下に、OnMessage イベントの値をテキストボックスに表示するサンプルを示します.

List 2-5**ImportSample.cpp**

```
using System;
using System.Collections.Generic;
using System.ComponentModel;
using System.Data;
using System.Drawing;
using System.Text;
using System.Windows.Forms;
using ORiN2.interop.CAO;

namespace Message
{
    public partial class frmMessage : Form
    {
        private delegate void SetTextCallback(string msg); // OnMessage 処理用デリゲート

        private CaoEngine caoEng;
        private CaoWorkspaces caoWss;
        private CaoWorkspace caoWs;
        private CaoControllers caoCtrls;
        private CaoController caoCtrl;

        public frmMessage()
        {
            InitializeComponent();
        }

        private void frmMessage_Load(object sender, EventArgs e)
        {
            try
            {
                // CAO エンジン生成
                caoEng = new CaoEngine();
                caoWss = caoEng.Workspaces;
                caoWs = caoWss.Item(0);

                // コントローラコレクションの取得
                caoCtrls = caoWs.Controllers;

                // コントローラに接続
                caoCtrl = caoCtrls.Add("RC1", "CaoProv.Dummy", "", "");

                // OnMessage イベントハンドラの登録
            }
        }
    }
}
```

```

        caoCtrl.OnMessage += new
        _IControllerEvents_OnMessageEventHandler (OnMessage);

    }
    catch (Exception ex)
    {
        MessageBox.Show(ex.Message);
    }
}

private void frmMessage_FormClosed(object sender, FormClosedEventArgs e)
{
    try
    {
        // コントローラオブジェクトの解放
        if (caoCtrl != null)
        {
            caoCtrls.Remove(caoCtrl.Name);
            System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoCtrl);
            caoCtrl = null;
        }
        System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoCtrls);
        caoCtrls = null;
        System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoWs);
        caoWs = null;
        System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoWss);
        caoWss = null;
        System.Runtime.InteropServices.Marshal.ReleaseComObject(caoEng);
        caoEng = null;
    }
    catch (Exception ex)
    {
        MessageBox.Show(ex.Message);
    }
}

private void cmdExecute_Click(object sender, EventArgs e)
{
    try
    {
        caoCtrl.Execute("", "");
    }
    catch (Exception ex)
    {
        MessageBox.Show(ex.Message);
    }
}

// OnMessage イベント
private void OnMessage(CaoMessage pICaoMsg)
{
    try
    {
        // 別スレッドのメソッド呼び出し
        SetTextCallback SetMsg = new SetTextCallback(SetText);
        Invoke(SetMsg, pICaoMsg.Value.ToString());
    }
    catch (Exception ex)
    {
        MessageBox.Show(ex.Message);
    }
}

// OnMessage 時の処理関数
private void SetText(string msg)

```



```

    {
        textBox1.Text = msg;
    }
}

```

2.6.4. Delphiによるクライアント作成

2.6.4.1. 作成準備

Delphi で CAO のオブジェクトを操作するには、タイプライブラリからユニットファイルを作成、使用して行います。

ユニットファイルの作成と使用方法は以下の手順になります。

- (1) メニューから[プロジェクト]→[タイプライブラリの取り込み]を選択する。
- (2) 表示されたダイアログで“CAO1.0 タイプライブラリ”を選択し、ユニットの作成ボタンをクリックします。

(図 2-11) 作成されたユニットファイルは、ユニットディレクトリ名で指定した場所にファイル名“CAOLib_TLB.pas”で作成されます。

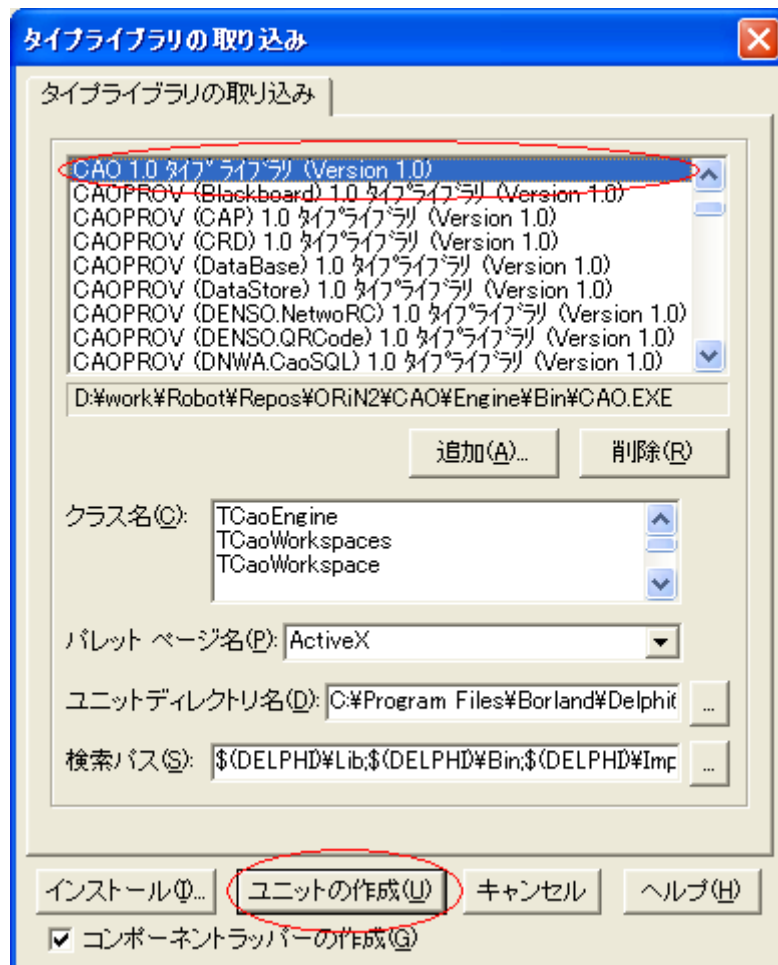


図 2-11 タイプライブラリの取り込み画面

- (3) CAOオブジェクトを使用するソースファイルをアクティブにして、メニューから[ファイル]→[ユニットを使う]を選択します。
- (4) 使用するユニットの選択画面で“CAOLib_TLB”を選択して OK ボタンをクリックする。
- (5) ソースファイルの uses 節に“ComObj”を追加する。

以上の手順で CAO オブジェクトを使用することができるようになります。

2.6.4.2. 操作手順

CAO オブジェクトの操作は以下の手順で行います。

- (1) CaoEngine オブジェクトの生成

ProgIDToClassID() で UUID を取得した後、CreateComObject() でオブジェクトを生成します。

```
CaoObj := CreateComObject (ProgIDToClassID(' CAO. CaoEngine'));
```

- (2) CaoEngine インタフェースの取得

(1) で生成されたオブジェクトは IUknown 型のインタフェースなので CaoEngine インタフェースにキャストをします。

```
CaoEng := CaoObj as ICaoEngine;
```

- (3) オブジェクトの操作

CaoEngine インタフェースを使って CAO を操作します。

```
CaoWss := CaoEng. Workspaces;
```

注意する点として、CAO オブジェクトの変数が解放されるときに自動的に Release() が実行されます。このため他の言語のように明示的に解放処理を行った場合、CAO が正しく終了しない可能性があります。

以下に変数の値を設定、取得するサンプルを示します。

List 2-6 Unit1.pas

```
unit Unit1;

interface

uses
  Windows, Messages, SysUtils, Variants, Classes, Graphics, Controls, Forms,
  Dialogs, StdCtrls, ComObj;

type
  TForm1 = class(TForm)
    Button1: TButton;
    Edit1: TEdit;
    Edit2: TEdit;
    Label1: TLabel;
    Label2: TLabel;
    procedure Button1Click(Sender: TObject);
  private
    { Private 宣言 }
```

```
    public
    { Public 宣言 }
    end;

var
    Form1: TForm1;

implementation

uses CAOLib_TLB;

{$R *.dfm}

procedure TForm1.Button1Click(Sender: TObject);
var
    CaoObj: IUnknown;
    CaoEng: ICaoEngine;
    CaoCtrl: ICaoController;
    CaoVar: ICaoVariable;

begin
    Try
        {CaoEngine の生成}
        CaoObj := CreateComObject(ProgIDToClassID(' CAO.CaoEngine'));
        CaoEng := CaoObj as ICaoEngine;

        {CaoController の生成}
        CaoCtrl := CaoEng.Workspaces.Item(0).AddController('', 'CaoProv.DataStore', '', '');

        {CaoVariable の生成}
        CaoVar := CaoCtrl.AddVariable('Test', '');

        {値の設定}
        CaoVar.Value := Edit1.text;

        {値の取得}
        Edit2.Text := CaoVar.Value;
    Except
        {エラー処理}
        ShowMessage('Error');
    End;
end;

end.
```

2.6.5. Javaによるクライアント作成

Javaからは直接COMによる呼び出しを行うことはできません。このため、JavaからCAOを利用するためには、JNIのネイティブメソッドライブラリからCAOを呼び出す必要があります。¹¹

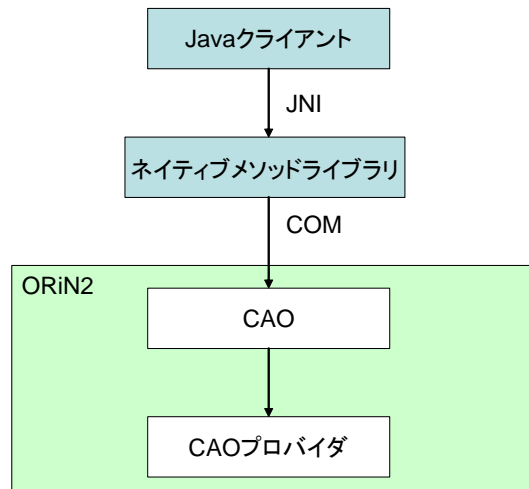


図 2-12 Java による CAO 呼び出し

以下にネイティブメソッドライブラリの作成手順及びJavaのサンプルクライアントの紹介を行います。各手順項目の末尾の括弧は使用言語を示しています。

(1) ネイティブメソッドの宣言 (Java)

クライアントプログラムが必要とする機能を持つネイティブメソッドを宣言します。このとき宣言するネイティブメソッドは、CAOのインタフェースをラップしたメソッドである必要はありません。

ネイティブメソッドを宣言するときは、メソッド宣言に“native”キーワードをつけます。

例) `public native int AddVariable(String VarName);`

(2) ネイティブメソッドを使用するクライアントプログラムの作成 (Java)

宣言したネイティブメソッドを使用したクラスを作成し、コンパイルします。

コンパイルは、コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行します。

例) `javac CaoJNI.java`

(3) ネイティブメソッドのC++ヘッダ生成 (Java)

コンパイルしたファイルからネイティブコードでインクルードするヘッダファイルを生成します。

生成は、コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行します。

例) `javah -jni CaoJNI`

¹¹ CaoSQL では Java のためにインタフェースをラップしたライブラリを提供しています。

(4) JNI ヘッダファイルのインクルード (C++)

生成されたヘッダファイルと JNI のヘッダファイルをインクルードします。

例) `#include <jni.h>`
`#include "CaoJNI.h"`

(5) ネイティブメソッドライブラリの実装 (C++)

2.6.1の手順に従い、CAOオブジェクトを使用できるように設定します。

生成されたヘッダファイルで宣言されているネイティブメソッドを実装する。

(6) ネイティブメソッドライブラリのコンパイル (C++)

実装したネイティブコマンドライブラリをコンパイルします。

コンパイルは、コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行します。ここでコンパイルのオプションについては、環境に合わせて変更して下さい。

例) `cl /IC:%jdk1.3.1%include /IC:%jdk1.3.1%include%win32 /IC:%ORiN2%CAO%Include`
`/LD CaoJNI.cpp /FeCaoJNI.dll`

(7) サンプルクライアントの実行 (Java)

サンプルクライアントを実行する。ここでネイティブメソッドライブラリのファイルが、環境変数“CLASSPATH”で記述されたフォルダになければならない。

クライアントの実行は以下のコマンドで実行します。

例) `java CaoJNI`

以下に上記手順で作成したサンプルのソースを示します。

List 2-7**CaoJNI.java**

```
import java.io.*;

public class CaoJNI {

    /* --- Cao Native Interfases --- */
    public native int CreateCaoEngine();
    public native int AddController(String CtrlName, String ProvName, String Machine, String
Param);
    public native int AddVariable(String VarName);
    public native String GetValue();
    public native void PutValue(String strVal);
    public native void FreeMemory();

    // コンストラクタ
    public void CaoJNI() {
    }

    // CaoJNI クラスの初期化処理
    public void init() {
        System.loadLibrary("CaoJNI");
    }

    public static void main (String args[]) {
```

```

        CaoJNI cao= new CaoJNI();
        cao.init();

        int iRet;

        // CaoEngine の作成
        iRet = cao.CreateCaoEngine();
        if (iRet != 0) {
            System.out.println("Can't make CaoEngine!");
            return;
        }

        iRet = cao.AddController("Sample", "CaoProv.DataStore", "", "");
        if (iRet != 0) {
            System.out.println("Error on OpenController: ErrorCode(" +
Integer.toHexString(iRet) + ")");
            cao.FreeMemory();
            return;
        }

        iRet = cao.AddVariable("S1");
        if (iRet != 0) {
            System.out.println("Error on GetVariable: ErrorCode(" +
Integer.toHexString(iRet) + ")");
            cao.FreeMemory();
            return;
        }

        cao.PutValue("Sample Data");
        System.out.println("PutValue Succeeded");

        String strRet = cao.GetValue();
        System.out.println(strRet);

        cao.FreeMemory();
    }
}

```

List 2-8 CaoJNI.cpp

```

#include <jni.h>
#include "CaoJNI.h"
#include <atlbase.h>

#include "CAO.h"
#include "CAO_i.c"

BSTR jstring2BSTR(JNIEnv *env, jstring jstr);

ICaoEngine* g_pICaoEng;
ICaoController* g_pICaoCtrl;
ICaoVariable* g_pICaoVar;

// CreateCaoEngine
JNIEXPORT jint JNICALL Java_CaoJNI_CreateCaoEngine
(JNIEnv *env, jobject me)
{
    HRESULT hr;
    hr = CoInitialize( NULL );

    /* Create CaoEngine Object */
    hr = CoCreateInstance(CLSID_CaoEngine, NULL, CLSCTX_LOCAL_SERVER, IID_ICaoEngine,
(void*)&g_pICaoEng);
    if (SUCCEEDED(hr)) {

```

```

        printf("Make CaoEngine Succeeded!¥n");
    }

    return hr;
}

// AddController
JNIEXPORT jint JNICALL Java_CaoJNI_AddController
(JNIEnv *env, jobject me, jstring strCtrl, jstring strProv, jstring strMachine, jstring
strParam)
{
    if (g_pICaoCtrl) {
        return E_FAIL;                // 既に Controller は Open されています
    }

    HRESULT hr;

    CComBSTR bstrProv, bstrMachine, bstrCtrl, bstrParam;
    bstrProv = jstring2BSTR(env, strProv);
    bstrMachine = jstring2BSTR(env, strMachine);
    bstrCtrl = jstring2BSTR(env, strCtrl);
    bstrParam = jstring2BSTR(env, strParam);

    /* Get CaoWorkspace Object */
    CComPtr<ICaoWorkspaces> pICaoWSs;
    CComPtr<ICaoWorkspace> pICaoWS;
    hr = g_pICaoEng->get_Workspaces(&pICaoWSs);
    if (FAILED(hr)) {
        return hr;
    }
    hr = pICaoWSs->Item(CComVariant(OL), &pICaoWS);
    if (FAILED(hr)) {
        return hr;
    }

    /* Create CaoController Object */
    hr = pICaoWS->AddController(bstrCtrl, bstrProv, bstrMachine, bstrParam, &g_pICaoCtrl);
    if (SUCCEEDED(hr)) {
        printf("OpenController Succeeded!¥n");
    }

    return hr;
}

// AddVariable
JNIEXPORT jint JNICALL Java_CaoJNI_AddVariable
(JNIEnv *env, jobject me, jstring strVar)
{
    if (g_pICaoVar) {
        g_pICaoVar->Release();
    }

    HRESULT hr;

    CComBSTR bstrVar, bstrOption;
    bstrVar = jstring2BSTR(env, strVar);
    hr = g_pICaoCtrl->AddVariable(bstrVar, bstrOption, &g_pICaoVar);
    SysFreeString(bstrVar);

    if (SUCCEEDED(hr)) {
        printf("GetVariable Succeeded!¥n");
    }

    return hr;
}

```

```

// GetValue
JNIEXPORT jstring JNICALL Java_CaoJNI_GetValue
(JNIEnv *env, jobject me)
{
    if (!g_pICaoVar) {
        return NULL; // Variable オブジェクトがありません
    }

    // 値の取得
    CComVariant vntValue;
    HRESULT hr = g_pICaoVar->get_Value(&vntValue);
    if (FAILED(hr)) {
        return NULL;
    }

    // 取得値を文字列変換
    hr = vntValue.ChangeType(VT_BSTR);
    if (FAILED(hr)) {
        return NULL;
    }

    return env->NewString(vntValue.bstrVal, SysStringLen(vntValue.bstrVal));
}

// PutValue
JNIEXPORT void JNICALL Java_CaoJNI_PutValue
(JNIEnv *env, jobject me, jstring strVal)
{
    if (!g_pICaoVar) {
        return; // Variable オブジェクトがありません
    }

    HRESULT hr;
    CComBSTR bstrVal;
    bstrVal = jstring2BSTR(env, strVal);

    hr = g_pICaoVar->put_Value(CComVariant(bstrVal));
    return;
}

// FreeMemory
JNIEXPORT void JNICALL Java_CaoJNI_FreeMemory
(JNIEnv *env, jobject me)
{
    if (g_pICaoVar) {
        g_pICaoVar->Release();
        printf("CaoVariable Deleted\n");
    }
    if (g_pICaoCtrl) {
        g_pICaoCtrl->Release();
        printf("CaoController Closed\n");
    }
    if (g_pICaoEng) {
        g_pICaoEng->Release();
        printf("CaoEngine Terminated\n");
    }

    CoUninitialize();

    return;
}

// 文字列変換 (Java→BSTR)
BSTR jstring2BSTR(JNIEnv *env, jstring jstr)
{

```



```

    if (jstr==NULL) {
        return NULL;
    }

    const WCHAR* wc;
    wc = env->GetStringChars(jstr, NULL);
    int iLen;
    iLen = env->GetStringLength(jstr);
    BSTR bstrString;
    bstrString = SysAllocStringLen(wc, iLen);

    env->ReleaseStringChars(jstr, wc);

    return bstrString;
}

```

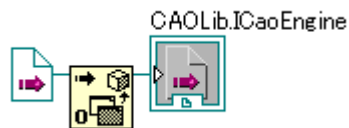
2.6.6. LabVIEWによるクライアント作成

LabVIEW から CAO のオブジェクトを操作するには、ActiveX クライアントとして機能する VI ファイルを作成します。

ActiveX クライアント VI の作成と使用方法は以下の手順となります。

※下記手順内の図は、LabVIEW ver8.6 の画面になります。

- (1) オートメーションオープン関数を使用し、サーバへのリファレンスを開く。



オートメーション Refnum の入力に対し、[ActiveX クラスを選択]-[参照]から“CAO1.0 Type Library Version 1.0”を選択し、[CaoEngine]を指定する。

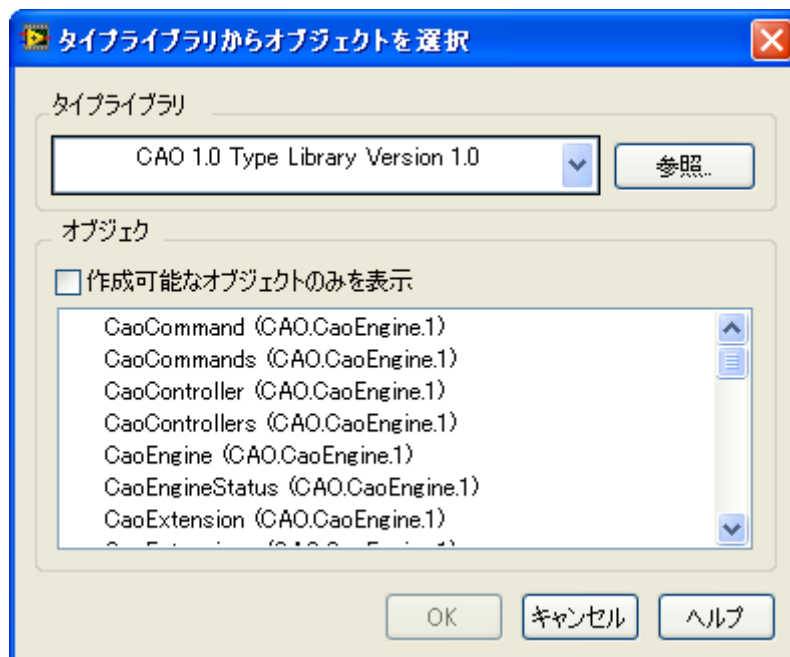
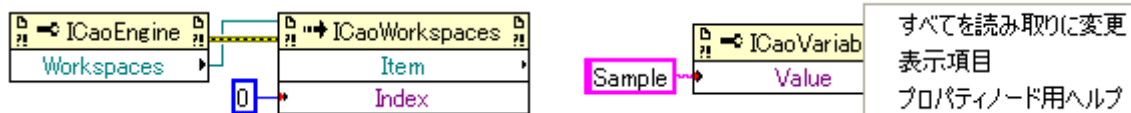


図 2-13 タイプライブラリからオブジェクトを選択画面

- (2) プロパティ設定やメソッド操作を行う.

※“Read” や“Write” ができるプロパティは、プロパティノードの属性を変更して使用する。

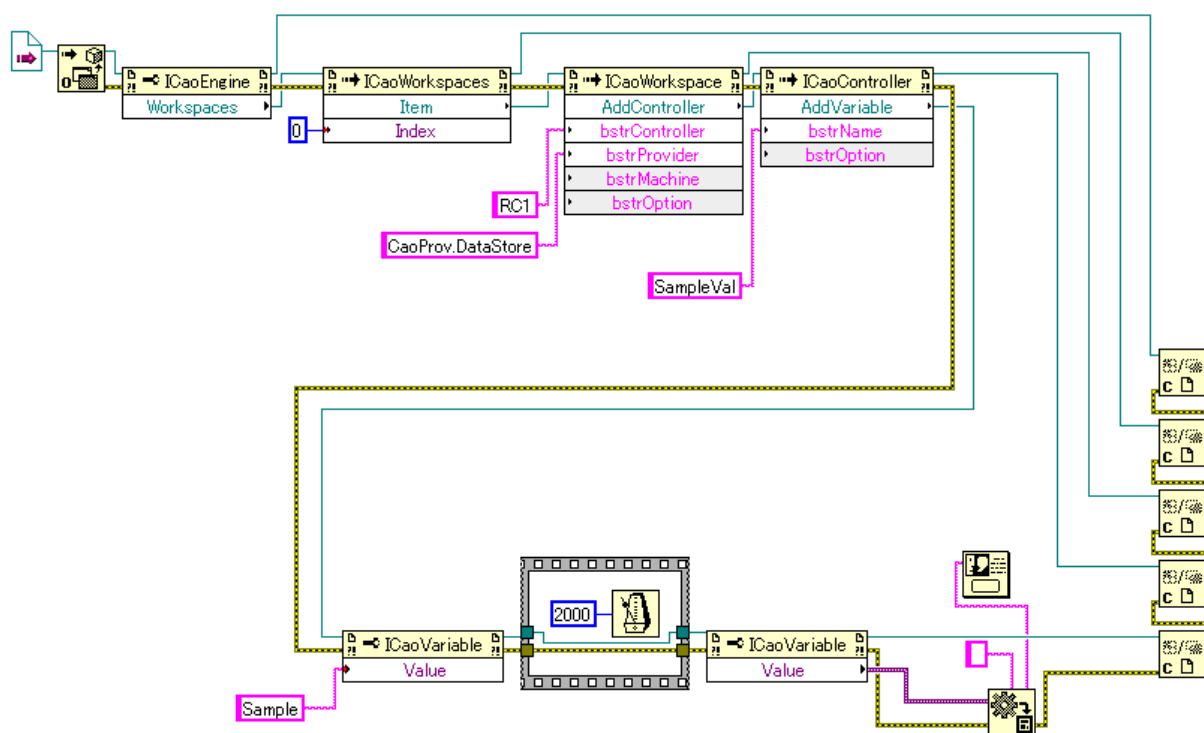


- (3) リファレンスを閉じる.

オートメーション Refnum を閉じる関数より, リファレンスを閉じる.

以下に変数の値を設定、取得するサンプルを示します.

List 2-8 **ImportSample.vi**



2.7. CAOの特殊な機能¹²

2.7.1. CRD切り替え機能

CAO エンジンには、各プロバイダのプロパティの呼び出し時に、プロバイダ毎に設定した CRD ファイルへアクセスすることができます。以下に CRD 切り替え機能を使用する際のプロバイダの設定手順を示します。

- (1) CAO エンジンを実行するマシンに CRD プロバイダをインストールします。
- (2) CRD切り替え機能を使用するプロバイダのレジストリ情報“CRDFile”に、参照するCRDファイルのパスを設定します。このパスはCaoConfigを利用して設定することができます。詳細は6を参照してください。
- (3) プロバイダのCRDファイルを参照するプロパティで、返り値に“E_CRDIMPL”を返します¹³。

但し、CRD ファイルから値を取得するためには、生成したコントローラ等のオブジェクト名が、CRD ファイルのものと一致している必要があります。

2.7.2. オブジェクト自動登録機能

CAO エンジン起動時にデフォルトワークスペースにオブジェクトを自動登録します。

自動登録するオブジェクト構成はレジストリに登録された CRD ファイルと同じ構成を生成します。登録された CRD ファイルへのパスが間違っている場合は、登録できるオブジェクトのみを登録します。

レジストリへの登録は CaoConfig で登録することができます。

CRD ファイルを編集には XML エディタを使用すると便利です。以下にフリーソフトの XML エディタを紹介します。

Morphon XML-Editor 3.1.4: <http://www.morphon.com/>

以下に CRD ファイルのサンプルを示します。

List 2-9

CRDSample.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="Shift_JIS"?>
<CRD xsi:schemaLocation="http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema CRDSchema.xsd"
  xmlns="http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema"
  xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance">

  <Help>CRD Sample Data</Help>
  <Version>1.0.0</Version>
  <Controller name="RC1" provider="CaoProv.XXX" machine="" option="Conn=eth:192.168.1.1">
    <Command name="Walk"/>
    <Variable name="Var1"/>
  </Controller>
</CRD>
```

¹² デンソー製 CAO エンジン特有の機能

¹³ メソッドで“E_CRDIMPL”を返したときは、値をそのままクライアントに返します。

2.7.3. メソッド動的追加機能

コマンドクラスをコントローラクラスのメソッドとして動的追加します。

コントローラクラスは、コマンド名をメソッド名としてコマンドの Execute メソッドを実行することができます。

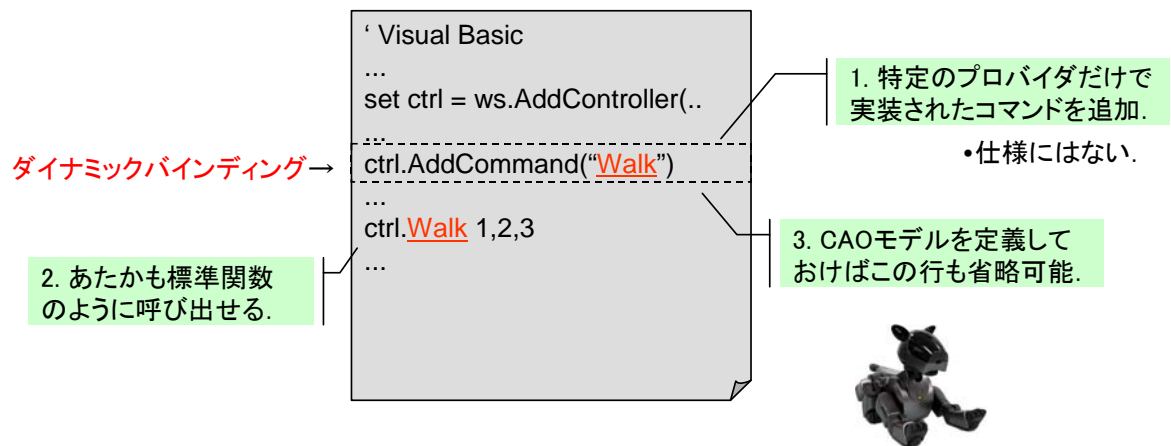


図 2-14 ダイナミックバインディング

以下にメソッド動的追加機能のサンプルを示します。

```
' コマンドの生成
Dim Cmd As CaoCommand
Set Cmd = Ctrl.AddCommand("Shoot")

' コマンドクラスで実行する場合
Cmd.Parameters = Array(10, 10, 20)
Cmd.Execute 0

' メソッド動的追加機能を使う場合
Ctrl.Shoot 10, 10, 20
```

3. CRDプログラミングガイド

3.1. 概要

CRD (Controller Resource Definition) は FA デバイスが持つ各種静的リソースを XML (Extensible Markup Language) で記述するための規格です。そのデータスキーマを CRD スキーマと呼び、この CRD スキーマに従い記述されている XML ファイルを CRD インスタンスと呼びます。CRD は FA デバイスの情報を共通のフォーマットで管理するための標準データスキーマです。

CRD は下記の 3 つの用途を想定して設計されています。

- (1) デバイスが持つ静的データの定義
- (2) デバイスやシステム全体のコンフィギュレーションの定義
- (3) デバイスのケイパビリティ定義

本章の構成は、前半で基礎知識として XML について簡単に解説し、後半で具体的な CRD ファイルの作成手順を解説します。

3.2. 基礎知識

3.2.1. XMLとは

XML とは、自己拡張可能なマークアップ言語 (eXtensible Markup Language) のことで、文書構造を決定するための規則を文書の作成者が決定できます。(これが「自己拡張可能」と言われる所以です) この、文書の構造をその作り手が自由に決定できるという機能を利用すれば、XML という標準仕様を用いながら、特定の構造にとらわれない自由度の高いデータを広く交換できるようになります。

XML には、以下のような特徴があります。

- ・ 意味と内容を持ったデータ形式
- ・ 階層的なデータ構造定義が可能
- ・ タグを論理的に記述でき、構造化された分かりやすい文書を作成可能
- ・ 拡張性があり、業界標準として普及しつつあるデータ形式

以下に簡単な XML 文書の例を示します。XML では、タグを利用してデータを表現します。このとき、開始タグから終了タグまでのことを要素と呼びます。下記の例では、<ORiN> や <Author> といったタグを利用して、ORiN やその作者の情報を保持しています。要素は、別の要素を子要素として持つことができ、これにより、データを構造的にあらわしています。さらに、「Release=“2003”」といったように、要素に付加的な情報(属性)を持たせることもできます。

```
<ORiN>
  <ORiN1 Release= "2003">
    <Author>ORiN 協議会</Author>
    <EngineName>RA0</EngineName>
  </ORiN 1>
  <ORiN2 Release= "2005">
    <Author>ORiN 協議会</Author>
    <EngineName>RA0</EngineName>
  </ORiN 2>
```

</R0iN>

3.2.2. DOM

DOM(Document Object Model)とは、XML 文書をオブジェクトとして扱うための標準 API です。

XML 文書自体は、テキストファイルですが、これをブラウザや CAO などのアプリケーションが処理するときには、XML で記述されている個々の要素を、一つのオブジェクトとして読み出します。このとき XML をオブジェクトとして扱う方法が、アプリケーションによって異なってしまうと、開発者にとって大きな負担になります。そこで W3C により統一的な規格として定められているのが DOM です。XML の API としては、DOM の他に SAX(Simple API for XML)があり、どちらも広く使用されています。

また、DOM には、いくつかのレベルがあり、レベルが大きい方がより新しく高機能となっています。現在 W3C より勧告されている中では Level-2 が最新であり、CRD プロバイダなどでもこれを使用しています。

3.2.3. XMLパーサ

XML 文書は通常テキストファイルとして存在しています。しかし、XML にはさまざまな表記方法が許されており、そのデータをアプリケーションで読込むためにはいくつかの手順を踏む必要があります。その手順のうち汎用的に使用されるものを取り出したものが XML パーサです。

アプリケーションから XML パーサを呼び出す場合には、標準化された API を使用します。標準 API には、先ほど説明した DOM や SAX などがあります。DOM は公開された標準であるため、現在これに準拠した XML パーサが複数公開されています。なかでも Windows 環境において Visual C++ や Visual Basic で容易に使用可能なものとして MSXML があげられ、CRD プロバイダなどではこの MSXML が採用されています。また MSXML は現在複数のバージョンが存在しますが、CRD プロバイダでは MSXML4.0 を使用しています。CRD プロバイダを使用するときは、インストールされている MSXML のバージョンの確認が必要となります。

3.2.4. XMLスキーマ

XML におけるスキーマとは、XML 文書の取り得る構造を記述したものです。つまり要素や属性の配列に正しい並び方を記述したものであり、このスキーマを記述することによって、XML パーサなどで XML 文書の正しさのある程度まで自動的にチェックすることが可能となります。

XML 用の代表的なスキーマ言語には、DTD、XML Schema、RELAX、XDR などがありますが、CRD では XML Schema を採用しています。

3.3. CRDファイルとCRDプロバイダ

CRD ファイルを利用するクライアントアプリケーションでは、主として次の二つの方法でそのファイルにアクセスすることができます。

- (1) CAO エンジンを使って間接的にアクセスする。
- (2) XML パーザを使って直接的にアクセスする。

(2)の方法の説明は適当な参考書に譲りますが、(1)の方法について少し解説します。(1)の場合、ORiN2

SDKでは、クライアントアプリケーションがコントローラにアクセスするのと同じ方法でCRDファイルにアクセスすることができるように、CRDプロバイダが用意されています。このプロバイダを利用すると、実際のコントローラ内のデータも、CRDファイルの中で表現されたデータも同じように扱うことができます。

CRDスキーマではそれぞれの要素がCAOのインタフェースにほぼ一対一に対応する形で定義されており、例えば“RC1”というコントローラ要素内に“Var1”という変数要素が定義された test.xml という CRD ファイルに対して、CRD プロバイダは、以下のような方法で CRD ファイル内の変数要素“I4”にアクセスすることができます。

```
Dim caoEng As New CaoEngine
Dim caoWS As CaoWorkspace
Dim caoCtrl As CaoController
Dim caoVar As CaoVariable

Set caoWS = CaoEng.CaoWorkspaces(0).
Set caoCtrl = caoWS.AddController("RC1", "CaoProv. CRD", "", "C:\test.xml")
Set caoVar = caoCtrl.AddVariable("Var1")
```

CRD ファイルを作成したら、確認や設定の変更などに CRD プロバイダを使用してみてください。

ただし、CRDプロバイダでは、6.1.3.付録A.1CAOエンジン関数一覧の中で、R/Wの項目に“W”が記述されているプロパティがだけが、データの変更をおこなうことができます。

CRDプロバイダの詳細な仕様は別途用意されている「[CRDプロバイダユーザズガイド](#)」を参照してください。

3.4. CRDファイルの作成

3.4.1. ヘッダとルート要素の作成

CRD ファイルは XML ファイルであるので、まずファイルの先頭には XML を使用する宣言として以下のよう記述をおこないます。

```
<?xml version="1.0" encoding="Shift_JIS"?>
```

ここでencoding属性はCRDファイルで使用する文字コード¹⁴に合わせて記述する必要があります。

次に CRD ドキュメントのルート要素として以下の指定をおこないます。

```
<CRD xmlns=http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema
      xmlns:xsi=http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance
      xsi:schemaLocation="http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema CRDSchema.xsd">
```

この要素において、最後の“CRDSchema.xsd”の部分にはスキーマのパスを指定します。指定したパスにスキーマがない場合は CRD ファイルの構造のチェックがおこなわれません。

また、CRD のルート要素には、以下の子要素を持つことができます。

3.4.2. 静的データ定義

静的データ定義では、コントローラ以下のオブジェクト要素とプロパティ要素を XML ファイルに記述していきます。

- (1) オブジェクト要素を追加します。

オブジェクト要素は CAO オブジェクトのインスタンスを示します。CRD ルート要素の下に Controller 要素を配置し、Controller 要素以下は CAO のオブジェクトツリーと同じ構造で配置します。

以下にオブジェクト要素の記述例を示します。

```
<Controller name="RC1">
  <File name="pro1.pac">
    ...
  </File>
  <Variable name="I1">
    ...
  </Variable>
</Controller>
```

ここでオブジェクト要素には必ず name 属性が必要であり、name 属性はオブジェクトの名前をあらわしています。上記の例では CaoController「RC1」は、「pro1.pac」という CaoFile と、「I1」という CaoVariable を持っています。

- (2) オブジェクト要素にプロパティ要素を追加します。

各オブジェクトの静的データとして記述するプロパティ要素をオブジェクト要素の下に追加します。ここで追加できるプロパティ要素はオブジェクト要素によって異なります。詳しくは[「ORiN 2.1 仕様書 Part 3: CRD」](#)を参照してください。

¹⁴ XML では UTF-8 が推奨されています。

3.4.3. システムコンフィギュレーション定義

システムコンフィギュレーション定義ではコントローラ以下のオブジェクト要素を XML ファイルに追加してきます。

オブジェクト要素は静的データ定義と同様に CRD ルート要素以下にツリー構造で配置します。

以下に記述例を示します。

```
<Controller name="RC5" option="Conn=eth:10.8.109.126" provider="CaoProv.DENS0.NetwoRC">
  <Robot name="Arm1"/>
  <Variable name="I0100"/>
</Controller>
```

以下に各オブジェクト要素の属性をまとめます。

表 3-1 オブジェクト要素と属性

オブジェクト要素	必須属性	任意属性
Controller	Name Provider	Machine Option
Command	Name	Option
Extension		
File		
Robot		
Task		
Variable		
Message	Number	-

3.4.4. デバイスのケイパビリティ定義

デバイスのケイパビリティ定義では、オブジェクト要素とケイパビリティ定義要素を XML ファイルに追加してきます。

(1) オブジェクト要素を追加する。

オブジェクト要素は静的データ定義と同様に CRD ルート要素以下にツリー構造で配置します。全てのオブジェクト要素は、任意で name 属性と key 属性を付加することができます。

name 属性はオブジェクト名を示し、name 属性がないオブジェクトは名前を特に指定しないオブジェクトとして識別されます。

key 属性は同じ値を持つケイパビリティ定義要素をそのオブジェクトのケイパビリティとして識別します。key 属性がない場合は、デフォルトのケイパビリティ定義要素を使用すると識別されます。

以下にオブジェクト要素の例を示します。

```
<Controller>
  <File/>
  <Robot/>
```

```

<Task/>
<Variable name="@CURRENT_TIME" key="SYS_VAR_CURRENT_TIME"/>
</Controller>

```

上記の例では以下の内容を表示しています。

- 全てのコントローラ及びその下にあるファイル、ロボット、タスクオブジェクトはデフォルトのケイパビリティ定義要素を使用します。
- 全てのコントローラの下にある“@CURRENT_TIME”変数オブジェクトは，“SYS_VAR_CURRENT_TIME”のキーを持つケイパビリティ定義要素を参照します。

(2) ケイパビリティ要素を追加する。

各オブジェクトが参照するケイパビリティ定義要素は CRD ルート要素の下に配置します。ケイパビリティ定義要素は、コントローラオブジェクトのメンバの実装状況や引数及び戻り値のデータ型や値の範囲を指定します。各ケイパビリティ要素で定義できるメンバは異なります。詳細はを参照してください。

ケイパビリティ要素はコントローラケイパビリティ要素の中に他のオブジェクトケイパビリティを記述します。これによりコントローラ単位でケイパビリティ定義をすることができます。

各ケイパビリティ定義要素は、ObjectKey 要素を持つことができます。これは、オブジェクト要素で指定したケイパビリティを一意に判断するためのキーです。ObjectKey 要素を持たないケイパビリティ定義要素は、デフォルトのケイパビリティを定義していると判断します。

以下にケイパビリティ定義要素の例を示します。

```

<Controller_Info>
  <Args>
    <Arg index="1">
      <HelpString>コントローラ名</HelpString>
      <VarInfo>
        <DataInfo>
          <Min>0</Min>
          <Max>10</Max>
        </DataInfo>
      </VarInfo>
    </Arg>
    <Arg index="2"/>
  </Args>
  <Variable_Info>
    <ObjectKey>SYS_VAR_CURRENT_TIME</ObjectKey>
    <Put_Value_Info>
      <Args>
        <Arg index="1">
          <VarInfo type="VT_DATE"/>
        </Arg>
      </Args>
    </Put_Value_Info>
    <Get_Value_Info>
      <Result>
        <VarInfo type="VT_DATE"/>
      </Result>
    </Get_Value_Info>
  </Variable_Info>
</Controller_Info>

```

上記の例では以下の内容を表示しています。

- ・ デフォルトを指定したコントローラの AddController の引数の数は2個である.
- ・ デフォルトを指定したコントローラの AddController の第 1 引数はコントローラ名である.
- ・ デフォルトを指定したコントローラの AddController の第 1 引数の値は 1~10 の間の値を取る.
- ・ デフォルトを指定したコントローラ以下で Key = “SYS_VAR_CURRENT_TIME”を指定した変数は, Put_Value(), Get_Value()が実装されている.
- ・ 上記変数の Put_Value()は VT_DATE 型を設定する.
- ・ 上記変数の Get_Value()は VT_DATE 型を取得する.

3.5. CRDサンプル

ここでは分かりやすいように CRD の三つ用途に沿ってサンプルを紹介します. もちろん一つにまとめることもできますが, 実際の運用においてもこのような用途毎に分割した使われ方が一般的だと考えられます.

3.5.1. 静的データの定義サンプル

List 3-1 CRDSchema2.xsd

```
<?xml version="1.0" encoding="Shift_JIS"?>
<!--
***** [ORiN2] CRD Sample *****
-->
<CRD xsi:schemaLocation="http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema ../../Schema/CRDSchema2.xsd"
      xmlns=http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema
      xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance">

  <Help>CRD Test Data</Help>
  <Version>1.0.0</Version>
  <Controller name="RC1">
    <Attribute>0</Attribute>
    <Help>Sample Ctrl</Help>

    <!-- VT_I2 型の場合 -->
    <Variable name="Var1">
      <Value type="VT_I2">
        <iVal>10</iVal>
      </Value>
    </Variable>

    <!-- VT_I2 型の 1 次元配列の場合 -->
    <Variable name="Var2">
      <Value type="VT_ARRAY">
        <array type="VT_I2">
          <!-- 配列の情報 -->
          <dimension>1</dimension>
          <arrayBound>
            <lBound>0</lBound>
            <elements>3</elements>
          </arrayBound>
          <!-- データ -->
          <arrayData>
            <iVal>0</iVal>
            <iVal>1</iVal>
            <iVal>2</iVal>
          </arrayData>
        </array>
      </Value>
    </Variable>
  </Controller>
```

```
</CRD>
```

3.5.2. システムコンフィギュレーション定義サンプル

List 3-2 CRDSchema2.xsd

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<CRD xmlns=http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema
      xmlns:xsi=http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance
      xsi:schemaLocation=" http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema ../../Schema/CRDSchema2.xsd">

  <Controller name="RC5" option="Conn=eth:10.8.109.126" provider="CaoProv.DENSO.NetwoRC">
    <Robot name="Arm1"/>
    <Variable name="I0100"/>
  </Controller>
</CRD>
```

3.5.3. デバイスのケイパビリティ定義サンプル

List 3-3 CRDSample_DC.xml

```
<?xml version="1.0" encoding="utf-8"?>
<CRD xsi:schemaLocation=http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema ../../Schema/CRDSchema2.xsd
      xmlns=http://www.orin.jp/CRD/CRDSchema
      xmlns:xsi="http://www.w3.org/2001/XMLSchema-instance">

  <Controller_Info>
    <Args>
      <Arg index="1">
        <HelpString>コントローラ名</HelpString>
        <VarInfo>
          <DataInfo>
            <Min>0</Min>
            <Max>10</Max>
          </DataInfo>
        </VarInfo>
      </Arg>
      <Arg index="2"/>
    </Args>
    <Get_VariableNames_Info>
      <Result>
        <VarInfo type="VT_ARRAY|VT_VARIANT"/>
      </Result>
    </Get_VariableNames_Info>
    <Execute_Info>
      <Args>
        <Arg index="1">
          <VarInfo>
            <DataInfo>
              <List>getAutoMode</List>
              <List>putAutoMode</List>
            </DataInfo>
          </VarInfo>
        </Arg>
        <Arg index="2">
          <VarInfo type="VT_EMPTY"/>
          <VarInfo type="VT_I2">
            <DataInfo>
              <List>10</List>
              <List>20</List>
            </DataInfo>
          </VarInfo>
        </Arg>
      </Args>
    </Execute_Info>
  </Controller_Info>
```

```

    </VarInfo>
    <VarInfo type="VT_I4">
      <DataInfo>
        <Min>-1</Min>
        <Max>100</Max>
      </DataInfo>
    </VarInfo>
  </Arg>
</Args>
<Result>
  <VarInfo type="VT_EMPTY"/>
  <VarInfo type="VT_I2"/>
  <VarInfo type="VT_I4"/>
</Result>
</Execute_Info>

<File_Info>
  <Get_Value_Info>
    <Result>
      <VarInfo type="VT_BSTR"/>
      <VarInfo type="VT_ARRAY|VT_UI1"/>
    </Result>
  </Get_Value_Info>
  <Get_VariableNames_Info>
    <Result>
      <VarInfo type="VT_ARRAY|VT_VARIANT"/>
    </Result>
  </Get_VariableNames_Info>
  <Copy_Info/>
  <Delete_Info/>
  <Move_Info/>
</File_Info>

<Robot_Info>
  <Halt_Info/>
  <Move_Info/>
  <Speed_Info/>
</Robot_Info>

<Task_Info>
  <Start_Info/>
  <Stop_Info/>
</Task_Info>

<Variable_Info/>

<Message_Info>
  <Clear_Info/>
</Message_Info>

<Variable_Info>
  <ObjectKey>SYS_VAR_CURRENT_TIME</ObjectKey>
  <Put_Value_Info>
    <Args>
      <Arg index="1">
        <VarInfo type="VT_DATE"/>
      </Arg>
    </Args>
  </Put_Value_Info>
  <Get_Value_Info>
    <Result>
      <VarInfo type="VT_DATE"/>
    </Result>
  </Get_Value_Info>
</Variable_Info>

```

```
</Controller_Info>

<Controller>
  <File/>
  <Robot/>
  <Task/>
  <Variable name="@CURRENT_TIME" key="SYS_VAR_CURRENT_TIME"/>
</Controller>
</CRD>
```

4. CAPプログラミングガイド

4.1. 概要

CAP はインターネット経由で CAO プロバイダにアクセスするための通信プロトコルです。ORiN2 SDK では、SOAP を利用してインターネット経由での分散オブジェクト技術を実現しています。

本章では、実際に Web サーバを構築し、CAP を利用したプロバイダ呼び出し方法の解説をおこないます。本章の構成は、前半で基礎知識として SOAP を解説し、CAP の動作概要を説明します。後半では主に CAP を利用するための環境構築方法について説明し、最後にサンプルプログラムの作成をおこないます。

4.2. 基礎知識

4.2.1. SOAP

SOAP とは、XML フォーマットで記述されたメッセージを HTTP で送信することにより、リモートの PC 上にあるオブジェクトを呼び出すためのプロトコルです。

リモートの PC 上のオブジェクトを呼び出す技術としては、CORBA や DCOM などがあります。しかし、これらの技術は、独自のポート番号を利用して通信をおこなうために、ファイアウォールを介して通信をおこなう場合、特定のポートに対して通信を許可する設定をおこなう必要があります。近年では、DCOM のセキュリティホールを利用したワームなどが存在しますので、一般的には、DCOM のポートに通信を許可する設定はおこないません。

そこで、これらの問題を解決するために SOAP という技術が開発されました。SOAP では、オブジェクト間でやり取りされるメッセージの構造を規定しているだけなので、通信用プロトコルには既存の HTTP や SMTP を利用します。これにより、HTTP や SMTP が通信可能であれば、SOAP を利用することにより、ファイアウォールを介しての分散オブジェクト技術が利用可能になります。

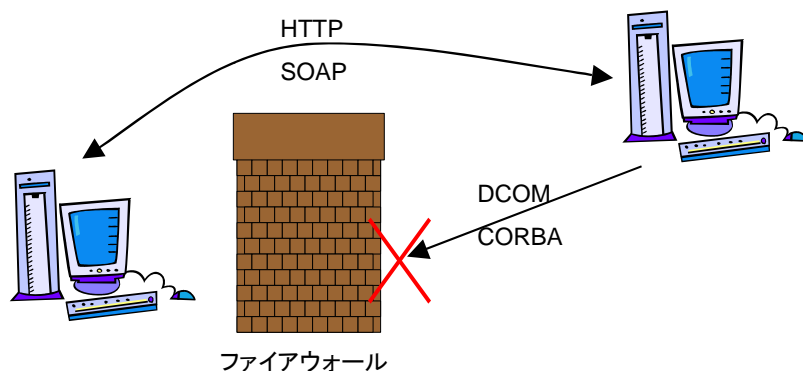


図 4-1 SOAP のイメージ

4.3. CAPプロバイダとCAPリスナ

CAO プロバイダにインターネット経由でアクセスするために、ORiN2 SDK では、CAP という仕様を規定し

ています。クライアントとサーバ間で、この CAP の仕様に準じたメッセージの送受信と解析をおこなうことで CAO プロバイダのリモートアクセスをおこなうことができます。

しかし、CAP に準じたメッセージの送受信と解析処理を作成するためには手間がかかるため、ORiN2 SDK では、CAP プロバイダと CAP リスナを提供しています。

CAP プロバイダと CAP リスナの動作概要を図 4-2 に示します。図に示すように CAP プロバイダは、リモート プロバイダへとアクセスするためのメッセージを生成・送信するためのプロバイダです。このメッセージは Web サーバへが公開している CAP リスナへと送信されます。CAP リスナとは、CAP に準じたメッセージを受信・解析し、COM コンポーネント(CAO プロバイダ)を呼び出すためのインタフェースです。

このように、CAP プロバイダ・リスナを経由することにより、他のローカルなプロバイダと同じようにリモートの プロバイダを利用することが可能となります。

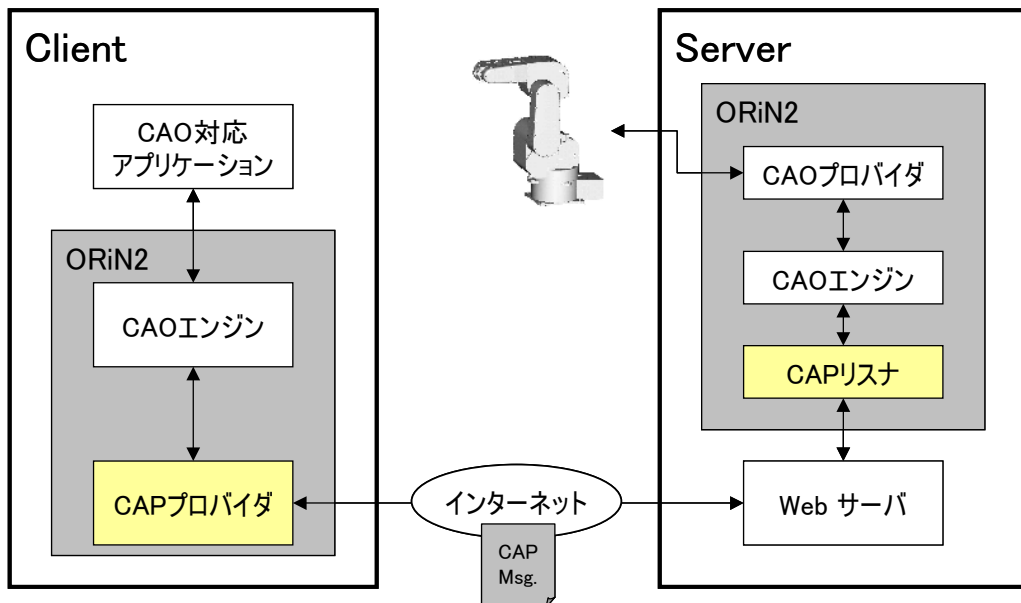


図 4-2 CAPの概要

4.4. 環境構築

本節では、CAP を利用するための環境構築の方法について解説します。

以降では、CAP プロバイダを利用して、リモートプロバイダを呼び出す側を“クライアント”，呼び出される側を“サーバ”と表現します。

なお、サーバ PC およびクライアント PC 共に ORiN2 SDK がインストールされているものとします。

4.4.1. サーバ側の設定

(1) Web サーバのインストール

上述したように、SOAP で送信されたメッセージは、Web サーバにより CAP リスナを起動し、メッセージを解析しています。そのため、まずは Web サーバを構築する必要があります。

Windows 2000 Server / Windows 2000 Professional / Windows XP Professional¹⁵には、Webサーバ IIS(Internet Information Service)が標準で添付されています¹⁵。しかし、デフォルトインストールでは、インストールされていないため、追加インストールをおこなう必要があります。(Windows 2000 Serverの場合は、標準でインストールされています。)

本項では、Windows XP Professional を例に挙げて説明をおこないます。

スタートメニューより、「設定」→「コントロールパネル」→「プログラムの追加と削除」を起動し、「Windows コンポーネントの追加と削除」を選択します。

図 4-3に示すような画面が表示されますので、その中からインターネットインフォメーションサービス(IIS)のチェックボックスにチェックを入れます。



図 4-3 Windowsコンポーネントの追加

¹⁵ Windows 2000 Professional / Windows XP Professional 付属の IIS は Windows 2000 Server のものと比較すると機能が制限されています。本格的なサービスを提供したい場合は Windows 2000 Server を利用してください。また、Windows XP Home Edition には、IIS は付属していませんのでご注意ください。

図 4-4に示すような画面が表示されますので、「WWW(World Wide Web)サービス」をダブルクリックし、すべてのコンポーネントのチェックボックスにチェックを入れてください。「インターネットインフォメーションサービススナップイン」と「共通コンポーネント」には、自動的にチェックが入ります。

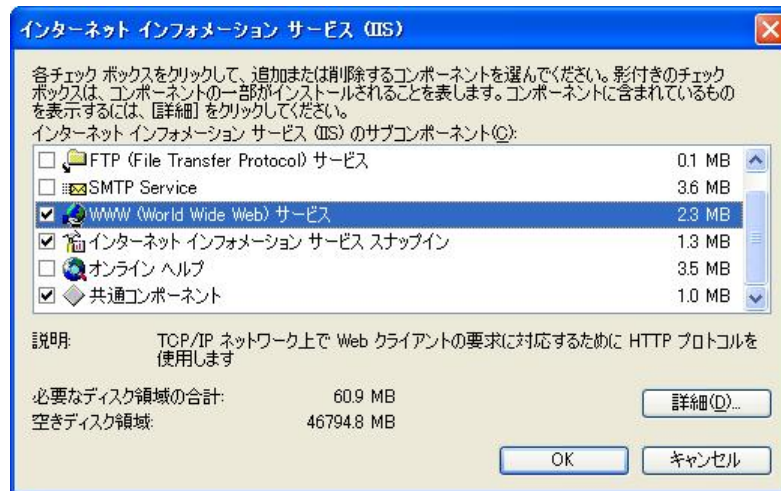


図 4-4 インターネットインフォメーションサービスの追加

インストールするコンポーネントを選択して、「次へ」ボタンを押下すると、Windows コンポーネントのインストールが開始されます。

インストール中に、「Windows XP Professional インストールディスク」が要求されます。

(2) SOAP Toolkit のインストール

次に、SOAP で送信されてきたメッセージを解析するために、Microsoft SOAP Toolkit 3.0 をインストールします。

ダウンロードした soapsdk.exe をダブルクリックし、指示に従ってボタンを押下するとインストールは完了します。設定はデフォルトのままでかまいません。

表 4-1 Soap Toolkit 3.0 ダウンロードサイト

ファイル名	URL
soapsdk.exe	http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?FamilyID=c943c0dd-ceec-4088-9753-86f052ec8450&DisplayLang=en

(3) 仮想ディレクトリの作成

Microsoft SOAP Toolkit 3.0 の SOAPVDIR.CMD を使用して仮想ディレクトリを作成します。ここでの仮想ディレクトリとは、HTTP でアクセスする際のアドレスを、物理パスに割り当てたものです。

SOAPVDIR.CMD は以下のディレクトリにあります。

<SOAP インストールディレクトリ>\Binaries

作成にはコマンドプロンプトで以下のコマンドを入力します。

SOAPVDIR.CMD CREATE Cap <CapListener の Bin ディレクトリ>

(4) IIS の設定

次に、IIS から CAP リスナを起動するための設定をおこないます。

スタートメニューより、「設定」→「コントロールパネル」→「管理ツール」を起動し、「インターネットインフォメーションサービス」を起動します。

インターネットインフォメーションサービスから、「ローカルコンピュータ」→「Web サイト」→「既定の Web サイト」を選択すると、先ほど作成した仮想ディレクトリ「Cap」が存在することを確認できます。

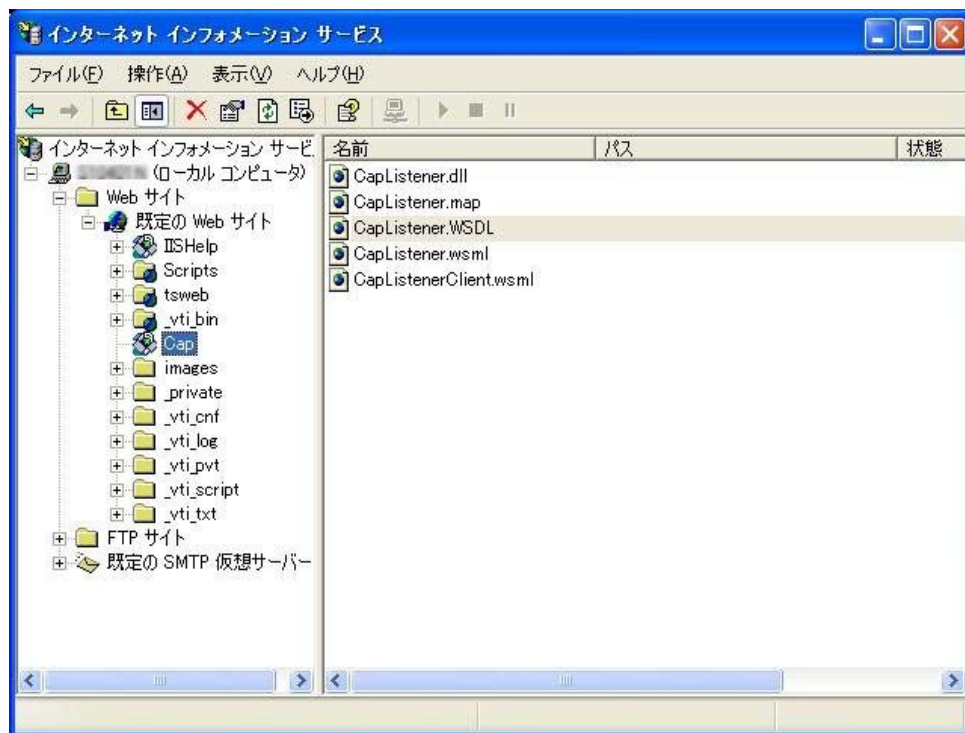


図 4-5 IIS の設定画面

ここで、Cap ディレクトリ内にある以下の二つのファイルを右クリックし、プロパティを表示させ、「読み取り」のチェックボックスにチェックを入れてください。

- CapLister.WSML
- CapListerClient.WSML

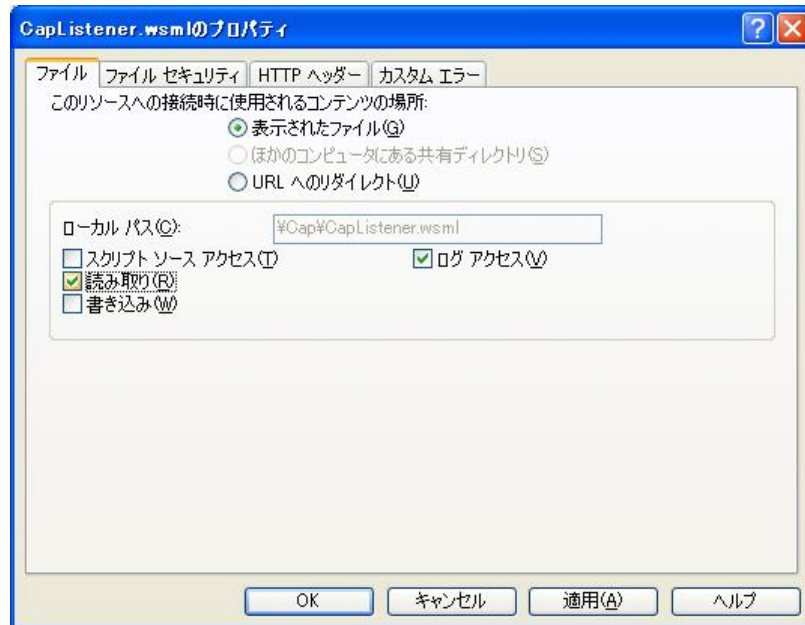


図 4-6 WSML ファイルの設定画面

(5) CAO エンジンの起動権限設定

次は、インターネット経由でアクセスしてきたユーザが、CAO エンジンを実行できるように権限の設定をおこないます。

<ORiN インストールディレクトリ>%CAO%Engine%Bin%CAO.EXE を右クリックし、「プロパティ」→「セキュリティ」→「追加」選択してください。

図 4-7 のようなダイアログが表示されますので、インターネットゲストアカウントを追加し、起動権限を追加します。

インターネットゲストアカウント名は、スタートメニューから「設定」→「コントロールパネル」→「ユーザーアカウント」で確認することができます。

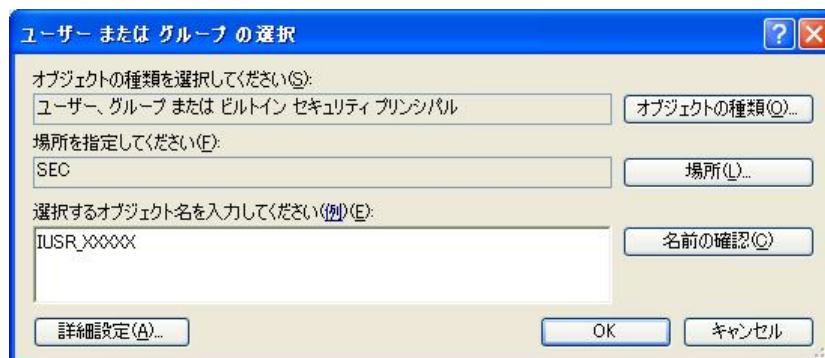


図 4-7 インターネットゲストアカウントの追加

アカウントの追加に成功すると、図 4-8のようにアカウント名が表示されます。

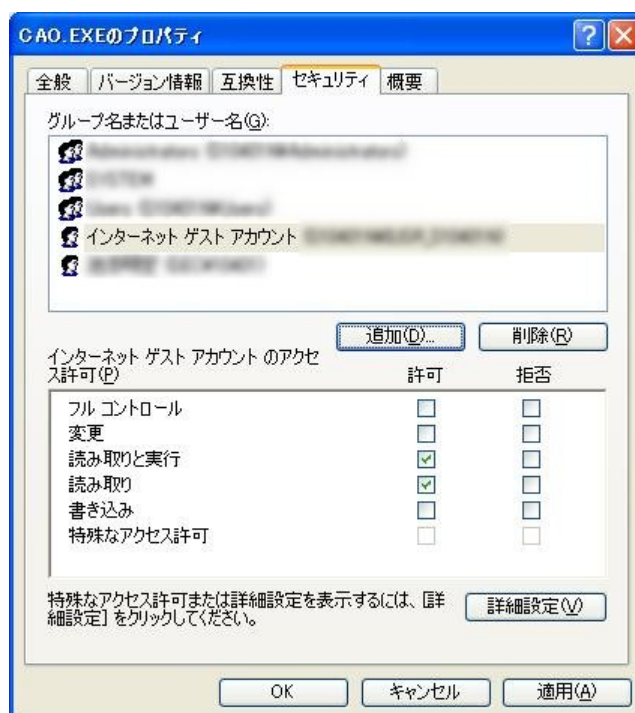


図 4-8 インターネットゲストアカウント追加結果

(6) CapListner.WSDL ファイルの設定

CapListener ディレクトリ内にある CapListner.WSDL ファイルの 3459 行目のサーバ名だけを実際の Web サーバの名前に変更します。

(例)soap:address location='http://**HOSTNAME**/Cap/CapListener.WSDL' />

(7) Windows XP SP2 の場合

Windows XP Service Pack 2(SP2)を適用している場合、デフォルトでは、ファイアウォールの設定により IIS が利用できないため、CAP を利用することはできません。この問題を解決するには、以下の 2 種類の方法があります。

- ・ Windows ファイアウォールの設定を“無効にする”
- ・ IIS の接続を例外として許可する設定をおこなう

既にファイアウォールなどでPCが十分に保護されている場合には、Windowsファイアウォールの設定を無効にすることができます。ファイアウォールの設定を無効にする場合は、以下に記述する設定を行わなくてもCAPプロバイダを利用することが可能です。その場合は、図 4-9に示すように、スタートメニューより、「コントロールパネル」→「Windowsファイアウォール」を起動し、“無効”にチェックを入れてください。

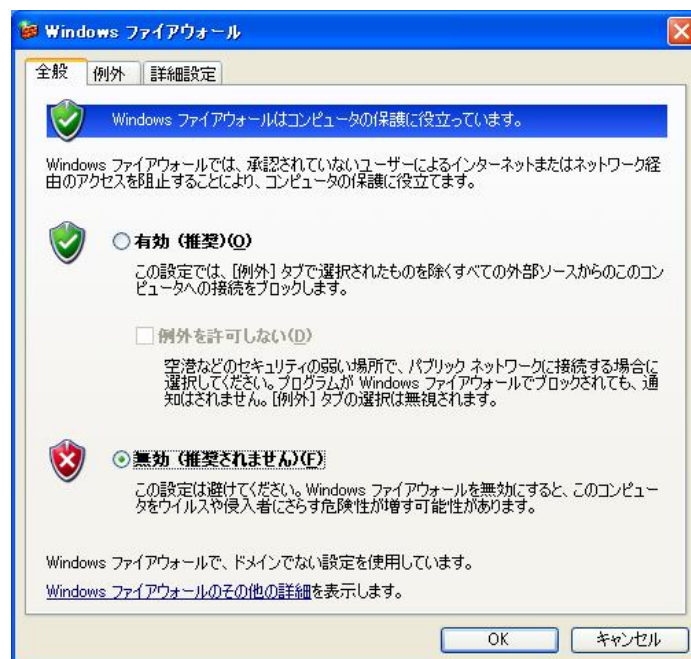


図 4-9 Windowsファイアウォールの無効化

ファイアウォールで IIS の接続を許可する場合は、以下の設定をおこないます。

スタートメニューから「コントロールパネル」→「Windows ファイアウォール」を起動し、「詳細設定」タブを選択してください。

図 4-10に示すように、「ネットワーク接続の設定」の中から、現在の環境に応じた接続方法を選択し、「設定」ボタンを押下してください。(今回の例では、“ローカルエリア接続”を選択しました)

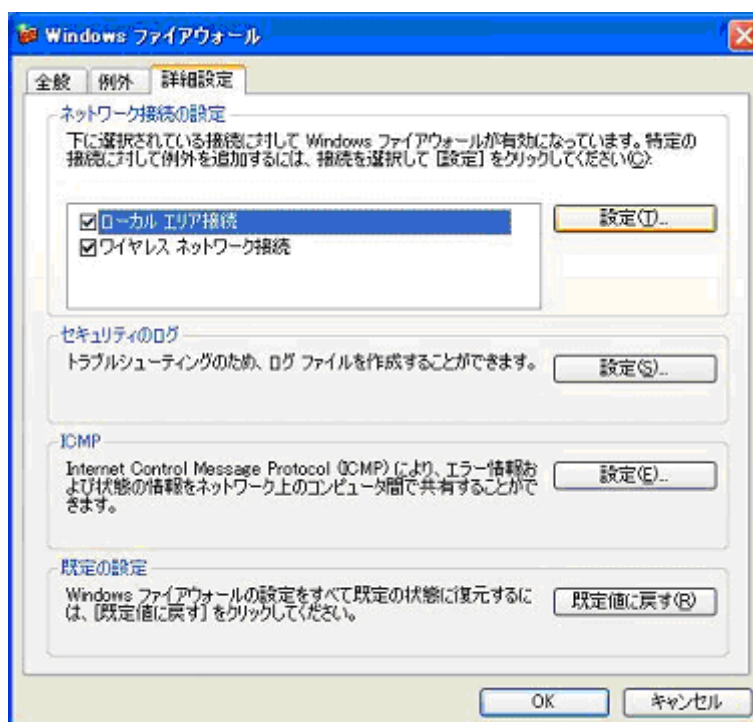


図 4-10 接続の例外設定

図 4-11のようなダイアログが表示されますので、“Webサーバー(HTTP)”にチェックを入れてください。



図 4-11 例外に追加するサービスの選択

4.4.2. クライアント側

(1) SOAP Toolkit のインストール

Microsoft SOAP Toolkit 3.0 をインストールします。(表 4-1参照)

4.5. サンプルプログラム

CAP の動作確認をおこなうために、サンプルアプリケーションを作成します。VB6 を起動して、二つのボタンと一つのテキストボックスを持つフォームを作成し、以下のようなコードを記述してください。

List 4-1 Sample.frm

```
Private eng As CaoEngine
Private ctrl As CaoController
Private var As CaoVariable

Private Sub Form_Load()
    Dim ws As CaoWorkspace
    Set eng = New CaoEngine
    Set ws = eng.Workspaces(0)
    ' サーバと接続
    Set ctrl = ws.AddController( _
        "RC1", "CaoProv. CAP", "", "Provider=CaoProv. DataStore, Server=XXXXX") (1)
    ' 変数の取得
    Set var = ctrl.AddVariable("Var1")
End Sub

' 変数の設定
Private Sub Command1_Click()
    var = Text1.Text
End Sub

' 変数の取得
Private Sub Command2_Click()
    Text1.Text = var
End Sub
```

ソースコード中の(1)を見てください。この `AddController` メソッドにより、インターネット経由でのプロバイダ接続をおこなっています。このメソッドの第1～第3引数は、他のプロバイダと同様のものです。第4引数の内容を以下に示します。

Provider : インターネット経由でアクセスするプロバイダ名
 Server : Web サーバのホスト名
 Option : リモートアクセスするプロバイダのオプション文字列

このように、CAPプロバイダを利用して、AddControllerメソッドで取得したCaoControllerオブジェクトは、指定したプロバイダ名のコントローラオブジェクトとして利用することができます。

上記例の場合では、ctrl オブジェクトは、DataStore プロバイダのコントローラオブジェクトとして扱うことができます。

5. 環境設定

5.1. DCOM設定手順

ORiN2 SDK において, CAO または CAO プロバイダをリモート起動させたい場合, DCOM のコンフィギュレーションツールを使って設定を行う必要があります. DCOM クライアントおよびサーバアプリケーションにセキュリティを正しく設定していないと, エラーが発生しリモート起動またはアクセスに失敗します.

ここではそのコンフィギュレーションツール DCOMCNFG.exe を使った DCOM の設定手順を解説します. 詳しくは下記の参考資料を参照してください.

- COM / COM+ セキュリティ
<http://www.microsoft.com/japan/com/compapers.asp - comseq>
- [VB5] DCOMCNFG.EXE で VB5 アプリに DCOM 設定をする方法
<http://support.microsoft.com/default.aspx?scid=kb;ja:JP183607>
- DCOM デプロイメントガイド, 翔泳社, Frank E. Redmond III 著, トップスタジオ 訳, 金子 良治 監修

ここで紹介する内容は, CAO, または CAO プロバイダを DCOM でリモート起動するための設定で, 本書の例ではセキュリティ設定がローレベル(セキュリティがかかっていない状態)になっています. この設定では外部から悪意のあるプログラムに攻撃される可能性があるので十分に注意してください. 可能であれば, 個々の環境に合わせて設定の見直しをおこなってください.

5.1.1. 準備

- (2) DCOM サーバとなるマシンと DCOM クライアントとなるマシンを用意してください.
ここでは以下の OS を対象とします.

表 5-1 OS と DCOM の対応

OS	DCOM サーバ	DCOM クライアント
Windows95	○	○
Windows98	○	○
WindowsNT 4.0 WorkStation	○	○
WindowsNT 4.0 Server	○	○
Windows2000 Professional	○	○
Windows2000 Server	○	○
Windows XP Professional	○	○

- (3) DCOM クライアントとサーバを同一ドメインに参加させてください.

5.1.2. WindowsNT / 2000 での設定項目

(1) DCOMCNFG.EXE を起動する

スタートメニューの“ファイル名を指定して実行”から“dcomcnfg”と入力し、DCOMCNFG.EXE を起動します。

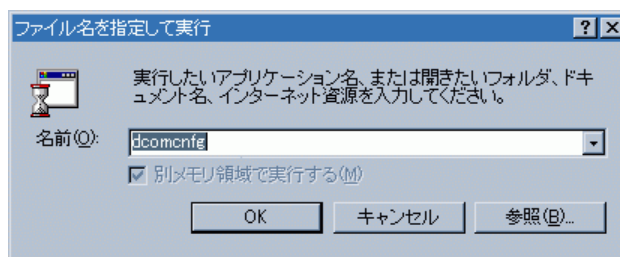


図 5-1 DCOMCNFG の起動

(2) 既定値の設定

既定の項目設定をすることによって、ローカル PC にインストールされた全ての DCOM アプリケーションの既定となる値を編集することが可能です。よって、慎重に設定する必要があります。また、セキュリティに問題がある場合はこの設定は変更しないでください。(但しその場合は CAO の DCOM 経由使用ができない場合があります)

「既定のプロパティ」タブを選択してください。

図 5-2に示すように，“このコンピュータ上で分散COMを使う”にチェックを入れてください。既定の分散COM通信プロパティの「認証レベル」を“なし”に，「偽装レベル」を“識別する”に設定してください。

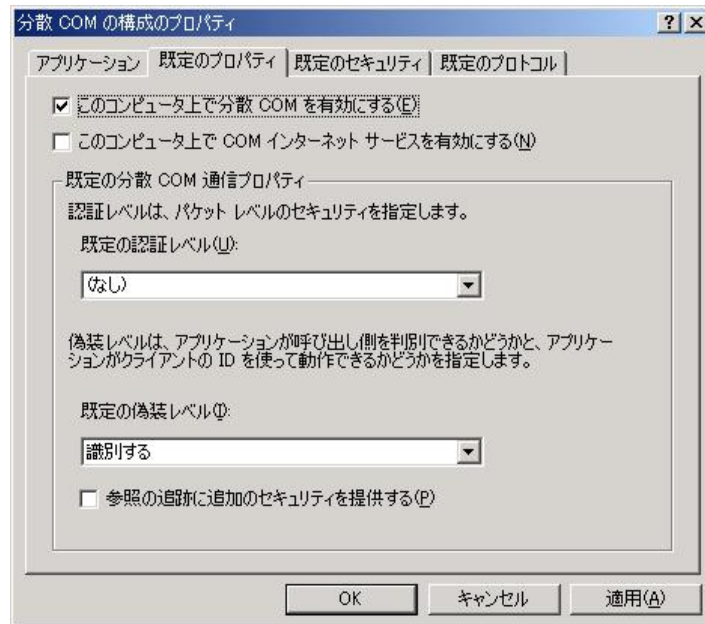


図 5-2 既定のプロパティ

(3) アプリケーション毎の設定

開いた DCOMCNFG.EXE のタブから「アプリケーション」タブを選択し，DCOM 起動をさせたいアプリケーションをアクティブにし，プロパティボタンを押下してください。

この操作はリモート起動するアプリケーション全てに対しておこなう必要があります。つまり，プロバイダを DCOM 起動する場合は，起動するプロバイダ全てに対してこの処理をおこないます。またリモート CAO を使用するのであれば，CAO にも同様の処理をする必要があります。

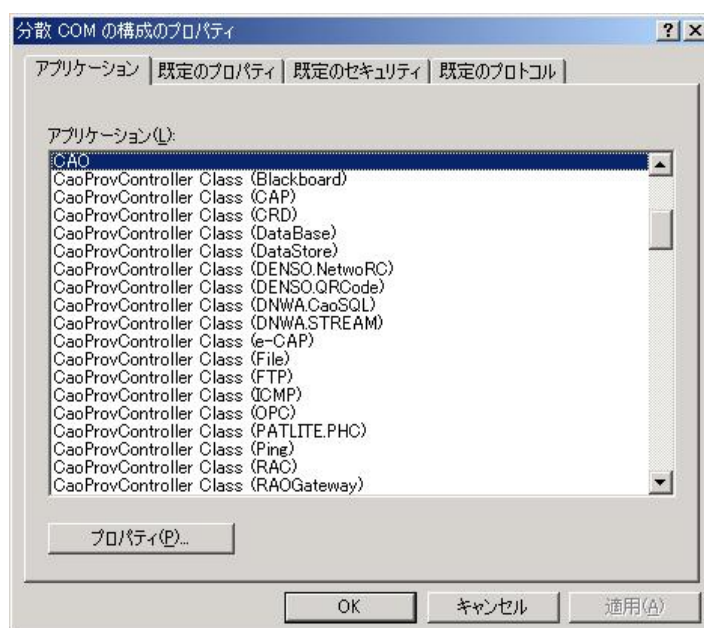


図 5-3 アプリケーションごとの設定

まずは、「全般」タブを選択してください。ここでは既定の認証レベルで設定した値を使用するので、「認証レベル」を“既定”にしてください。

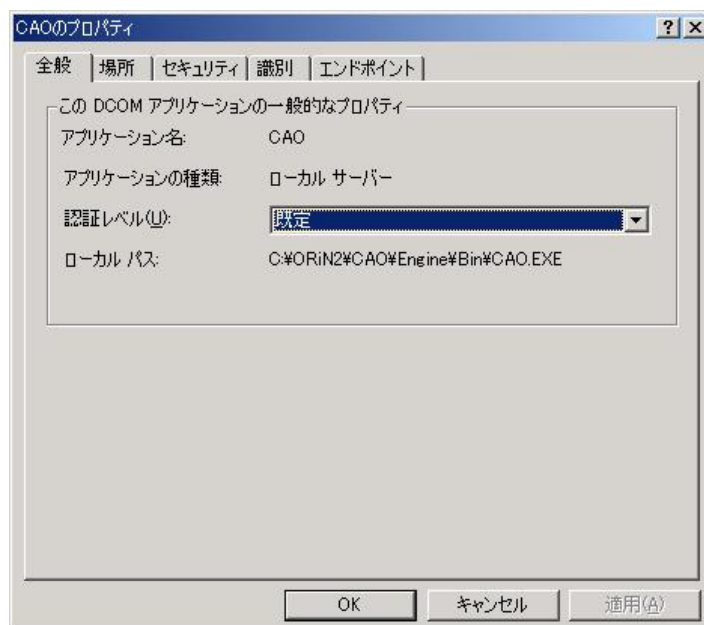


図 5-4 全般設定

次に「場所」タブを選択してください。ここではアプリケーションを実行する場所を指定することができます。“このコンピュータ上でアプリケーションを実行する”を選択してください。他のチェックは外しておいてください。



図 5-5 場所設定

次は「セキュリティ」タブを選択してください。

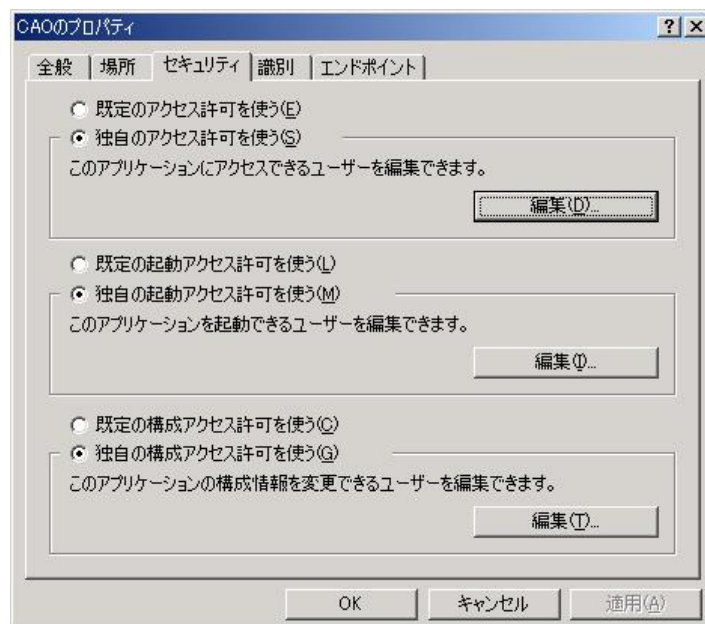


図 5-6 セキュリティ設定

「独自のアクセス権を使う」を選択し、「編集」ボタンを押下して以下のアクセス権を追加してください。

- Everyone - アクセスの許可
- Interactive - アクセスの許可
- System - アクセスの許可

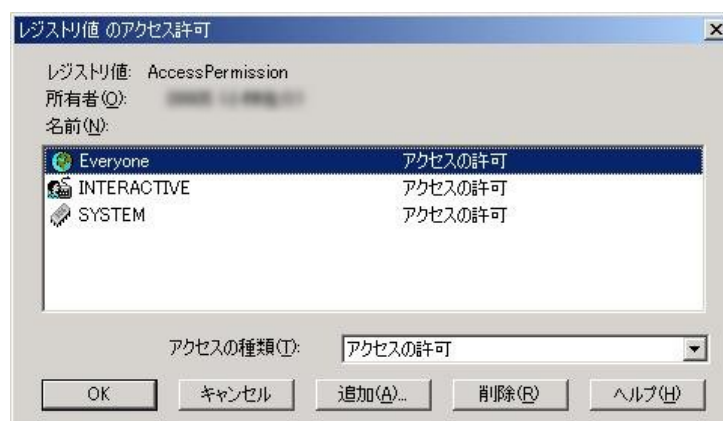


図 5-7 アクセス権の追加

同様に「独自の起動アクセス権を使う」を選択し、「編集」ボタンを押下して以下の起動アクセス権を追加してください。

- Everyone - アクセスの許可
- Interactive - アクセスの許可
- System - アクセスの許可

最後に「識別」タブを選択してください。そして，“対話ユーザ”を選択します。WindowsNT で DCOM サーバを起動する場合は“起動したユーザ”でも可能です。また“次のユーザ”で適宜ユーザを入力してもかまいません。但しサービス登録時には“起動ユーザ”と“対話ユーザ”を選択することはできません。(代わりにシステムアカウントが使えます)

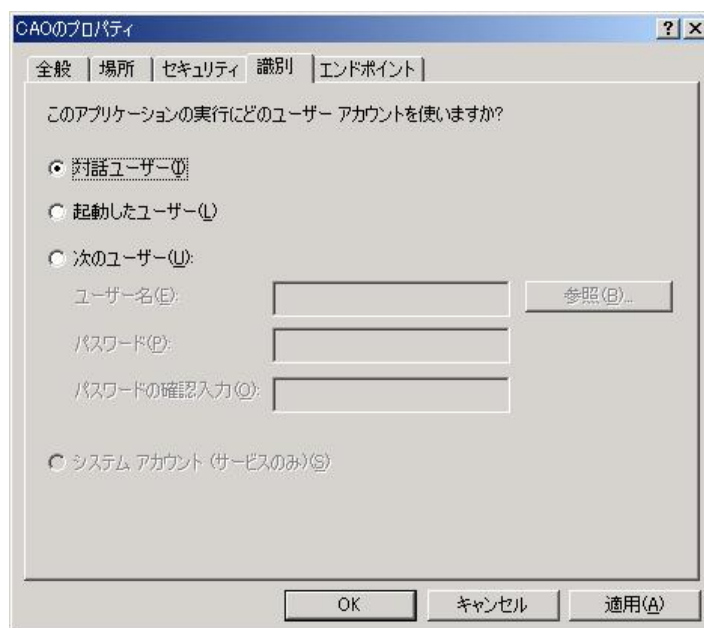


図 5-8 識別設定

5.1.3. Windows9xでの設定項目

Windows98, Windows95 を使用する場合は以下の URL から OS に合わせて DCOM98 又は 95 と DCOMCNFG98&95 をダウンロードし, PC にインストールしてください.

< Microsoft COM テクノロジ 関連ファイル ダウンロード >

<http://www.microsoft.com/com/default.mspx>

(1) DCOMCNFG.EXE を起動する

スタートメニューの「ファイル名を指定して実行」から“DCOMCNFG”と入力し, DCOMCNFG.EXE を起動します.

(2) 既定のプロパティの設定

以下の様に設定してください.

- ・ 認証レベル: なし
- ・ 偽装レベル: 識別する

(3) 既定のアクセス権の設定

以下のアクセス権を追加してください.

- ・ 世界 - 許可する

Windows 9x の DCOM98 ではリモート起動の機能がサポートされていないので, 9x 系の PC をサーバにするためには予めそのプログラムを起動しておかなくてはなりません. CAO エンジンではなく, プロバイダ DLL を予め起動しておきたい場合には `dllhost.exe` を利用して, コマンドプロンプトで下記のように起動してください.

```
> dllhost.exe {<AppID>}
```

例えば TCmini プロバイダの場合は, 下記のように実行します.

```
> dllhost.exe {2c140adc-c109-43df-a059-c3b116257658}
```

<AppID>は各プロバイダソースプロジェクトのCaoProvController.RGSファイルに記載されています. また ORiN2 SDK付属のCaoProvExecツールを利用するとGUIを使って上記と同じ設定ができます. CaoProvExec の利用方法については, 「[CAOプロバイダ作成ガイド](#)」を参照してください.

5.1.4. Windows XPでの設定項目

(1) DCOMCNFG の起動

スタートメニューの“ファイル名を指定して実行”から“dcomcnfg”と入力し、DCOMCNFG.EXE を起動します。

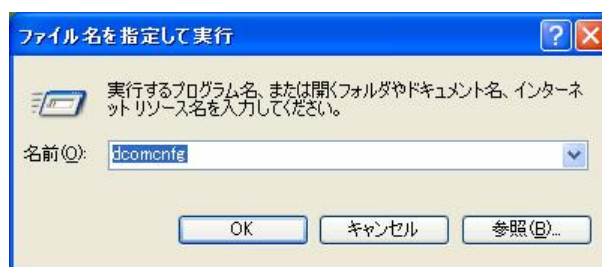


図 5-9 DCOMCNFG の起動方法

(2) マイコンピュータの設定

図 5-10に示すように、「コンポーネントサービス」→「コンピュータ」→「マイコンピュータ」を選択し、右クリックから「プロパティ」を起動します。

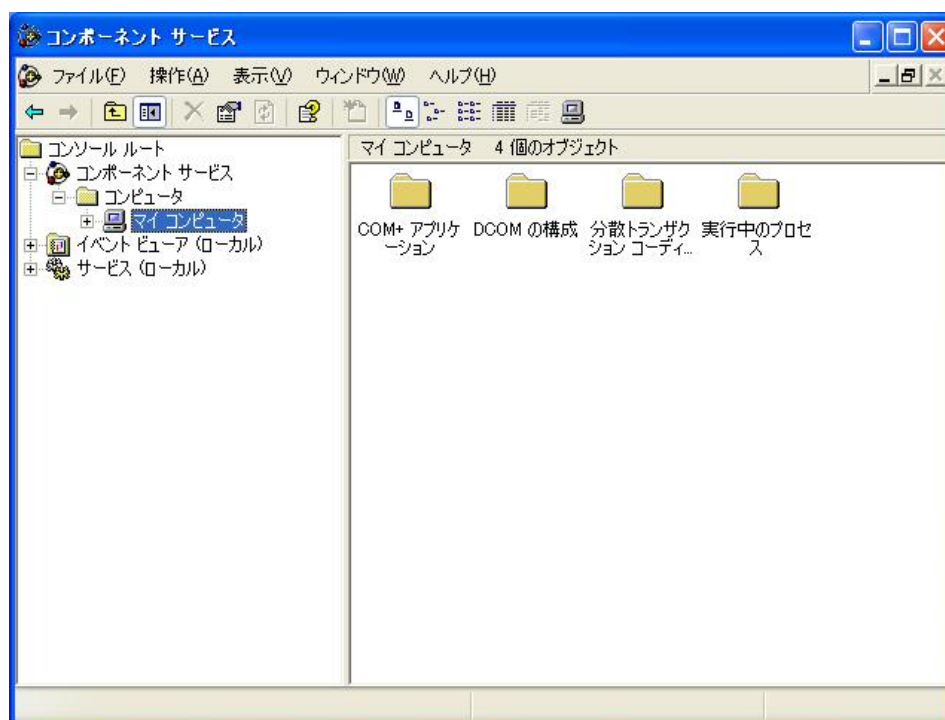


図 5-10 DCOMCNFGの設定画面

図 5-11に示すように、「規定のプロパティ」タブを選択します。

「このコンピュータ上で分散 COM を有効にする」にチェックを入れます。

「規定の認証レベル」を“なし”，「規定の偽装レベル」を“識別する”に設定します。

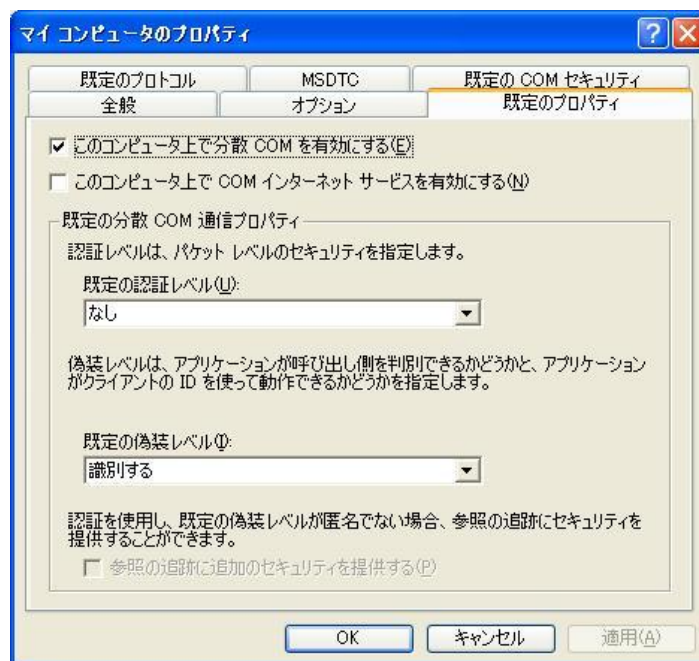


図 5-11 マイコンピュータのプロパティ

(3) アプリケーションごとの設定

「コンポーネントサービス」→「コンピュータ」→「マイコンピュータ」→「DCOM の構成」の中から、「CAO」を選択し、右クリックのプロパティを起動します。

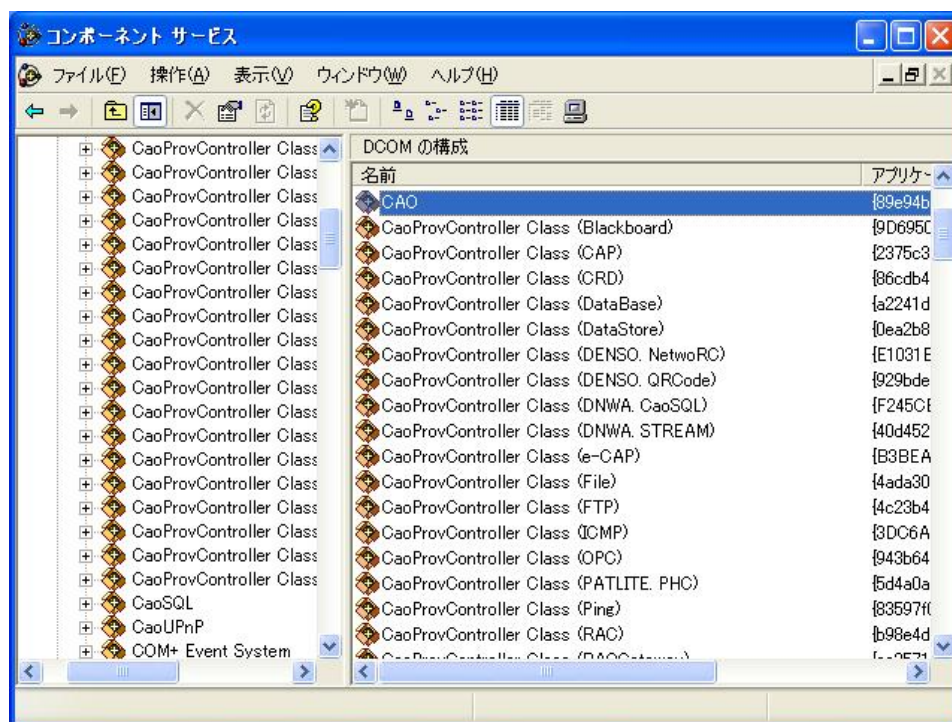


図 5-12 DCOMCNFG DCOM の構成設定画面

「全般」タブを選択し、「認証レベル」を“既定”に設定します。

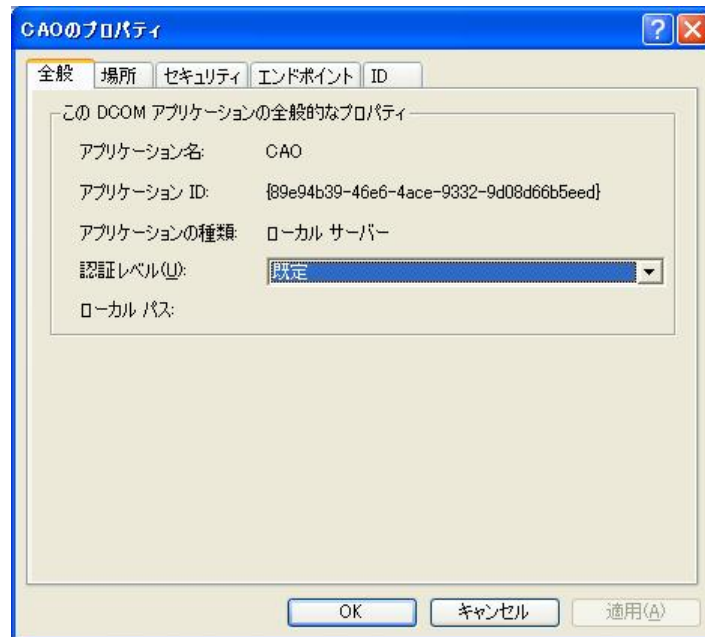


図 5-13 アプリケーションごとの設定 [全般]

「場所」タブを選択し、“このコンピュータでアプリケーションを実行する”にチェックを入れます。

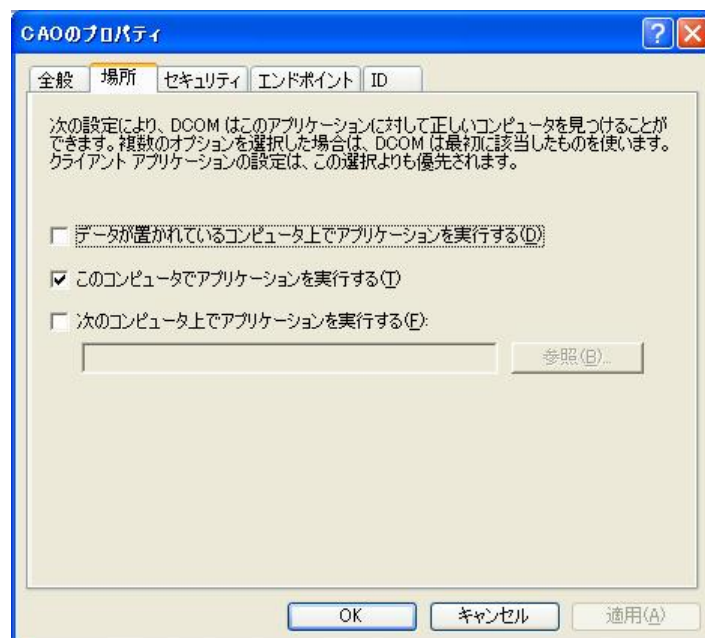


図 5-14 アプリケーションごとの設定 [場所]

「セキュリティ」タブを選択し、「起動許可」および「アクセス許可」の“カスタマイズ”にチェックを入れ、

「編集」ボタンを押下します。



図 5-15 アプリケーションごとの設定 [セキュリティ]

「追加」ボタンを押下し，“Everyone”と“Interactive”と“SYSTEM”というユーザを追加し，“アクセス許可”にチェックを入れます。



図 5-16 アプリケーションごとの設定 [セキュリティ アクセス許可]

「ID」タブを選択し，“対話ユーザー”にチェックを入れます。

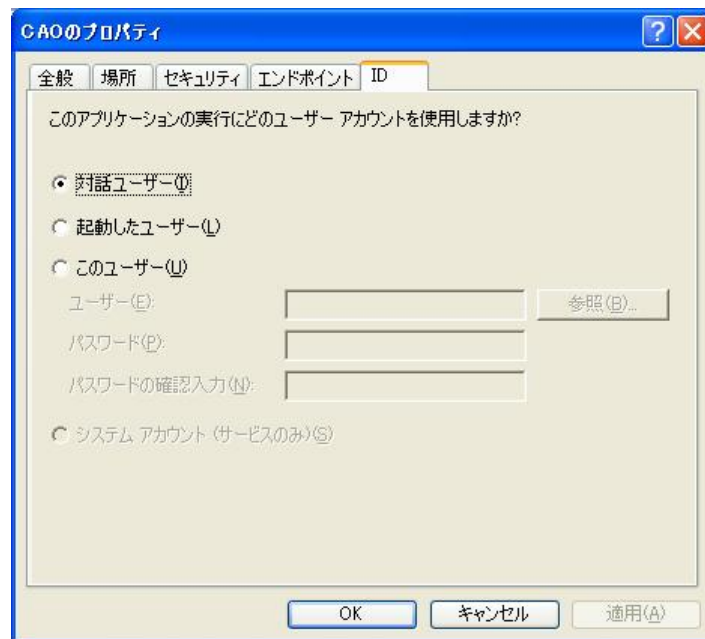


図 5-17 アプリケーションごとの設定 [ID]

利用する CAO プロバイダの設定も同様におこないます。

5.1.5. Windows XP SP2 での設定項目

Windows XP Service Pack 2(SP2)は、より強固なセキュリティを確立するために、DCOM などのセキュリティ項目が強化され、さらにファイアウォールの機能がデフォルトで有効になっています。

そのために、リモートの CAO プロバイダにアクセスすることができません。

5.1.5.1. Windowsファイアウォールの設定

既にファイアウォールなどで PC が十分に保護されている場合には、Windows ファイアウォールの設定を無効にすることができます。ファイアウォールの設定を無効にする場合は、以下に記述する設定を行わなくてもリモートで CAO プロバイダを利用することが可能です。

スタートメニューの「設定」→「コントロールパネル」から「Windows ファイアウォール」を起動します。

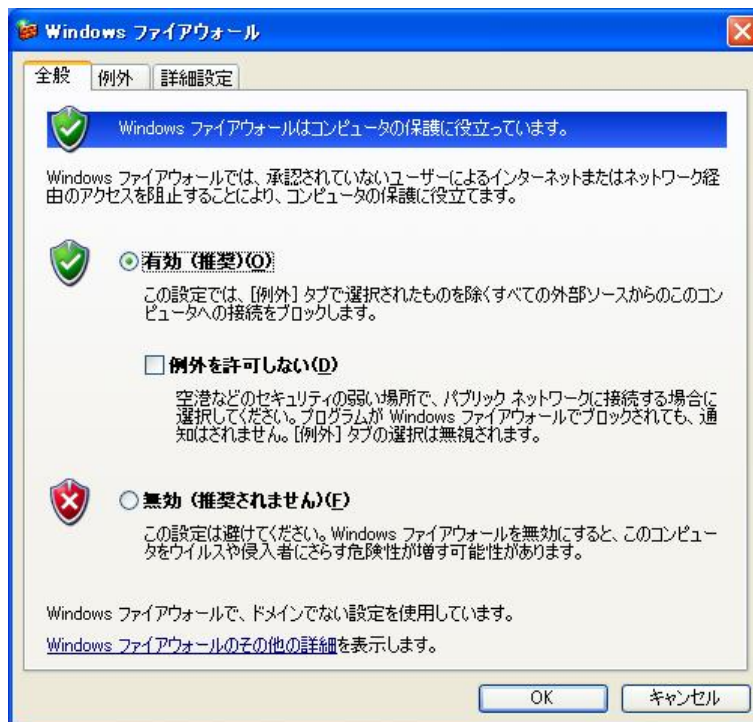


図 5-18 Windows ファイアウォール設定

5.1.5.2. ファイアウォールの例外設定

スタートメニューの「設定」→「コントロールパネル」から「Windows ファイアウォール」を起動し、「例外」タブを選択します。

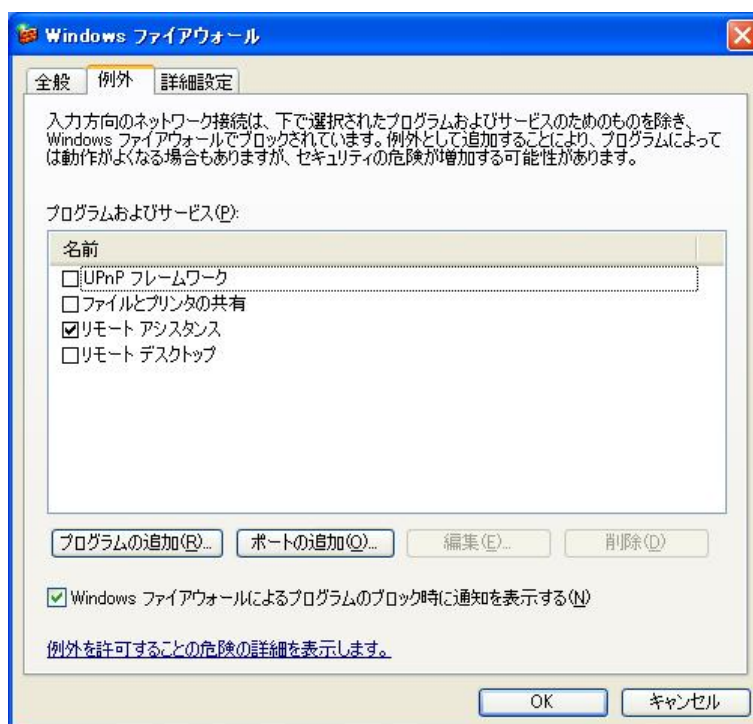


図 5-19 例外処理の追加

例外タブの「プログラムの追加」ボタンを押下すると図 5-20に示すようなダイアログが表示されますので、以下のプログラムを追加してください。プログラムがリストに存在しない場合は、「参照」ボタンを押下してください。

<Windows インストールディレクトリ>%WINDOWS%system32%dllhost.exe

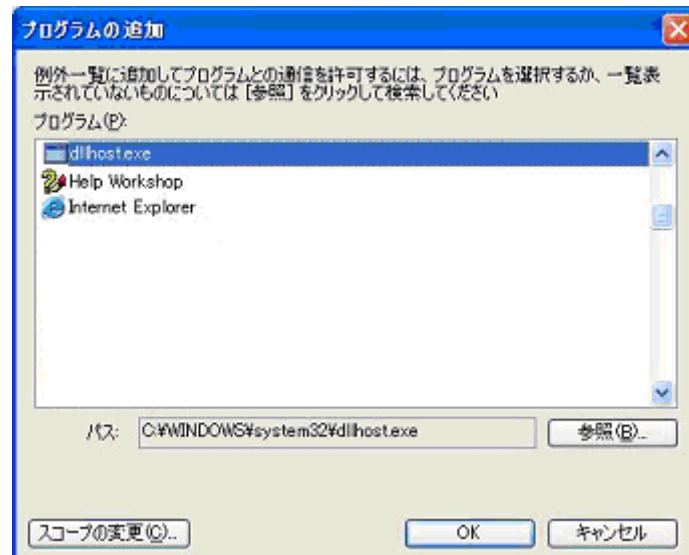


図 5-20 例外プログラムの追加

次に「Windows ファイアウォール」の「例外」タブで、ポートの追加を選択します。ポートの追加ダイアログで、以下のポートを追加します。

- ・ 名前:DCOM
- ・ ポート番号:135



図 5-21 例外ポート番号の追加

図 5-22に示すように、“DCOM”と“dllhost.exe”にチェックが入っていることを確認し、「OK」ボタンを押下します。以上でファイアウォールのセキュリティ設定は完了です。

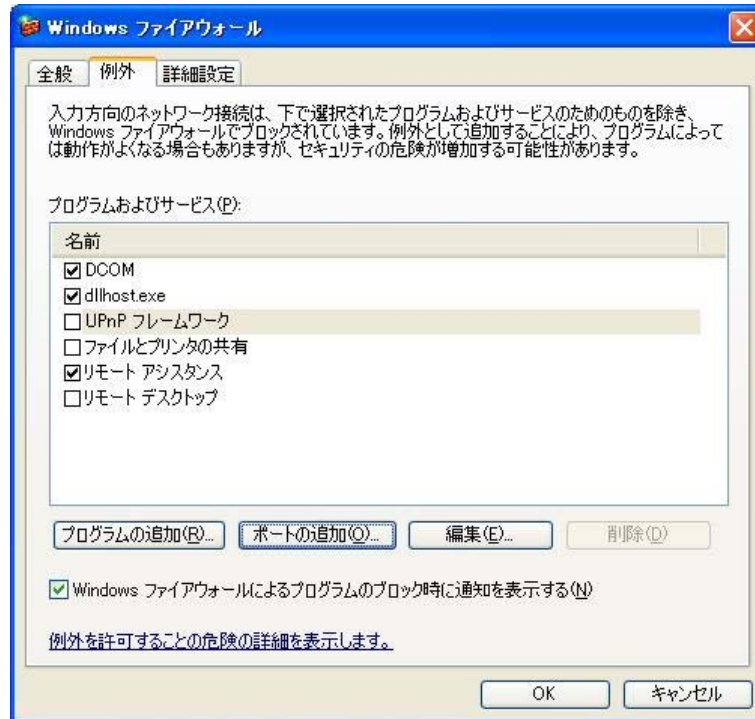


図 5-22 例外の追加結果

5.1.5.3. DCOMの設定

5.1.4 Windows XPでの設定項目と同様の設定をおこないます。

5.1.6. DCOMの設定確認

DCOM の設定を確認するために、ORiN2 SDK に付属のテストツール“CaoTester”を利用して、リモートでのプロバイダ接続テストをおこないます。

CaoTesterの詳細な利用方法は、[CaoTesterユーザーズガイド](#)を参照してください。

今回は、リモート接続をおこなうプロバイダとして、“DataStore プロバイダ”を利用します。DataStore プロバイダに対して、前述した「アプリケーションごとの設定」をおこなってください。

クライアント側のPCでCaoTesterを起動し、図 5-23に示すように、ワークスペース子ウィンドウに以下の項目を入力してください。

- Controller Name : 任意の文字列を入力してください。
Provider Name : 今回は CaoProv.DataStore を選択してください。
Machine Name : DCOM サーバのホスト名を入力してください。

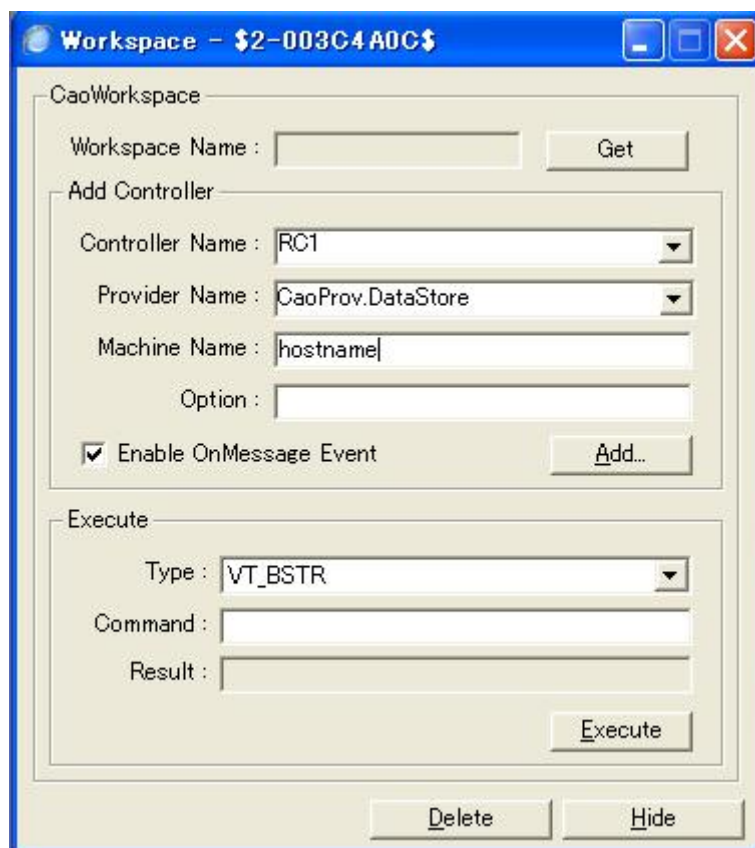


図 5-23 DCOMによるリモートプロバイダ接続

ワークスペース子ウィンドウの“Add”ボタンを押下して下さい。リモート接続に成功すると、CaoTester左下のログ表示ウィンドウに「Succeeded.」(図 5-24参照)と表示されます。リモート接続に失敗すると、「Failed. 〜」(図 5-25参照)と表示されます。

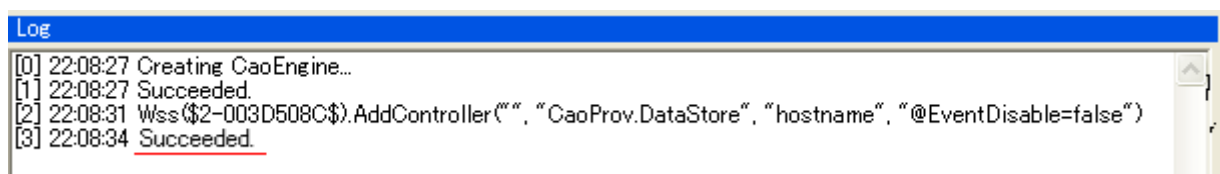


図 5-24 DCOM 接続結果(成功)

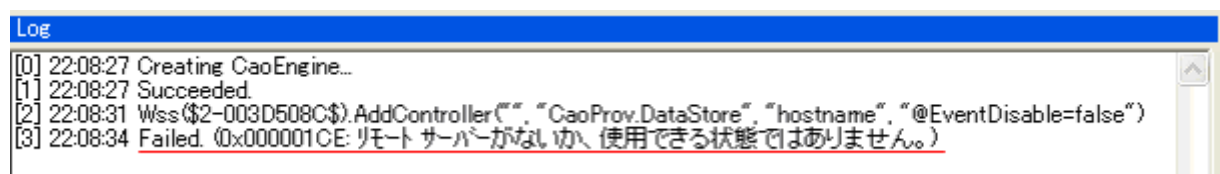


図 5-25 DCOM 接続結果(失敗)

6. CaoConfig

CaoConfig は, CAO エンジンおよび CAO プロバイダの動作設定を変更するためのツールです. CAO エンジンの優先度や, ログの出力レベル, CAO プロバイダごとの有効／無効切り替えや, CRD 切り替え機能などを設定することができます.

CaoConfig で設定した項目は, レジストリに反映されます.

6.1. 画面構成

ここでは CaoConfig の画面構成について説明します.

6.1.1. メニュー

6.1.1.1. Fileメニュー



図 6-1 CaoConfig File メニュー

[保存] – Save

レジストリに CaoConfig の情報を設定します.

[再読み込み] – Reload

レジストリから CaoConfig の情報を取得します.

[インポート] – Import

XML ファイルから CaoConfig の情報を読み込みます.

[エクスポート] – Export

CaoConfig の情報を XML ファイルに保存します.

[終了] – Exit

CaoConfig を終了します.

6.1.1.2. Actionメニュー



図 6-2 CaoConfig Action メニュー

[サービス開始] – Service Start

CAO サービスを開始します。CAO をサービスとして登録してある場合のみ、使用できます。

[サービス停止] – Service Stop

CAO をサービス停止します。CAO をサービスとして登録してある場合のみ、使用できます。

6.1.1.3. Helpメニュー

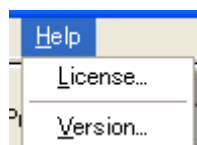


図 6-3 CaoConfig Help メニュー

[ライセンス] –License

CAO のライセンス管理画面を表示します。

[バージョン] –Version

CaoConfig のバージョン情報を表示します。

6.1.2. Cao Engineタブ

Cao Engine タブでは、CAO エンジンの動作設定を行うことができます。

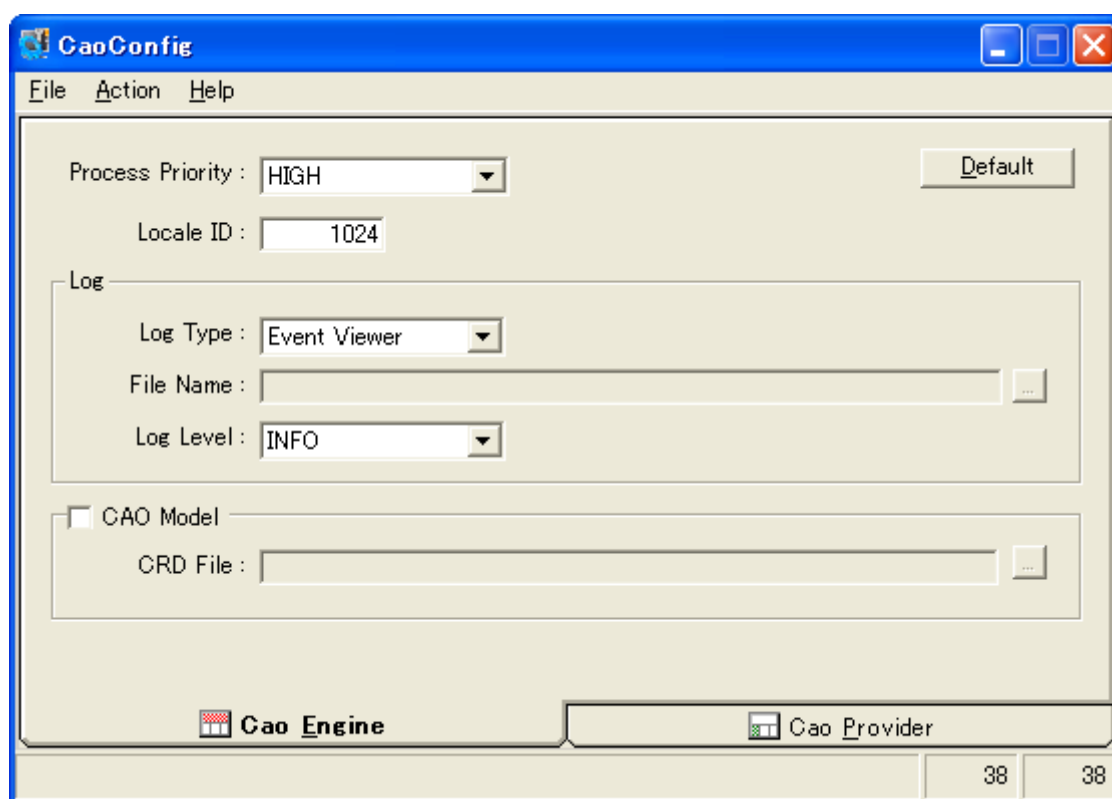


図 6-4 Cao Engine タブ

設定できる項目を以下に説明します。

[プロセス優先度] – Process Priority

CAO エンジンのプロセス優先度を設定します。優先度に対する調整は以下の通りです。

REAL TIME > HIGH > **NORMAL** > IDEL

[ローカル ID] – Local ID

使用する言語 ID を設定します。

[ログタイプ] - Log Type

CAO.exe のログの出力タイプを選択します。ログの出力タイプは以下のものを選択することができます。

表 6-1 ログタイプ

出力先	備考
Console	コンソールに出力します
Message Box	メッセージボックスに出力します(サービス起動時)

Event Viewer	イベントビューワに出力します(サービス起動時)
Debug Viewer	デバッグ出力します.
Text File	指定したテキストファイルに出力します.

[ログ出力ファイル名] – File Name

ログタイプが Text File の場合, ここにファイルパスを指定します.

[ログレベル] – Log Level

ログの出力レベルを設定します. (設定したログレベル以上のログを出力します)ログレベルの設定は, 以下の 5 つのレベルから選択することができます. “FATAL”がもっとも深刻度が高く, “DEBUG”に近づくほど深刻度は低くなります. 標準では“INFO”に設定されています.

FATAL > ERROR > WARN > **INFO** > DEBUG

[オブジェクトの自動登録] – CAO Model

エンジンのオブジェクト自動登録機能の有無を設定します.

オブジェクト自動登録機能の詳細については 2.7.2を参照して下さい.

[CRD ファイル] – CRD File

エンジンのオブジェクト自動登録で使用する CRD ファイルのパスを指定します。

[デフォルト] – Default

エンジンの設定状態をデフォルトに戻します。

6.1.3. Cao Providerタブ

Cao Provider タブでは、プロバイダごとの動作設定を行うことができます。

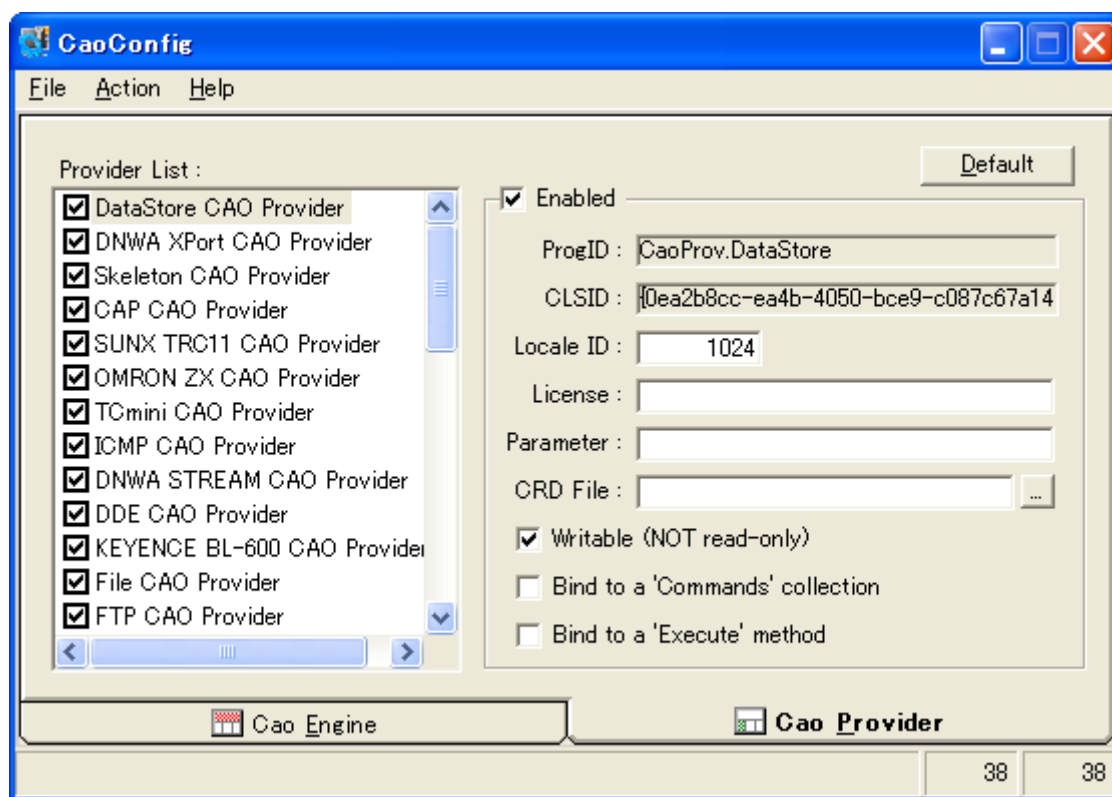


図 6-5 Cao Providerタブ

設定できる項目を以下に説明します。

[プロバイダリスト] – Provider List

インストールされているプロバイダの一覧を表示します。チェックボックスにより、Enable の切り替えを行うことができます。

[有効/無効設定] – Enable

プロバイダの使用可／不可の設定を行います。

[プログラム ID] – ProgID

プロバイダのプログラム ID を表示します。

[クラス ID] – CLSID

プロバイダのクラス ID を表示します。

[ローカル ID] – Locale ID

プロバイダのロケール ID を設定します。

[ライセンス] – Lisence

プロバイダのライセンスを設定します。

[パラメータ] – Parameter

プロバイダのパラメータを設定します。

[CRD ファイル] – CRD File

プロバイダごとのCRDファイル切り替え機能時に使用するCRDファイルへのパスを設定します。詳細については、2.7.1を参照して下さい。

[書込み禁止設定] – Writable (NOT read-only)

プロバイダの書込み禁止設定を行います。

[Commands コレクションメソッド動的追加機能] – Bind to a ‘Commands’ collection

CaoCommandsのメソッド動的追加機能の有無を設定します。詳しくは2.7.3を参照して下さい。

[Execute メソッド動的追加機能] – Bind to a ‘Execute’ method

CaoController::Executeのメソッド動的追加機能の有無を設定します。詳しくは2.7.3を参照して下さい。

[デフォルト] – Default

プロバイダの設定状態をデフォルトに戻します。

付録A. 付録

付録A.1. CAOエンジン関数一覧

◆ CaoEngine Object — エンジン

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
CaoEngine (クラス番号:0)	EngineStatus	P エンジンステータスオブジェクトの取得	R		オブジェクト: IcaoEngineStatus	
	Workspaces	P ワークスペースコレクションの取得	R		コレクション: ICaoWorkspaces	
	AddWorkspace	M ワークスペースオブジェクトの追加	S	ワークスペース名:BSTRT, [オプション:BSTRT]	オブジェクト: ICaoWorkspace	CaoWorkspaces::Add()と同じ機能.
	Execute	M 拡張コマンドの実行	S	コマンド:BSTRT [パラメータ:VARIANT]	結果:VARIANT	機能拡張用(予約)
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ E: イベント		(注1)	・[]内は省略可能引数. ・BSTRT 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL. ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ. ・VARIANT 型の省略可能引数のデフォルト値は VT_ERROR.		

(注1)記号の意味は次の通り. この中で, CAO エンジンのアクセス制限機能(書込み制限機能)の ON/OFF に影響を受けるのは, W 属性のメソッドおよびプロパティのみ.

R —Read : コントローラ, またはプロバイダ, またはエンジンのステータスやコンフィギュレーションを取得する.

W —Write : コントローラのステータスや, コンフィギュレーションを変化させる. ただし, Execute メソッドはコマンドの内容に依存するので, S 属性とする.
必要があれば, プロバイダで書込み制限を実装する.

S —Setup : プロバイダ, またはエンジンのステータスやコンフィギュレーションを変化させる.

◆ CaoWorkspace(s) Object — ワークスペース

クラス	プロパティ、メソッド、イベント		説明	R/W	関数の引数		備考
					IN	OUT RETVAL	
CaoWorkspaces (クラス番号: 1)	Count	P	コレクション数の取得	R		コレクション数: long	
	Add	M	ワークスペースオブジェクトの追加	S	ワークスペース名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoWorkspace	ワークスペース名は任意の文字列。ワークスペース名を省略(NULL 指定)した場合は自動的にユニークな名前が付けられます。
	Clear	M	全てのワークスペースオブジェクトの解放	S			
	IsMember	M	ワークスペースオブジェクトの登録確認	R	ワークスペース名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL	
	Item	M	ワークスペースオブジェクトの取得	R	ワークスペース名/番号: VARIANT	オブジェクト: ICaoWorkspace	デフォルトメンバー
	Remove	M	ワークスペースオブジェクトの開放	S	ワークスペース名/番号: VARIANT		
CaoWorkspace (クラス番号: 2)	Controllers	P	コントローラコレクションの取得	R		コレクション: ICaoControllers	
	Index	P	ワークスペース番号の取得	R		ワークスペース番号: long	
	Name	P	ワークスペース名の取得	R		ワークスペース名: BSTR	
	ProviderNames	P	プロバイダ名リストの取得	R	[オプション: BSTR]	プロバイダ名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等。
	AddController	M	コントローラオブジェクトの追加	S	コントローラ名: BSTR, プロバイダ名: BSTR, [マシン名: BSTR, [オプション: BSTR]]	オブジェクト: ICaoController	CaoControllers::Add()と同じ機能。
	Execute	M	拡張コマンドの実行	S	コマンド: BSTR [パラメータ: VARIANT]	結果: VARIANT	機能拡張用(予約)
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ E: イベント				・[]内は省略可能引数。 ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL。 ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ。		

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
				・VARIANT 型の省略可能引数のデフォルト値は VT_ERROR.		

◆ CaoController(s) Object - コントローラ

クラス	プロパティ、メソッド、イベント		説明	R/W	関数の引数		備考
					IN	OUT RETVAL	
CaoControllers (クラス番号:3)	Count	P	コレクション数の取得	R		コレクション数:long	
	Add	M	コントローラオブジェクトの追加	S	コントローラ名:BSTR, プロバイダ名:BSTR, [マシン名:BSTR], [オプション:BSTR]	オブジェクト: ICaoController	コントローラ名は任意の文字列. オプションはタイムアウト値, イベント許可など. イベント許可: @EventEnable[=True/False] デフォルト値は"True"
	Clear	M	全てのコントローラオブジェクトの解放	S			
	IsMember	M	コントローラオブジェクトの登録確認	R	コントローラ名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL	
	Item	M	コントローラオブジェクトの取得	R	コントローラ名/番号: VARIANT	オブジェクト:ICaoController	デフォルトメンバー
	Remove	M	コントローラオブジェクトの開放	S	コントローラ名/番号: VARIANT		
CaoController (クラス番号:4)	Attribute	P	属性の取得	R		属性:long	
	CommandNames	P	拡張ボード名リストの取得	R	[オプション:BSTR]	コマンド名リスト:VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Commands	P	コマンドコレクションの取得	R		コレクション: ICaoCommands	
	ExtensionNames	P	コマンド名リストの取得	R	[オプション:BSTR]	拡張ボード名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Extensions	P	拡張ボードコレクションの取得	R		コレクション: ICaoExtensions	
	FileNames	P	ファイル名リストの取得	R	[オプション:BSTR]	ファイル名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Files	P	ファイルコレクションの取得	R		コレクション:ICaoFiles	ルートディレクトリのファイルコレクション.
	Help	P	ヘルプ	R		ヘルプ文字列:BSTR	

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
	ID P	ID	R/W	ID: VARIANT	ID: VARIANT	
	Index P	コントローラ番号の取得	R		コントローラ番号: long	
	Name P	コントローラ名の取得	R		コントローラ名: BSTR	
	RobotNames P	ロボット名リストの取得	R	[オプション: BSTR]	ロボット名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Robots P	ロボットコレクションの取得	R		コレクション: ICaoRobots	
	Tag P	タグ	R/S	タグデータ: VARIANT	タグデータ: VARIANT	
	TaskNames P	タスク名リストの取得	R	[オプション: BSTR]	タスク名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Tasks P	タスクコレクションの取得	R		コレクション: ICaoTasks	
	VariableNames P	変数名リストの取得	R	[オプション: BSTR]	変数名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Variables P	変数コレクションの取得	R		コレクション: ICaoVariables	
	AddCommand M	コマンドオブジェクトの追加	S	コマンド名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoCommand	CaoCommands::Add()と同じ機能.
	AddExtension M	拡張ボードオブジェクトの追加	S	拡張ボード名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoExtension	CaoExtensions::Add()と同じ機能.
	AddFile M	ファイルオブジェクトの追加	S	ファイル名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoFile	CaoFiles::Add()と同じ機能.
	AddRobot M	ロボットオブジェクトの追加	S	ロボット名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoRobot	CaoRobots::Add()と同じ機能.
	AddTask M	タスクオブジェクトの追加	S	タスク名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoTask	CaoTasks::Add()と同じ機能.
	AddVariable M	変数オブジェクトの追加	S	変数名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoVariable	CaoVariables::Add()と同じ機能.
	Execute M	拡張コマンドの実行	S	コマンド: BSTR [パラメータ: VARIANT]	結果: VARIANT	機能拡張用
	GetMessage M	メッセージの取得	R		メッセージ: ICaoMessage	エンジン内のメッセージキューからメッセージ

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
						を取得。OnMessage イベント機能が無効の場合にのみ取得できる。
	OnMessage E	メッセージ受信イベント	R	メッセージ: ICaoMessage		<ul style="list-style-type: none"> ・プロバイダ(コントローラ)→エンジン→クライアントの呼び出しを実現する。 ・メッセージ番号の負の範囲は ORiN で予約されている。 ・イベントの無効化は AddController() のオプションで指定する。
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ E: イベント			<ul style="list-style-type: none"> ・[]内は省略可能引数。 ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL。 ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ。 ・VARIANT 型の省略可能引数のデフォルト値は VT_ERROR。 		

◆ CaoExtension(s) Object — 拡張ボード

クラス	プロパティ、メソッド、イベント		説明	R/W	関数の引数		備考
					IN	OUT RETVAL	
CaoExtensions (クラス番号:5)	Count	P	コレクション数の取得	R		コレクション数:long	
	Add	M	拡張ボードオブジェクトの追加	S	拡張ボード名:BSTR, [オプション:BSTR]	オブジェクト:ICaoExtension	
	Clear	M	全ての拡張ボードオブジェクトの解放	S			
	IsMember	M	拡張ボードオブジェクトの登録確認	R	拡張ボード名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL	
	Item	M	拡張ボードオブジェクトの取得	R	拡張ボード名/番号: VARIANT	オブジェクト:ICaoExtension	デフォルトメンバー
	Remove	M	拡張ボードオブジェクトの開放	S	拡張ボード名/番号: VARIANT		
CaoExtension (クラス番号:6)	Attribute	P	属性の取得	R		属性:long	
	Help	P	ヘルプ	R		ヘルプ文字列:BSTR	
	ID	P	ID	R/W	ID:VARIANT	ID:VARIANT	
	Index	P	拡張ボード番号の取得	R		拡張ボード番号:long	
	Name	P	拡張ボード名の取得	R		拡張ボード名:BSTR	
	Tag	P	タグ	R/S	タグデータ:VARIANT	タグデータ:VARIANT	
	VariableNames	P	変数名リストの取得	R	[オプション:BSTR]	変数名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Variables	P	変数コレクションの取得	R		コレクション:ICaoVariables	
	AddVariable	M	変数オブジェクトの追加	S	変数名:BSTR, [オプション:BSTR]	オブジェクト:ICaoVariable	CaoVariables::Add()と同じ機能.
	Execute	M	拡張コマンドの実行	S	コマンド:BSTR [パラメータ:VARIANT]	結果:VARIANT	機能拡張用
記号の意味	M:メソッド P:プロパティ E:イベント				<ul style="list-style-type: none"> ・[]内は省略可能引数. ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL. ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ. ・VARIANT 型の省略可能引数のデフォルト値は 		

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
				VT_ERROR.		

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
CaoExtensions (クラス番号: 5)	Count	P コレクション数の取得	R		コレクション数: long	
	Add	M 拡張ボードオブジェクトの追加	S	拡張ボード名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoExtension	
	Clear	M 全ての拡張ボードオブジェクトの解放	S			
	IsMember	M 拡張ボードオブジェクトの登録確認	R	拡張ボード名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL	
	Item	M 拡張ボードオブジェクトの取得	R	拡張ボード名/番号: VARIANT	オブジェクト: ICaoExtension	デフォルトメンバー
	Remove	M 拡張ボードオブジェクトの開放	S	拡張ボード名/番号: VARIANT		
CaoExtension (クラス番号: 6)	Attribute	P 属性の取得	R		属性: long	
	Help	P ヘルプ	R		ヘルプ文字列: BSTR	
	ID	P ID	R/W	ID: VARIANT	ID: VARIANT	
	Index	P 拡張ボード番号の取得	R		拡張ボード番号: long	
	Name	P 拡張ボード名の取得	R		拡張ボード名: BSTR	
	Tag	P タグ	R/S	タグデータ: VARIANT	タグデータ: VARIANT	
	VariableNames	P 変数名リストの取得	R	[オプション: BSTR]	変数名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Variables	P 変数コレクションの取得	R		コレクション: ICaoVariables	
	AddVariable	M 変数オブジェクトの追加	S	変数名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoVariable	CaoVariables::Add()と同じ機能.
	Execute	M 拡張コマンドの実行	S	コマンド: BSTR	結果: VARIANT	機能拡張用

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
				[パラメータ: VARIANT]		
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ E: イベント			<ul style="list-style-type: none"> ・[]内は省略可能引数. ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL. ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ. ・VARIANT 型の省略可能引数のデフォルト値は VT_ERROR. 		

◆ CaoFile(s) Object — ファイル

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
CaoFiles (クラス番号:7)	Count	P	コレクション数の取得	R	コレクション数:long	
	Add	M	ファイルオブジェクトの追加	S	ファイル名:BSTR, [オプション:BSTR]	オブジェクト:ICaoFile ファイル作成: @Create=[数値]デフォルト値は0 0: 作成しない 0 以外: 作成する プロバイダが書き込み禁止のとき, @Create オプションが 0 以外のときは書き込みエラーになる.
	Clear	M	全てのファイルオブジェクトの解放	S		
	IsMember	M	ファイルオブジェクトの登録確認	R	ファイル名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL
	Item	M	ファイルオブジェクトの取得	R	ファイル名/番号: VARIANT	オブジェクト:ICaoFile デフォルトメンバー
	Remove	M	ファイルオブジェクトの開放	S	ファイル名/番号: VARIANT	
CaoFile (クラス番号:8)	Attribute	P	属性の取得	R		属性:long
	DateCreated	P	作成日時	R		作成日時: VARIANT
	DateLastAccessed	P	最終アクセス日時	R		最終アクセス日時: VARIANT
	DateLastModified	P	最終変更日時	R		最終変更日時: VARIANT
	FileNames	P	ファイル名リストの取得	R	[オプション:BSTR]	ファイル名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY) オプションはフィルター条件等. 属性がディレクトリの場合に子ファイル名一覧を返す.
	Files	P	ファイルコレクションの取得	R		コレクション: ICaoFiles
	Help	P	ヘルプ	R		ヘルプ文字列: BSTR
	ID	P	ID	R/W	ID: VARIANT	ID: VARIANT
	Index	P	ファイル番号の取得	R		ファイル番号: long
	Name	P	ファイル名の取得	R		ファイル名: BSTR

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
	Path	P	パスの取得	R		パス名: BSTR 絶対パス。ファイル名を含めない。最後の区切り文字は含める。
	Size	P	ファイルサイズの取得	R		ファイルサイズ: long
	Tag	P	タグ	R/S	タグデータ: VARIANT	タグデータ: VARIANT
	Type	P	ファイルのタイプの取得	R		ファイルタイプ: BSTR
	Value	P	ファイルの内容	R/W	データ: VARIANT	データ: VARIANT デフォルトメンバー
	VariableNames	P	変数名リストの取得	R	[オプション: BSTR]	変数名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY) オプションはフィルター条件等。
	Variables	P	変数コレクションの取得	R		コレクション: ICaoVariables
	AddFile	M	ファイルオブジェクトの追加	S	ファイル名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoFile CaoFiles::Add()と同じ機能。
	AddVariable	M	変数オブジェクトの追加	S	変数名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoVariable CaoVariables::Add()と同じ機能。
	Copy	M	複写	W	複写先ファイル名: BSTR [オプション: BSTR]	
	Delete	M	削除	W	[オプション: BSTR]	
	Execute	M	拡張コマンドの実行	S	コマンド: BSTR [パラメータ: VARIANT]	結果: VARIANT 機能拡張用
記号の意味	Move	M	移動	W	移動先ファイル名: BSTR [オプション: BSTR]	
	Run	M	タスクの生成	W	[オプション: BSTR]	タスク名: BSTR
M: メソッド P: プロパティ E: イベント				<ul style="list-style-type: none"> ・[]内は省略可能引数。 ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL。 ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ。 ・VARIANT 型の省略可能引数のデフォルト値は VT_ERROR。 		

◆ CaoRobot(s) Object — ロボット

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
CaoRobots (クラス番号: 9)	Count	P	コレクション数の取得	R	コレクション数: long	
	Add	M	ロボットオブジェクトの追加	S	ロボット名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoRobot
	Clear	M	全てのロボットオブジェクトの解放	S		
	IsMember	M	ロボットオブジェクトの登録確認	R	ロボット名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL
	Item	M	ロボットオブジェクトの取得	R	ロボット名/番号: VARIANT	オブジェクト: ICaoRobot
	Remove	M	ロボットオブジェクトの開放	S	ロボット名/番号: VARIANT	デフォルトメンバー
CaoRobot (クラス番号: 10)	Attribute	P	属性の取得	R		属性: long
	Help	P	ヘルプ	R		ヘルプ文字列: BSTR
	ID	P	ID	R/W	ID: VARIANT	ID: VARIANT
	Index	P	ロボット番号の取得	R		ロボット番号: long
	Name	P	CaoRobot 名の取得	R		ロボット名: BSTR
	Tag	P	タグ	R/S	タグデータ: VARIANT	タグデータ: VARIANT
	VariableNames	P	変数名リストの取得	R	[オプション: BSTR]	変数名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)
	Variables	P	変数コレクションの取得	R		コレクション: ICaoVariables
	Accelerate	M	SLIM の ACCEL 文の仕様参照	W	軸番号: long, 加速度: float, [減速度: float]	軸番号は, -1: 手先加(減)速度, 0: 全軸加(減)速度, その他は指定軸の加(減)速度.
	AddVariable	M	変数オブジェクトの追加	S	変数名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoVariable
	Change	M	SLIM の CHANGE 文の仕様参照	W	ハンド名: BSTR	CaoVariables::Add()と同じ機能.
	Chuck	M	SLIM の GRASP 文の仕様参照	W	[オプション: BSTR]	

クラス	プロパティ, メソッド, イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
	Drive M	SLIM の DRIVE 文の仕様参照	W	軸番号: long, 移動量: float, [動作オプション: BSTR]		SLIM のように同時に複数の軸を動かすことはできない。その場合は、MOVE を使うことを推奨。
	Execute M	拡張コマンドの実行	S	コマンド: BSTR [パラメータ: VARIANT]	結果: VARIANT	機能拡張用
	GoHome M	SLIM の GOHOME 文の仕様参照	W			
	Hold M	SLIM の HOLD 文の仕様参照	W	[オプション: BSTR]		SLIM ではプログラムの一時停止の意味だが、CAO ではロボット動作の一時停止を意味している。
	Halt M	SLIM の HALT 文の仕様参照	W	[オプション: BSTR]		SLIM ではプログラムの強制停止の意味だが、CAO ではロボット動作の強制停止を意味している。
	Move M	SLIM の MOVE 文の仕様参照	W	補間指定: long, ポーズ列: VARIANT, [動作オプション: BSTR]		・補間指定は、1: PTP, 2: 直線, 3: 円弧。 ・ポーズの指定は各メーカ依存。円弧補間の場合などは、配列になる。 ・動作オプションはのデフォルト値は""。
	Rotate M	SLIM の ROTATE 文の仕様参照	W	回転面: VARIANT, 角度: float, 回転中心: VARIANT, [動作オプション: BSTR]		回転面の指定は各メーカ依存。
	Speed M	SLIM の SPEED/JSPEED 文の仕様参照	W	軸番号: long, 速度: float		軸番号は、-1: 手先速度, 0: 全軸速度, その他は指定軸の軸速度。
	Unchuck M	SLIM の RELEASE 文の仕様参照	W	[オプション: BSTR]		SLIM の Release は予約語で使えないため Chuck/Unchuck に変更。
	Unhold M	SLIM の HOLD 文の解除	W	[オプション: BSTR]		SLIM では HOLD 文はプログラムの一時停止の意味であるため、再開のコマンドが規定されていないが、CAO ではロボット動作の一時停止を意味しているので、その再開に使う。
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ			・[]内は省略可能引数。 ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL。		

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
	E: イベント			・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ. ・VARIANT 型の省略可能引数のデフォルト値は VT_ERROR.		

◆ CaoTask(s) Object — タスク

クラス	プロパティ、メソッド、イベント		説明	R/W	関数の引数		備考
					IN	OUT RETVAL	
CaoTasks (クラス番号: 11)	Count	P	コレクション数の取得	R		コレクション数: long	
	Add	M	タスクオブジェクトの追加	S	タスク名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoTask	
	Clear	M	全てのタスクオブジェクトの解放	S			
	IsMember	M	タスクオブジェクトの登録確認	R	タスク名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL	
	Item	M	タスクオブジェクトの取得	R	タスク名/番号: VARIANT	オブジェクト: ICaoTask	デフォルトメンバー
	Remove	M	タスクオブジェクトの開放	S	タスク名/番号: VARIANT		
CaoTask (クラス番号: 12)	Attribute	P	属性の取得	R		属性: long	
	FileName	P	対応ファイル名の取得	R		ファイル名: BSTR	
	Help	P	ヘルプ	R		ヘルプ文字列: BSTR	
	ID	P	ID	R/W	ID: VARIANT	ID: VARIANT	
	Index	P	タスク番号の取得	R		タスク番号: long	
	Name	P	タスク名の取得	R		タスク名: BSTR	
	Tag	P	タグ	R/S	タグデータ: VARIANT	タグデータ: VARIANT	
	VariableNames	P	変数名リストの取得	R	[オプション: BSTR]	変数名リスト: VARIANT (VT_VARIANT VT_ARRAY)	オプションはフィルター条件等.
	Variables	P	変数コレクションの取得	R		コレクション: ICaoVariables	
	AddVariable	M	変数オブジェクトの追加	S	変数名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoVariable	CaoVariables::Add()と同じ機能.
	Delete	M	タスクの削除	W	[オプション: BSTR]		
	Execute	M	拡張コマンドの実行	S	コマンド: BSTR [パラメータ: VARIANT]	結果: VARIANT	機能拡張用
	Start	M	タスクの開始	W	モード: long, [オプション: BSTR]		モードは1: 1サイクル実行, 2: 連続実行, 3: 1ステップ 送り, 4: 1ステップ 戻し オプションは開始位置など.

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
	Stop M	タスクの停止	W	モード: long, [オプション: BSTR]		モードは0: デフォルト停止, 1: 瞬時停止, 2: ステップ停止, 3: サイクル停止, 4: 初期化停止 (注)デフォルト停止とは, 実際には何れかの停止方法.
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ E: イベント			<ul style="list-style-type: none"> ・[]内は省略可能引数. ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL. ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ. ・VARIANT 型の省略可能引数のデフォルト値は VT_ERROR. 		

◆ CaoVariable(s) Object - 変数

クラス	プロパティ、メソッド、イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
CaoVariables (クラス番号: 13)	Count	P	コレクション数の取得	R	コレクション数: long	
	Add	M	変数オブジェクトの追加	S 変数名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoVariable	
	Clear	M	全ての変数オブジェクトの解放	S		
	IsMember	M	変数オブジェクトの登録確認	R 変数名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL	
	Item	M	変数オブジェクトの取得	R 変数名/番号: VARIANT	オブジェクト: ICaoVariable	デフォルトメンバー
	Remove	M	変数オブジェクトの開放	S 変数名/番号: VARIANT		
CaoVariable (クラス番号: 14)	Attribute	P	属性の取得	R	属性: long	
	DateTime	P	タイムスタンプ(日時)の取得	R	タイムスタンプ: VARIANT	
	Help	P	ヘルプ	R	ヘルプ文字列: BSTR	
	ID	P	ID	R/W ID: VARIANT	ID: VARIANT	
	Index	P	変数番号の取得	R	変数番号: Long	
	Microsecond	P	タイムスタンプ(マイクロ秒)の取得	R	タイムスタンプ: Long	
	Name	P	変数名の取得	R	変数名: BSTR	システム変数名は@で始まる。
	Tag	P	タグ	R/S タグデータ: VARIANT	タグデータ: VARIANT	
記号の意味	Value	P	値の取得	R/W 値: VARIANT	値: VARIANT	デフォルトメンバー
	M: メソッド P: プロパティ E: イベント			・[]内は省略可能引数. ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL. ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ.		

◆ CaoCommand(s) Object — コマンド

クラス	プロパティ, メソッド, イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
CaoCommands (クラス番号: 13)	Count	P	コレクション数の取得	R	コレクション数: long	
	Add	M	コマンドオブジェクトの追加	S コマンド名: BSTR, [オプション: BSTR]	オブジェクト: ICaoCommand	
	Clear	M	全てのコマンドオブジェクトの解放	S		
	IsMember	M	コマンドオブジェクトの登録確認	R コマンド名/番号: VARIANT	チェック結果: VARIANT_BOOL	
	Item	M	コマンドオブジェクトの取得	R コマンド名/番号: VARIANT	オブジェクト: ICaoCommand	デフォルトメンバー
	Remove	M	コマンドオブジェクトの開放	S コマンド名/番号: VARIANT		
	ExecuteComplete	E	コマンド実行完了イベント		コマンド番号: long	結果は Result プロパティで取得する。
CaoCommand (クラス番号: 14)	Attribute	P	属性の取得	R	属性: long	
	Help	P	ヘルプ	R	ヘルプ文字列: BSTR	
	ID	P	ID	R/W ID: VARIANT	ID: VARIANT	
	Index	P	コマンド番号の取得	R	コマンド番号: long	
	Name	P	コマンド名の取得	R	コマンド名: BSTR	
	Parameters	P	コマンドパラメータ	R/W コマンドパラメータ: VARIANT	コマンドパラメータ: VARIANT	
	Result	P	直前の Execute() の実行結果	R	実行結果: VARIANT	
	State	P	状態の取得	R	状態: long	状態の1ビット目は, 0: 待機中, 1: 実行中. その他のビットはプロバイダ依存。
	Tag	P	タグ	R/S タグデータ: VARIANT	タグデータ: VARIANT	
	Timeout	P	タイムアウト	R/W タイムアウト: long	タイムアウト: long	
	Cancel	M	実行中コマンドのキャンセル			
	Execute	M	コマンドの実行		モード: long	モードは 0: 同期実行, 1: 非同期実行. 非同期実行のときは S_FALSE を返す。
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ E: イベント			・[]内は省略可能引数. ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL. ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ.		

◆ CaoMessage Object — メッセージ

クラス	プロパティ, メソッド, イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
CaoMessage (クラス番号: 15)	DateTime P	作成日時	R		作成日時: VARIANT	
	Description P	説明	R		説明: BSTR	
	Destination P	送り先	R		送り先: BSTR	
	Number P	メッセージ番号	R		メッセージ番号: long	
	SerialNumber P	メッセージ連番	R		メッセージ連番: long	エンジンで自動的に付加される0～LONG_MAX までの連番. LONG_MAX に達したら0にクリアされる.
	Source P	送り元	R		送り元: BSTR	
	Value P	メッセージ本文	R		メッセージ本文: VARIANT	
	Clear M	メッセージのクリア	W			
	Reply M	メッセージの返信	W			
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ E: イベント		(注1)	・[]内は省略可能引数. ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL. ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ.		

◆ CaoEngineStatus Object — エンジンステータス

クラス	プロパティ, メソッド, イベント	説明	R/W	関数の引数		備考
				IN	OUT RETVAL	
CaoEngineStatus (クラス番号: 16)	CurrentDateTime P	現在の日時	R		現在日時: VARIANT	
	ComputerName P	コンピュータ名	R		コンピュータ名: BSTR	
	ObjectCounts P	各クラスごとのオブジェクト数	R	クラス名／番号: VARIANT	オブジェクト数: long	
	StartDateTime P	開始日時	R		開始日時: VARIANT	
	Values P	(将来用の予約)	R	ステータス名／番号: VARIANT	データ: VARIANT	
	Version P	エンジンのバージョンの取得	R		バージョン: BSTR	<Major Ver.>.<Minor Ver.>.<Revision>
記号の意味	M: メソッド P: プロパティ E: イベント		(注1)	・[]内は省略可能引数. ・BSTR 型の省略可能引数のデフォルト値は NULL. ・数値型の省略可能引数のデフォルト値はゼロ.		

付録A.2. 用語集

■ CAO (Controller Access Object)

CAO とは、クライアントアプリケーションおよびロボットコントローラに対して、共通のインタフェースと機能を提供する「標準プログラムインタフェース」です。

■ CAO インタフェース (CAO Interface) (API)

クライアントアプリケーションに対して CAO が提供するロボットコントローラを操作するためのインタフェースです。“CAO API”とは、このインタフェースを指します。

■ CAO エンジン (CAO Engine)

CAO エンジンとは、CAO のインタフェースを実装したミドルウェア(EXE)で、クライアントに対して CAO プロバイダに対する共通の機能と CAO インタフェースを提供します。CAO プロバイダに対する共通の機能として、コレクション機能、メッセージ出力、CRD 切り替え機能等があります。

■ CAO プロバイダ (CAO Provider)

CAO プロバイダとは、CAO の下位モジュールで、ロボットメーカ各社に依存した部分を実装した DLL です。

■ CAO プロバイダテンプレート (CAO Provider template)

CAO Provider の実装をサポートする C++テンプレートです。このテンプレートは ProviderWizard で自動生成されます。

■ CAP(Controller Access Protocol)

インターネット経由で CAO プロバイダにアクセスするための「インターネット向け通信プロトコル」です。CAP では、SOAP を使用した CAO プロバイダにアクセスするためのメッセージを定義しています。

■ CAP プロバイダ(CAP Provider)

CAP メッセージの生成、送受信をおこなうための CAO プロバイダです。

■ CAP リスナ(CAP Listener)

CAP メッセージを受信して、リモートマシン上で CAO を動作させるためのサーバプログラムです。

- CAP メッセージ(CAP Message)
CAP により定義される SOAP メッセージです.
- CRD (Controller Resource Definition)
メーカーや機種によって異なるロボットのリソース情報を表現するための汎用のデータフォーマットを定義するデータスキーマです.
- CRD リソース (CRD Resource)
CRD によって表現されるロボットのリソースです.
- CRD データ (CRD Data)
CRD に従って記述されたロボットのリソースデータで, XML によって記述されます.
- CRD データスキーマ (CRD Data Schema)
CRD データのフォーマットを定義するスキーマです.
- CRD ファイル (CRD File)
CRD データの記述された XML ファイルです.
- CRD プロバイダ (CRD Provider)
CRD データにアクセスするためのプロバイダです.
- RAC
クライアントアプリケーションとロボット間で, コマンドの送受信をおこなうための規格です.